

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
平成十六年一月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷九二〇号

# 川柳塔



日川協加盟

No. 920

同人特集・私の一句

一月号

## 川柳塔創刊八十周年記念

# 合同句集 『川柳塔』

「川柳塔」は、大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成十六年で八十周年を迎えます。これを記念して、同人・誌友を中心とする合同句集『川柳塔』を発刊いたします。合同句集は昭和四十九年以来、十年毎の刊行で平成六年の誌寿古希記念につづく第四集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎いたします。一人でも多くの御申込みを心からお願ひ申し上げます。

★刊行 七月七日 ★締切 四月二十日（火）

★体裁 B6判・約五百ページ・上製本

★参加費 五千元（句集一冊呈）

★掲載句 一人十五句（自選）

★申込 所定用紙に掲載句（平成六年以降の発表句

または未発表句）を記入し、参加費を添えて川柳塔社事務所へ。なお、参加費は同封の払込用紙でお願いします。

〒545-0005

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六  
ウエムラ第二ビル二〇二号室

川柳塔社

電話 〇六―六六二九―六九一四

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

# 美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

# 齊藤大雄 at 鹿野

河内 天笑

「その頃はまだ大衆川柳論は唱えてませんでして、『情念の大雄』なんて粹がつてましてね——」その頃——というのは小樽の住吉神社に五呂八の句碑を建てた時の事らしく、比較的短い前置きから本論へと進んだ。あちこちの川柳大会では賞を獲得するのが当然の様な若かりし日の大雄氏。川柳に対する文学的位置づけの低さを憂えて、この状況を昇華させるべく川柳の入門書を手がけていた頃、田中五呂八の「新興川柳論」に出くわす。「二千円で買いましたよ、貧乏なれの私」が、生涯の進路を決めるような書物に出会った大雄氏は「これだ!」と震撼されたのです。以下十二月七日の鹿野町での氏のお話を紹介します。

人間を握れば風が手にのこり（昭和四年）五呂八。この句を選んだのも私です。よ、石だけで五十万もする立派な句碑だから参拝客も見てくれましたよ。そして口ぐちに「どういこと、この句」「人間つかめるの」「どうして風が手にのこ

っちゃうの」。心象句だから説明したつてワカラナイ。その頃、私は川柳の究極はこれだ。作者と読者が合体してドラマが生まれるんだ。なんで人間が争うんだ、いがみ合つて何が残るんだ、何も残らないじゃないか、一陣の風がすーと抜けただけ——と私は解釈した。

田中五呂八は大正デモクラシーが成熟するもとで井上剣花坊の「大正川柳」に投稿をはじめ（24才頭角を表し、既成川柳を批判、中央の六大家を論難した。また古屋夢村、木村半文銭、森田一二、鶴彬などの共鳴者を得て柳壇に刺激を与えた。が昭和十二年軍部の圧力で終息した。

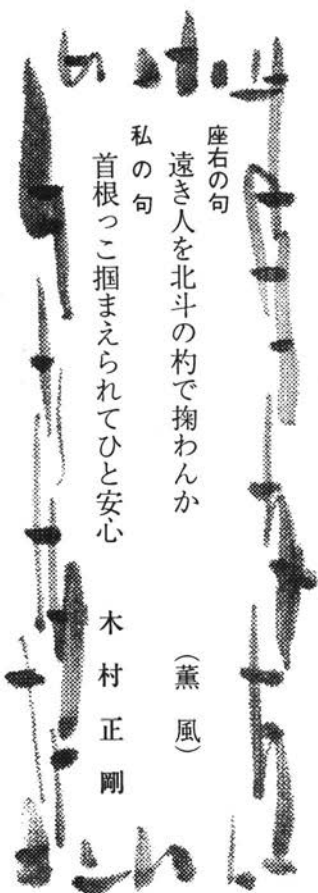
「風の橋風光らせて会いにいく」、現実の世界にはない世界へと観念的に自分が創造していくのです。きつと風は橋をつくつてくれるだろう。そしたらその橋を渡つていけばいい。風の橋だから私が風になれればいい。そして「今だ」と歓喜に満ちて私の風を光らせて橋を渡つて会いに行つた、というドラマなんです。この人はうちの同人で右足を切断してるとです。皆と話をしたい。愚痴の一つも言いたい。句の一つも褒めたい。だけど一人で句会に行けない。——こう解説すれば素晴らしい作品でしょ。ですけど一般の人達おそらく九十九%の人はワカラナ

イ。今、私はたくさん教室を持っています。私の解説を聞いた生徒さんはこの句ワカリマス。

「チヨコバフェのてっぺんに吊る反戦歌」これ、市長杯を獲得しました。でも仲間だけが分かる句、それじゃ駄目だなと気付いたのです。

昨年四月北海道で民放に対抗するNHKのワイド番組がつくれ、目加田頼子というキャスターと川柳欄を設ける事になって私に話がかかり、皆さんから川柳を募集しました。いい機会だからここで川柳を説いて行こう。川柳の文学性を一般に理解していただく。ところがNHKだからいろいろチェックがあります。差別語がないか、老人に愛情あるか、それで私は「川柳大賞の一句は絶対に変えません。」と言ったら、佳作の作品を「かえさせて下さい」と私に言う。「ナンデよー」と最初思つたんですけどここで喧嘩すると降ろされてしまう。我慢しよう。でもね、私の選んだ作品をアナウンサーもプロデューサーも意味が分からんと言ってます。

技巧から平明へ、観念から具象へ、そして皆さんが楽しめる句へ、平易な句、平凡の中の奥行きのある句へ。むつかしいですけど。



座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

首根っこ掴まえてひと安心

木村正剛

## 川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 齊藤大雄 at 鹿野

しばらく憩う本の中

川柳塔 (同人吟)

自選集

水煙抄

私の一句 (同人特集)

麻生路郎物語 (25)

愛染帖

俳風柳多留二四篇研究

茴香の花

河内天笑……(1)

奥田みつ子……(2)

河内天笑選……(4)

板尾岳人選……(53)

東野大八……(91)

波多野五楽庵選……(104)

藤田泰子選……(96)

波多野五楽庵選……(104)

藤田泰子選……(96)

藤田泰子選……(96)

## しばらく憩う本の中

奥田みつ子

昨夏のこと、特別の理由もないまま「骨は大丈夫」と思い込んでいたのに、捻挫で足の骨にひびが入ってしまった。あまりバタバタするなという神様の思し召らしい。かかりつけの内科の医者は「おとなしく家で本でも読んでいたらく、その内治りますよ」と事もなげに言う。いくら一人住まいでも、しなければいけない事はいろいろあり、おとなしく本ばかり読んでいるわけにはいかない。

足を痛める前に紀伊国屋で何気なく手にした『ちくま日本文学全集・幸田文』が面白くしばらく幸田露伴とその娘の世界に浸った。この親にしてこの娘ありとしみじみ思った。人一倍敏感な神経の持主であるが故、余計にいやな思いをする娘の打明け話に、父は「おまえは重い女だね」と言った。「重いつて何です」「何だと聞くようじゃいいよ重い。おまえの心が居しかっている(どっしりと腰を落ち着けている)から物が滞る。水の流れるようにさらさらしくないけな」と答えた。と記されていて、とても興味をそそられた。「重い女」「水の流れるようにさらさらしくなくちゃいけない」と私は何度も読み返した。



「輝く」

米田恭昌選……(98)

一路集「てのひら」

佐野木みえ選……(98)

「氷柱」

緒方美津子選……(99)

初歩教室「今年」

三宅保州……(100)

秀句鑑賞

「同人吟」  
水煙抄

小島蘭幸……(102)  
宗水笑……(107)

十二月本社句会

神夏磯典子……(112)

浦田綏子さん安らかに

……(113)

各地柳壇(佳句地十選/児玉蛙)

……(167)

柳界展望

……(170)

一月各地句会案内

……(170)

■編集後記

楓葉・希久子……(170)

座右の句

火をつけた女 特等席にいる

(天笑)

私の句

穏やかな日です海峡も愛も

和田 つづや

以前から続けている読書グループで、養老孟司「バカの壁」を読んだ。解剖学者・養老先生の目から見た世の中のさまざまな事柄が取り上げられている。中でも特に興味深かったのは、一般に情報は日々刻々変化しつづけそれを受け止める人間の方は変化しないと思われがちだが、人間を含め万物は流転し、情報は不変ということだった。昨日の私と今日の私、去年の私と今年の私は明らかに違うはずなのに「私は私」と思いこんでいる。それに対して情報、たとえば作品・句は十年前に作った句は変わらず、同じ形で残っている。だから路郎先生は「いのちある句を創れ」「一句を残せ」と言われたのである。『方丈記』の冒頭の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」を引くまでもなく、人間も世界も万物流転である。いい意味でも悪い意味でも、他人も自分も変わるものと今更のように思った。

そして、また一冊、面白い本が舞い込んできた。丸谷才一の『輝く日の宮』である。今まで丸谷才一は敬遠してあまり読んでいないが、この本には他の本とは違う不思議な魅力があつて、部厚い一冊をワクワクしながら読み終えた。

あれこれ、本を読んでいる間にどうやら足も治ってしまったらしい。



河内天笑選

八王子市 播本充子

申歳の初日に思う自然体  
目的をもって年年若返る

川柳が特等席にいる新居

サークルがそろそろ芽吹く南風

どの孫も愛しすぎないように抱く

スランプも楽しよく食べよく眠る

鳥取市 近藤佳子

ひとつ山越えたよろこび明日へ抱き

振り返る事にも飽きて来た傘寿

母の忌よ白の侘助見て飽きず

ベッドから人の心が透けて見え

いい友に出逢うて明日が見えてくる

曼珠沙華立って歩けぬ日がよぎる

鳥取市 有沢せつ子

子供らは健康食に素っ気ない

夕焼けをいっぱい吸った柿届く

好きな道なのに度たび挫折する

失敗をしてから部下に慕われる

ペアルック婦唱夫随のよう見える

プライドが覗く大きなイヤリング

東かがわ市 神保坊太郎

浦島の玉手箱には請求書

踊る妻 家で見たことない元氣

この店の釜上げを恋う途中下車

身の程に合った幸せ茸めし

つじつまをピツタリ合わせ眠れない

私を消すとつじつま合ってる

羽曳野市 三好専平

宇宙流 夢のある碁にあこがれる

だんだんと皺が皺しわになつてくる

たたかいに美学があつた一騎打ち

雲海の上を歩いてみたくなり

三振をしても大器は悪びれず

角がとれ役に立たないネジマワシ

米子市 澤田千春

妥協して心の海が凪いできた  
身の内の他人が意見言いすぎる  
ねじ巻けば息吹きかえす大太鼓  
夜あけにはまた歩くのだ眠らねば  
ほどほどのときめき脳の風となる  
球根と話して植えるチューリップ

鳥取県 原

みさを

初日の出ただそれだけでありがたい  
おみくじは中吉ちようどいい歩幅  
新しい冷たい水で顔を剃る  
迷ってもやがて磁石は北を指す  
裏切らぬ犬を一匹飼っている  
あれもだめ これもだめの世また来そう

広島県 藤解静風

近寄れば油の匂いせし母よ  
ひとりの刻が好き一本杉もほくも  
霧の向こうで人が生れるひとが死ぬ  
年寄りはいや惚れっぽい飽きっぽい  
やわらかい言葉の釘が応えまず  
いのちがけなどの言葉に酔わされる

八尾市 生嶋ますみ

大安の結婚 秋のどまん中  
カレンダ―の丸は介護を忘れる日  
信号がウインクしてる走れない

脚線美孫も正座のできぬ膝

説明書行きつ戻りつ繰る吐息

手をかけた分だけ咲いてくれる菊

京都市 高島啓子

今年また流されそうなお元旦

日本酒がうまいと古稀を過ぎてから

今風のネタは取らない回り寿司

深層水飲んで魚になる気分

男性のじつと見ている美女をみる

交叉点ホームレスから買う雑誌

弘前市 高瀬霜石

一分がこんなに長い待ち合わせ

いざという時に見つからないティッシュ

ああ中年病気の数を自慢する

生きている眼鏡かけたり外したり

嘘と嘘きれいな方が負けるだろう

考えてみてもどうにもならぬ金

大阪府 西出楓楽

目刺しふと思うコーラスコンクール

ビールでは李白杜甫にはなり難し

恐ろしい人だ失うもの持たぬ

生命線くつきり旅はまだ続く

あこがれは美女よりむしろいいおんな

民主主義加害者ばかり守られる

大阪市 小林 トメ子

先代の柱時計は老化せず

シュレッダー買いながら手で裂いている

ヘルパーさん顔はおぼえて名を忘れ

お位牌に相談してる未亡人

タクシーに乗り行先の名刺見せ

大阪市 古今堂 蕉子

一万歩歩けとだけの処方箋

かけっこもなわとびもした足なのに

角曲るまで見送るのが我が家流

別れずに四十年目お正月

久し振りに見た夢追いかけられる夢

大阪市 神夏磯 典子

月並みな暮らしを願ひ屠蘇を酌む

自分への太鼓力を込めて打つ

猿知恵を借りて今年も走ります

説得力嫁の訓示を信じよう

ばあちゃんは猫とばかりキッスする

大阪市 鈴木 トヨ子

再会の約束がある初詣で

選挙戦世相変えると叫んでる

ディサービス心の温みゆさゆさと

詰将棋爺ちゃんの目が光り出す

難病の子に命投げ出す母の愛

大阪市 板東 倫子

大雨のお別れもよし星野さん

本論がぐらつき出したマニフェスト

投票率聞いて選挙の意欲萎え

爆弾のようなお方ですぐはじけ

太陽の黒点 地球にわるさする

大阪市 川久保 睦子

媚びるのはやめよう新春の誓い

ピアス穴 才能ポロポロこぼれ落ち

運試し欲が絡んだ福袋

落ち込んだ時ほど笑い忘れない

ノートパソコン 熱い想いを軽く打つ

大阪市 小糸 昭子

他人事のように地震に慣れてくる

続け様くしゃみ七発風邪小僧

どうしようインコがみんなしゃべってる

どしゃぶりで転んで笑う他は無い

露天風呂昇る朝日は音立てる

大阪市 本間 満津子

愚痴ごとと感謝もみんな川柳に

お父さんやれやれ雨の寝て曜日

自慢の病気わたしはもったときつかった

よくよく噛んで満腹感のダイエツト

堅人に二次会誘いかからない

大阪市 津村 志華子

年あらた女の夢をふくらます  
幸せはわたしの脈がリズムカル  
雑念を捨てると肩が軽くなる  
胃ぶくろも背も縮んでたクラス会  
のど元をすぎると恩が遠くなる

大阪市 前 たもつ

七回りへ猿の知恵かる年男  
吊されて玉葱意地の芽をはらむ  
みみず好き悪さをせずに土肥やす  
ケイタイを持たず時々借りている  
一端の審査の顔で菊花展

大阪市 寺井 東雲

飛びはねる波を知らない深海魚  
わんぱくも今は社長でおとなしい  
雨の音二人で聞いて楽しかる  
一呼吸置けば目先が見えてくる  
ペンキ塗り立て小指でそつとなぜて見る

大阪市 川原 章久

赤札に落ちて口惜しいにらみ鯛  
正月の音にも馴れた露天の湯  
静寂を破る厳しい能の笛  
元旦のおみくじ凶は抜いてある  
落書きの中で拾った未来の図

大阪市 岩崎 公誠

実弾を積まれ強気が揺れ動く  
大物になれぬ小物がよく騒ぐ  
屋上に妻の仮面が干してある  
慢性の金欠病が棲みついた  
年金の中流仲間愚痴並べ

大阪市 鶴田 遠野

改めて妻に出してるマニフェスト  
金無心一言で断ち酒にする  
故郷帰り冠婚葬祭だけになり  
微笑まれました思い入れ深くなり  
軽口をたたき火の粉が降りかかる

大阪市 川端 一步

戦争の序曲か憲法がゆらく  
風に舞う落葉がきれい大阪城  
いずこにも若葉が息吹く春うれし  
三文の得 莊嚴の初日の出  
充電は仲間といっしょ春の酒

大阪市 奥村 五月

新妻のまずい料理にならされる  
僕じゃない酒をほしがる腹の虫  
口荒いおやじの握るうまい店  
ダルマの目忘れ議会で昼寝する  
優しいが妻が黙ると恐ろしい



大阪市 安 達 はじめ

お年玉親を越す背でかしこまり  
傘寿きて賀状の束も瘦せてくる  
七日粥二人三脚今日を生き  
人間の弱さが見える絵馬の数  
戎さん景気よくても悪くても

大阪市 小 泉 ひさ乃

三猿で節目を越える年女  
ラッシュ抜けやれやれ靴が軽くなる  
黄昏れてまだまだドラマ続いてる  
翔んで見る所詮夫の手の上で  
勤められ犬と同じ整腸薬

大阪市 大 川 桃 花

ばあちゃん子ゆっくり話す子に育ち  
ネジ穴が見つかりほっとしてる捻子  
期待するほどには安くない産地  
舞子さん櫛かんざしにある季節  
お荷物にならぬつもり山歩き

大阪市 杉 澤 汀

柏手に気力をこめる初詣で  
ありがたや朝から呑める三カ日  
あるときは三猿になる老いの知恵  
奥山は雪よと猿が下りてくる  
竹割ったような男で耐が好き

大阪市 津 守 なぎさ

片付けもプラン通りにはかどらず  
素晴らしいビジョンくつきり八ヶ岳  
宝石を眺めるふりでゼロ数え  
最少限詰める荷物の旅前夜  
泣き上戸知らぬ間に友が減る

大阪市 津 守 柳 伸

群生のススキさやさや雲流る  
我ながらよくぞ生き抜く歳女  
元旦の日の出予想の露天風呂  
青シート目立つ行楽ススキ原  
結局は古巣に帰る血の絆

大阪市 松 尾 柳 右 子

健康に感謝の湯宿鳥が啼く  
色々と食べて飢餓の子思う秋  
夫婦してウォーキングに旨いめし  
働ける身体と客に感謝する  
ハチマキと帽子の違いなんだろう

大阪市 榎 本 日 出

また一つ歳が増えたと喜んで  
出不精が出過ぎとなつて若返り  
若い時ライバル今は無二の友  
旅で見た風景と会う美術館  
故郷が恋しくなつて墓参り

大阪市 榎本舞夢

カラヤンになったつもりで舞台立つ  
調子よい日の失敗は苦にならぬ  
物忘れ助け合いつつ古稀の旅  
海底にロマンひそむか熱海沖  
役者並手帖片手に会う日決め

大阪市 中澤伽羅

宇宙から青い地球を見てみたい  
光年もミクロマクロもピンと来ぬ  
松茸へ執着心が薄らいだ  
ゆっくりと出来ない趣味に嵌り込み  
十二月また来年に回します

大阪市 伊藤博仁

曲がり角金もくせいが鼻つかむ  
松茸の匂いを嗅いでしめじ買う  
物置の水仙の芽にせつつかれ  
辺りみて深呼吸してバンク出る  
なんとまあ運のよい蚊だ読経中

大阪市 西川更紗

身だしなみ整えてから医者に行き  
ローカル線一駅ごとに秋深く  
さりげない指のポーズにある含み  
墓参りペットの墓もはなやかに  
チビッ子もスタイルだけは決めている

大阪市 熊代菜月

法話聞く心に迷いあるままに  
手術室俎上の鯉になる私  
燃えつきたはずだったのに紅を買う  
年毎に大きな夢を見なくなり  
子離れの出来ない母の日記帳

大阪市 星野きらり

鯛が急げ急げと囁いたて  
赤トンボ露風の詩が口をつく  
ウォーキング生きてましたか良い仲間  
モンブラン征服してる喫茶店  
オアシスはやっぱりわが家大の字に

大阪市 米澤俣子

懸命に生きて余力がまだ少し  
憎まれ口叩く間は呆けてない  
イエス・ノーのはざまで答揺れている  
郷愁は菱の実採りの盥舟  
欲しい物何にもないと嘘ばかり

大阪府 桑田ゆきの

てのひらに赤ちゃん言葉載せている  
ネックレス輝き首の皺隠す  
てのひらを合わせられ介護辛くなる  
神鈴の冴えたる音に福握る  
今年こそ嘘を書かない日記帳

大阪府 澤田和重

生真面目な顔をしてるが女好き  
流されてワラ一本にしがみつく  
顔ただけで私も共犯者  
鳩尾にこたえる妻の愚痴を聞く  
散骨は故郷の山と決めてある

大阪府 野田栄呼

ゼロひとつ外せば買える私にも  
もう食えぬゲップが断り言つて来た  
国民も小泉さんにあきをみる  
畑荒らす鳥一枚いつも上  
食べ放題ため息残し胃はひとつ

大阪府 粗山隆盛

百歳の始動へ交わす春の酒  
恋の絵に二つの影を映す月  
浮き雲よ茜の空を通過中  
運動に家事一切を励む夫  
リアルな姿 技芸天女の腰の線

和泉市 中川楓

児の誰かいつも横向く初写真  
新米高値 旅行の宿は米所  
仕切り屋の長女気質に疲れ出る  
かさこそと一人が嬉し落葉道  
生き様を見よとすつくとして冬木

茨木市 藤井正雄

忍の虫飼い馴らされて三十年  
村祭りでかい巻き寿司の味  
髪を切るためらいを切る恋を切る  
休肝日酒にビールのコマーシャル  
ナイター観戦機嫌不機嫌紙一重

大阪狭山市 矢野梓

過去形の話が続くクラス会  
好きだった友いつまでも忘れない  
折々の思い出スーツ捨て切れず  
聞き慣れて見た事がない億の金  
こだわりの中でプライド揺れ止まず

柏原市 永浜加津子

雨三日堅いせんべい噛みしめる  
目覚めからいそいそさせる上天気  
スナップの後姿に老いを見た  
晩秋の紅葉に染まる一人旅  
ちよつとの間居眠り出来る旅上手

交野市 山川日出子

忍耐を教えてくれた古時計  
ひつじ雲お迎えに行くさるの国  
初成功中国有人宇宙船  
当選のシユワちゃん見事加州知事  
宮家詐欺派手なシナリオ黒い幕

交野市 森 本 弘 風

診察へ血圧上げて待つてます

血圧が今朝は寒いと跳ねている

土瓶蒸し松茸らしいものもある

花の苗沢山買うてウサ晴らし

六十五妻も年金貰う歳

河内長野市 山 岡 富美子

日めくりを愛おしんでる秋の底

藤村の少女はいない林檎園

まだ母を越えるレシビが見つからぬ

握手してカウントされる選挙戦

挨拶に育ちの良さのでる茶髪

河内長野市 加 島 由 一

相思相愛笑う絵文字の初メール

七草を摘みにスーパ―はしごする

一月は禁酒できない月である

炬燵にはミカン私は発泡酒

初夢は馬とゴルフと吟醸酒

河内長野市 石 堂 潤 子

居直つてふくらさんで通します

いい人の持ち味人を和ませる

答案紙白紙の夢を今も見ろ

コーヒー豆替え家中で吟味する

冬苺つんつんケーキがおいしそう

河内長野市 村 上 直 樹

あめつち  
天地の恵みとろりと般若湯

一票の軽さに泣いて千鳥足

八つ当たりひよいといなしして妻の勝ち

ケセラセラ憂さも嘆きも明日の日も

犬掻きで渡る世間に怪我はない

河内長野市 水 谷 正 子

若者の姿みかけぬ投票所

十対三 女が強いクラス会

その話去年も聞いたクラス会

ふところが自慢話に堪えている

今年こそ上手にしよう猿芝居

岸和田市 井 伊 東 吉

寒暖に色付け迷う紅葉の木

稲泥棒案山子黙って見てるだけ

興醒めの四番集めが始った

星野去り早や心配のトラファン

七光り世襲候補が頼りない

岸和田市 岩 佐 ダン 吉

鰯つみれ束の命を食べている

バランスを気にして実のない話

勝ちなさい豊かになるという総理

小指にまで思いを込めて母擦る

消費税だけに頼っている愚策

岸和田市 原 さよ子

ひとすじに生きて叙勲の栄を受け（夫勲章を受ける）

伝達式妻を伴うことに照れ

勲章と並んで妻も写される

百円が心を軽くする募金

無為無策また一年が走り抜け

堺市 志田 千代

せかせかと書きゆつくりと読む賀状

寒がりの私の好きな雪景色

お年寄り十年日記買っている

三歳で鯛の目玉の味を知る

拭わずにオットットウとする酒

堺市 山本 半錢

親子猿 鈴も目出度き三番叟

産み育て地球は回る太古から

湯に沈む女菩薩の形して

薄衣のスキンシップに癒される

無から産む苦しみだらう原稿紙

堺市 西村 りつえ

マニフェストに小首かしげているチワワ

芋 大根我が家の味にしむおでん

迷いから出られなかった羊雲

木登りもスローライフになった申

にこにこと串柿も待つお元旦

堺市 村上 玄也

年明けただけで気持ちも改まり

妹はやっぱりで真面目過ぎる兄

年賀状秘書に書かせたらしい文字

ワープロのせいで読めても書けない字

腕組みをしても名案浮はない

堺市 宮本 かりん

深呼吸たつぷり朝の空気吸う

さりげない言葉に心洗われる

雑念に追い回されて今日も暮れ

緊張が解けて出てくる大あくび

貼り紙をするなど書いて貼ってある

堺市 矢倉 五月

外出が続きおしゃれもスキが出る

すぎるならちよつと太目の人がいい

このページだけの立読みゴメンナサイ

買う前に先ず百均で搜してる

初七日が過ぎた人から来た賀状

堺市 柿花 和夫

キリギリス鳴かずに秋となる不安

晩秋に心寂しく美術館

羨ましい男の美学星野さん

妻は旅行テレビ朝までつけたまま

マニフェスト妻は今でも忘れない

堺市源田八千代

吹田市野下之男

姫孫が生まれ華やぐ春の膳

宮参り由緒正しい太鼓橋

羽子板に添え初めてのお年玉

ヘルシーな赤ワイン飲み弾んでる

呆け防止 三猿の真似せんとう

堺市和田つづや

寒風に赤提灯がなお赤い

妻の目が正面にあり畏まる

縄のれんには恐妻家居ぬらしい

恋でなく倒けないための手を繋ぐ

神様の影を踏んだか風邪をひき

堺市齋藤さくら

迷惑なメールが眠り妨げる

食前に飲んだワインで酔うてはり

車での外食しなくなっている

コロッケも酒も旨いとおだてられ

カルチャーで人の心も教えられ

四條畷市吉岡修

カルテには頑固な奴と書いたよう

狙われるもの何も無し情けなし

支持率が背中を押している自信

棚飾るどのカップにも火のドラマ

八頭身少しお高いのも許そ

猿山も何事も無く初日の出

中流で玉なす汗を忘れてる

月毎に誌面で会える知らぬ人

差し向かう人が居なくて昼の酒

向かい合い美人が座る良い電車

吹田市穴吹尚士

雑兵の辛苦を社史は語らない

事なかれ主義のネクタイ締めている

居酒屋で乾いた脳に給油する

落城が間近に迫る資金繰り

覚えないアダルトサイトの請求書

吹田市大谷篤子

言い分は先ずゆつくりと受け止める

満月に昼のくやしさとけてゆく

待っていた鈴を鳴らして秋が来る

あるがまま あるがままにと日を送る

大好きな人にも車間距離を持ち

吹田市早川棲世

昭和ならいくさ始まる十六年

農家は田教師は人をつくらぬ世

社交下手で無意味なことを言えぬ性質

戦後ひと知れず神様衰弱死

現代詩今や破礼句を越す描写

吹田市 太田 昭

力んで来た老後のギアを切り替える

言い足りぬ言葉を包み友は逝く

旅の恥かき捨てにしてバスに乗る

焼香に見覚えのある顔並ぶ

継ぎはぎの言葉で友を慰める

吹田市 瀬戸 まさよ

医療ミス水杯を覚悟する

コーヒーの苦さ疲れのバロメーター

メールでは違った人になる怖さ

離し飼ひ卵も値打ちある自由

現代に三猿主義は捨てられる

吹田市 山本 希久子

またひとつ角を曲って年明ける

九十五歳の母を寿ぐ雑煮椀

前向きになろうなろうとする影絵

冬の情けに人肌ほどの爛

新しいこと新しく初日記

高石市 浅野 房子

少しずつ新陳代謝する句会

湧いて出る言葉はみんな死語である

手を焼いた子供の世話になっている

行き当たりばったりで生きそして死ぬ

一年に二回電話をかけてくる

高槻市 乙倉 武史

落選の憂き目不徳で片付ける

頷いてばかり寂聴聞く法話

定年のない趣味愉し有難い

三振は覚悟人生奔放に

逸材と見抜くスカウト目は確か

高槻市 傍島 克治

気配りをおせっかいだと言わないで

度を越せば楽しいことがたとある

本年も酒税沢山ありがとう

あつてはならぬの謝罪が多過ぎる

寒いけど大根うまい冬が好き

高槻市 井上 照子

いいことが表から入る大安日

渋柿を吊し疎開地を偲ぶ香

生きてたね生きていたよと半世紀

約束を反故にさせない釘をさす

ご一緒のあなたが恐い暗い道

豊中市 岸田 知香子

立冬の温さ気になる秋日和

家中にイ草ただよう畳替え

植え替えたハイビスカスが狂い咲き

張り替えた畳 襖で小屋あらた

独り者問答無用マイペース



豊中市 山門タミ

富田林市 中崎深雪

狭い部屋伝い歩きに便利です  
車椅子ルンルン買物膝に抱く  
テレビ観て物知りになる老いの日々  
幸せは日の出拜んで深呼吸  
久し振り商店街の意気もうう

豊中市 吉田 あずき

十五年経てば昭和もずれてくる  
ねばらない子に育ちゆくワンタツチ  
つまずいた段差は信じられぬほど  
あの爪で家事は出来ぬと女のみ  
芝居小屋はねた余韻のそばの味

豊中市 安藤 寿美子

三猿の逆の連中ばかりです  
人の世に逆転があり楽しけれ  
一年一年時をいとしみながら生き  
さわさわと鳴る森の中深呼吸  
池ざらえこわい魚があらわれる

富田林市 大橋 鐘造

影武者のままで終った父の背な  
長電話老いの命の糧にする  
辞書にない答がきつと何時か出る  
口喧嘩一人はつちでない証拠  
食べるだけ有ればと金は残さない

職退いてスロウライフが面白い  
雑草で活け花を考えてみる  
お節きれいに詰め写真撮っておく  
終わっても余韻が席を立たせない  
言霊がこわい悪口やめとこう

富田林市 中井アキ

端くれに淡く私の自尊心  
私を映すと熱くなる鏡  
一日をピエロで通す白い嘘  
一匹の蟻が背負っている絆  
絵画展出てゆつくりと掛うどん

富田林市 片岡 智恵子

面倒見すぎ野心と誤解され  
濁ってきた池は前より住みやすい  
寝たままでサイレンを追う消防車  
焼きいもがマロングラッセより旨い  
おもちゃ売場通ると孫をふと思ひ

富田林市 藤田 泰子

原点に還ってみよう猿の年  
古稀の坂 柿の種よりにぎり飯  
猫抱いて独り芝居の独りごと  
人恋し涙を流す久しぶり  
同じ歳恋の悩みを聞かされる

寝屋川市 堀江光子

一夏を海映さずにサン格拉斯  
トキ去って美しいもの一つ減る  
復興の破壊ほどには捗らず  
枯山水求め尽した果てならむ  
歳とるもよし漱石を読み返す

寝屋川市 坂上高栄

リストラに我がシナリオが黄昏れる  
子育てを投資と思う親のエゴ  
栗拾いあのとときめきを夢に見る  
刈り跡の一際映える千枚田  
向日葵と微笑み交わす昼の月

寝屋川市 平松かすみ

押し入れにもう登らない孫娘(十四歳)  
娘も孫も私も今年忙しい  
美術の館一・二・三階小半日  
題名はエロス縦横斜めから  
犬と龍 対称的な目玉なり

寝屋川市 高田博泉

人相が悪くなってきた白髪  
炊事場の妻いきいきとして若い  
賽銭を入れてこりずに夢を見る  
くらし向き変わらぬままに白髪増え  
パソコンへ父の挑戦いつ終る

寝屋川市 籠島恵子

やさしさごっこ絵になつているレストラン  
枯れそうにならぬと気付かないあなた  
結局は自分で守るテリトリ  
七曲りすぎたあたりで油断する  
たそがれへいよいよ夫と歩を合わす

寝屋川市 森 茜

こがらし一号律義に火星またたきぬ  
カナディアンロッキーズ先ずはエルクに迎えられ(カナダ 2句)  
紅葉のまつ只中にいて不動  
忘れてた頃に札状届くなり  
捻子ひとつ落としたような身のこなし

寝屋川市 江口 度

うまい水あげますスーパード流行る  
ドミノ倒しのように噂が広がった  
どうしてもずるくはなれぬかたつむり  
天高くバンドの穴が一つ増え  
百均へ風呂敷持つて気晴らしに

寝屋川市 山本三郎

ふと目覚め妻の軀に眠れない  
的外れそんな意見は無視をする  
百までは生きると母の万歩計  
一合の白湯で薬を飲めと医師  
行方不明みんな拉致とは限らない

羽曳野市 吉川 寿美

初対面互いに響くものがあり  
ほどの距離を保って凡な幸  
目を入れたダルマの鼻が上を向く  
B面に人間臭さ滲み出す  
少しずつ夢を齧ってゆく月日

羽曳野市 安芸田 泰子

一人居の窓に干柿ひとならび  
うらうらと猫と日向を分かち合う  
糠床に手を入れ主婦の座を守る  
父さんより大きく画いたお母さん  
役に立つことを知らない粗大ゴミ

羽曳野市 徳山 みつこ

両眼のダルマをちゃんと見ていよう  
ハンドルはどうか戦のない方へ  
時どきは駄々をこねますカスミ草  
病院の合間あいまを翔んでいる  
再びを信じて息子へのエール

羽曳野市 酒井 一壺

きつと来るチャンスを待つて積み努力  
ワンチャンス生かして夢を実現す  
さんざんに遊んだ果ての渋いのど  
吉報へ驚きおさえ聞き直す  
窓際の人は何でも知っている

枚方市 安達 忠央

ひと玉の素うどん老舗手を抜かず  
飾り気も要らぬ若さの玉の笑み  
名月が青テントにも煌煌と  
月の出はメルヘン匂うなつかしさ  
名月に核思わせる世情なり

枚方市 海老池 洋

羊雲 天のお祭りかも知れぬ  
コンパスの芯がうろろして困る  
思い出し笑いの種もある日記  
心にもぼつと灯りのつく夕日  
ああ夕日この世あの世を思うなり

枚方市 寺川 弘一

2で割れる合コンだから盛り上がる  
昭和一桁生まれと言つて嫌われる  
味噌汁もスープも濃くて豊かな世  
ヒト科だけ遊びと仕事区別する  
迷つたり一切しない盲導犬

枚方市 二宮 山久

紅葉の舞うや散歩のペアシューズ  
幸せをかみしめ年金ふと思う  
野の花に心うばわれする散歩  
ライバルはまだまだ勤めている定年  
留守電に孫の声聞く旅帰り

東大阪市 指宿 千枝子

値札見てバーゲンを待つ年の暮れ

毎日の元気をもらうゆで玉子

ばあちゃんも孫の高さでシャボン玉

夕焼けの歌で日暮れるひとり旅

この世へもあの世へも旅ひとりです

東大阪市 北村 賢子

まごころに閉ざした心揺すられる

やんわりと心をいやす故郷の風

指切りの友も五人のおばあちゃん

ともかくも生きてることのありがたさ

拾った命輝かせようルミナリエ

東大阪市 谷口 義

真っ白いハンカチだつて裏がある

恙なく暮らすのにおくすりがある

天高く本屋さんには本がある

フランスパン噂話を聞いている

簡単に丸くなれないわたしです

東大阪市 笠井 欣子

喫煙車一番先に探す人

スリッパが二階へ身売したまんま

八十はまだこれからと励まされ

チグハグなセンスで揺れるイヤリング

私かてええとこあると慰める

合格をいの一番に仏様

祖父の部屋テレビ音響でかくなる

その笑顔義歯のおかげで若くなり

減塩で我が家のみそに仕立て上げ

甘やかして育てた子には悩まされ

藤井寺市 中島 志洋

いろいろの猿が楽しい年賀状

猿山のボスにもやはり定年制

猿回し賢い猿に養われ

お願いと箸を渡され餅の番

福娘つとめこいさん玉の輿

藤井寺市 高田 美代子

偉そうにしてる人ほど偉くない

原価計算してからあほらしくなった

面接に行くので紺のスーツ買う

腰手拭いが似合う男のごつい下駄

錦飾って母校へ寄付を置いてくる

藤井寺市 太田 扶代代

理路整然 風穴のない街に住む

内視鏡見えてはいけないものを見た

さざんかの垣根あたりにある昔

自分史はもう晩秋にさしかかる

も一人の自分を少し甘やかす

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

茶柱の暗示に足が浮いてくる  
我がうちの現状がある冷蔵庫  
草木染へアーカラーに使われる  
返事また変ってしまう秋の空  
這うようにカニサボテンが気味悪い

藤井寺市 楠 昭子

悪知恵がよく働いて生き上手  
次々に寄付言ってくる秋まつり  
なぐさめるための嘘だと知る笑顔  
残業の出来る会社で有り難い  
すぐバレる嘘でみんなを笑わせる

松原市 國見 蘭香

物干しでパンパン朝がはじけてる  
おしゃべりの後口悪い長電話  
騙されるお金がなくてよかったよ  
嫌われるあわだち草の黄色好き  
秋冷えにコーヒータイム増えてくる

松原市 小池 しげお

パチンコをしている真剣なまなこ  
再婚の話のつてアデランス  
宝くじそんなに俺が嫌い  
金持ちはたくさん居るがみんなケチ  
定食につく味噌汁のうすさかな

箕面市 出口 セツ子

一晩でリセットできる軽い脳  
煩惱があつて楽しく生きてます  
スパイスに一滴落とす愛と憎  
聖書読む心の垢も大掃除  
あと何回掛けれるだろう初暦

箕面市 岩津 ようじ

めでたさも中ぐらいなりタイガース(日本シリーズ)  
チャンバラを見るが傘寿の日課なり  
長いものに巻かれますよとマニフェスト  
枯れ芒婆婆の残りをどう生きる  
この星に寄生虫ホモサピエンス

守口市 井上 桂作

穏やかに論ず心をいつまでも  
飾らない言葉の中に人間味  
飴だけで嫉妬れる孫ひ孫  
少し呆け鋭さとれて人間味  
合併で住み慣れた町名が消える

八尾市 高杉 千歩

お浄土も正月ですかおめでとう  
正月もパパお仕事というゴルフ  
大切なことから忘れていく不思議  
苦勞してますパソコンへ昼もぬき  
しっかりと歩けるうちはがんばれる

八尾市 宮崎 シマ子

寝つくまでの長い時間よ走馬灯  
深夜放送とつくに済んで新聞屋  
どろぼうに気づかれぬよう二重鍵  
雑談の中にときどきまじる見栄  
自転車で感じるほどの草紅葉

八尾市 吉村 一風

老眼の乱読つづく秋夜なが  
握り拳開いて秋をそつとのせ  
休肝日静かな夕餉箸を置く  
損得を言うから話こじれ出す  
笑ってられる物忘れならまだいいさ

八尾市 長谷川 春蘭

幽艶な雅楽の調べ菊かおる  
石畳の隙間に生きる苔紅葉  
枯れもせず恋も知らずに水中花  
アルバムの四季それぞれにある笑顔  
サンガラス席をゆずって見直され

八尾市 内海 幸生

初日の出曲った背筋伸ばさんか  
屠蘇酌んで三猿なんか吹飛ばそう  
腕のこと言わずにカメラまた替える  
鮮やかな落葉に聞きたし未練など  
狂い咲き花にも鈍な奴がいる

八尾市 山本 宏至

うたた寝の中途半端が心地良い  
ちよつとした仕草が心凍らせる  
女房の理屈に勝った事がない  
ばあちゃんも着飾って行く七五三  
保険証役立ち過ぎる不仕合わせ

八尾市 村上 ミツ子

総選挙わが家は二票棄権なし  
公園の掃除竹箒がおどる  
タイガースうれし涙の御堂筋  
開いている窓からしのびこむ噂  
負けつぷりほめられてから眠れない

八尾市 神原 まさと

ほどほどの親切心で仲が良い  
泣き面に蜂ヘルペスの後遺症  
誕生日爺ちゃんの顔描いてくれ  
誕生日鯛の塩焼き酒五勺  
タイガースおせちになつて予約とり

八尾市 井尻 民

いぶし銀うしろ姿がかっこいい  
慰めてくれる女の希少価値  
七十歳ワープロで出す年賀状  
生き抜いて長編ドラマ一代記  
一寸だけ離れてほしい影法師

神戸市 山口 光久

芦屋市 黒田 能子

まだ欲があるから飯をたんと食う  
いよいよに備えて飯をたんと食う  
失敗は笑い葉で蘇生させ

呵呵大笑一家団欒至福なり

震源地僕にあるから押し黙る

神戸市 木村 貴代子

日本語のきれいに酔う愛唱歌

裸木に明かりチカチカ聖夜更け

仮面脱ぐドッとこぼれるグチ本音

バタバタと女の性が十二月

捨てること決めた筆筒を撫ぜている

神戸市 山口 美穂

バスを待つ列みなケイタイメール中

にわか雨百円の傘ありがたい

秋陽落ち茜の雲もすぐ闇に

イラクに愛をアラアの神様キリストさま

もう少し歩くと万歩計がせめる

相生市 中塚 礎石

待合所自慢話になる病

いつからか欠伸している万歩計

ゆつくりと落ち穂拾いをする八十路

日本人だからカタカナ語は読める

よい姑も外では鬼と噂され

しつかりと数えてつりを渡される

風向きが変りはじめてからの運

げっそりとしているようでよく食べる

ご飯どきには聞きたくもないニュース

あの揺れは今も記憶の底にある

尼崎市 春城 年代

立冬や湿布のにおい滲ませて

仕舞風呂ゆつたりとあり爪手入れ

降る雨に柿あざやかな色でもえ

ステージの合唱団の皮下脂肪

試着室の鏡にちよつと嘘がある

尼崎市 春城 武庫坊

糸切った風は自由を謳歌する

雲流れすかつと天が高く青

地震頻発テロの砲火に噎せる地球

成仏した顔で売場に鮭並ぶ

妻が足病みテレビ回して紅葉狩り

尼崎市 林 昭三

やや冷えてやや暮れてきて焼芋屋

総選挙戦いすんで日が暮れて

水彩の筆を洗って青い空

体形に甘党ですと書いてある

湯疲れと酒で帰りのバス静か

尼崎市 田 辺 鹿 太

借金はないが貯金もない暮し  
実現が可能な夢をみることに  
お月さま今泣いたのは内緒だよ  
降りかかる火の粉のような妻の愚痴  
咳をした途端記憶がよみがえる

尼崎市 内 田 美也子

秋色の風と舞つてゐるラブソング  
ハイカーが足湯で癒す温泉地  
骨なしの秋刀魚で味気ない食事  
自信家の後ろ姿が頼りない  
当らない夢をまた買うジャンボくじ

尼崎市 軸 丸 勝 巳

マニフェスト日本の夜明け一歩踏み  
柿が熟れ句碑が喜ぶ法隆寺  
新米の値上げおかずで帳合わせ  
値上がりをして外せぬコシヒカリ  
うどん屋の賑わい不況いつ抜ける

尼崎市 長 浜 美 籠

天国への招待状は順不同  
口裏を合わせたらしい目の動き  
満ち足りた心に風が心地良い  
絶好調風が味方をしてくれる  
裏表使い分けてる君子蘭

川西市 米 原 雪 子

監督のアドバースからドラマ生む  
天高くイベント多くはしごする  
庭の花供え亡夫に語りかけ  
メモよりも一言欲しい生の声  
懐の豊さ見せぬ戦中派

川西市 西 内 朋 月

聴くひとがないから歌う風呂の中  
売られても買えなくなってきた喧嘩  
監視カメラに睨まれながら出すお金  
鍵穴に鍵が嵌らぬ午前様  
寝室に覗いたことのないタンズ

三田市 北 野 哲 男

新年は夢多い目のみくじなり  
お元日かしわ手念仏十字切る  
盃も金もよっしゃも指で丸  
三界に母一人守る家があり  
末席で今日の会費の元を取る

宝塚市 嵯 峨 根 保 子

投票へ尻尾をピンと立てて行く  
もう風もさらさら抜ける花の寺  
どっこいしょ影法師まで重くなる  
花束を贈る役ならすぐやれる  
反省を促すサルが死にました



西宮市 緒方 美津子

西宮市 井上 松煙

またとない祭りをくれたタイガース

小道具は何もいらない秋の空

深酒を戒めている鎌の月

お湯割りのお湯だけ妻に入れさせる

ケイタイはどうもゆっくり話せない

西宮市 牧 渕 富喜子

ケセラセラかさこそ踏んで秋は行く

旧友は忘れたい事覚えてる

一票を雨の晴れ間に急かされる

立冬の暑さへ地震恐怖症

カーテンを早目に洗い今日立冬

西宮市 山 本 義 子

天地無用わたしは箱でひと休み

カラスにも居心地の良い屋根選ぶ

小さい菊活けてこころは広うなる

冬を越す植木にたんと肥料やる

お洒落と実用かねた毛糸帽

西宮市 坪 井 孝 一

日の丸を掲げる家を探してる

ミス多い人生ロマン残しとく

エプロンに僕の名前が書いてある

曲っても反ってもそこはピカソの絵

充電のつもりの酒がシヨートする

手のなかの小さな幸を守る日日

玉垣に昔の金の値打ち知る

老いなりに日日に新たを志し

よい笑顔武器にするのが玉に瑕

寝たきりになるのが恐く竹を踏む

西宮市 亀 岡 哲 子

家中のゴミ箱洗い天高し

軽い掃除機買うてスイスイ生きてゆく

鮮やかな受身で母の生きた道

二階から下りぬ夫へ打つメール

命にはかわりのない医者巡り

西宮市 秋 元 てる

初日の出あんな私が八十五

年齢にしてはよく食べるねと賞められる

闇雲に走る小犬に引きずられ

千年の榎の実拾う男鹿の旅

どこを見ても手書き箇所ない請求書

西宮市 西 口 いわゑ

歌つてるとみんな忘れるいい時間

土俵上 神も味方はしてくれぬ

平凡がしあわせだとは気がつかぬ

一筋の道を極めたい笑顔

露ほどの嘘のないとは笑止なり

姫路市 古川 奮 水

駐車許可介護入浴中御免  
病み上がり散策出来た上高地  
大正池猿や鴨まで出迎える  
色男金と力に無関係  
ひと言で部屋の温度が冷めている

奈良市 米田 恭 昌

秋灯火 残り淋しい髪洗う  
酔った目にどの玄関もボクの家  
駄目もとで好き好き好きと押してみる  
土塀ばた歩けば晴明に出会いそう(御所 2句)  
歌会所句座を開けば楽しからう

奈良市 天 正 千 梢

ありがたや名水百選の国に住み  
孫達にすまんと思う長寿国  
よか嫁でとつくに土俵おりました  
散歩道初殻いぶす煙立ち  
緋牡丹のはずかしそうに藁の中

奈良県 渡 辺 富 子

ときめきを忘れた男と紅葉狩  
無味無臭の男行き交う暮れの街  
反骨の男の部屋にある化石  
条件をのんで正義が歪み出す  
苦労重ね幸せですと母の嘘

生駒市 飛 永 ふりこ

申年はとにかくにもおめでたい  
ハーブティー香りに会話調子づく  
ケセラセラ今を受け入れ青い天  
聞酒が喉の真ん中泳いでる  
パレードが關將の笑み見納めに

香芝市 大内 朝 子

正月の空よ今年もよろしくね  
人前は気丈わたしの泣き黒子  
人間は所詮ひとりという悟り  
男っぽい女で通す負け惜しみ  
まだ夢が山ほどあつて老いられぬ

橿原市 安 土 理 恵

本気になれば女にこわいものはない  
干涸びた脳へシャンパンなどいかが  
本人が一番びつくりする噂  
千切りのキャベツむしゃくしゃ食べている  
他人だと思ふ夫の言葉尻

橿原市 居 谷 真理子

神さんがかくれんぼする古ボスト  
定年の旅ユニクロのさらを着て  
雨やのに皆いい靴を履いている  
私の余白に座っている夫  
かたつむり山頭火にはなれやせん

大和郡山市 坊農柳弘

和歌山市 玉置当代

まだ恋はつづいています除夜の鐘

写楽から抜けた娼婦と屠蘇を酌む

万歩計犬も氣遣う霜の朝

切れそうで切れぬ絆の夫婦岩

年金の暮らしに年玉のパンチ

和歌山市 松尾和香

おもしろいシングルライフ選ぶ主婦

天国のシナリオ鬼が書いている

先生の隣の席にライバルが

月並みに趣味も続けていける幸

長電話ところで何の用事なの

和歌山市 山口三千子

不信感抱いた時から距離を置く

携帯の電話へ甘い誘い水

針金で矯められ競う菊花展

真つ当に生きても病容赦なく

未来図は玉虫色になつてくる

和歌山市 福井桂香

しめやかな花の終りを見届ける

膝つ小僧いたずらしたり怪我したり

あんパンは腹に一物もつている

指先が鍵盤を這う蒼い月

片思いシヨットグラスに打ち明ける

幸せを満喫してる秋の天

もみじ観る夫に支えられながら

聞き流すほどのゆとりになまだなれず

死ぬまでは意地悪なんか言わんとこ

身上げする針も弾むや七五三

和歌山市 木本朱夏

喜怒哀楽繕う母の木綿針

誤作動が続く私の脳細胞

金色に秋をつぶやく銀杏の実

コスモスの風がさらつてきた男

明日こそ時代遅れの髪を切る

和歌山市 西山幸

事実無根なのに気後れしてしまふ

どの色を溶いてもさむい絵の具皿

一ランク上を歩いて蹴躓き

やがて夙人を待つのもほどほどに

かたかなで点る赤い灯青い灯よ

和歌山市 木村初子

遠い日の記憶の中の赤トンボ

鉛筆を握りさまよう詩の世界

好きなことできる幸せありがとう

今のまま多く望まず日々感謝

太陽を背にゆつくりと庭歩く

和歌山市 吉村 さち子

愛情の味が足りない無洗米  
腕に縋りかけて母への柿なます  
一步引く視野がやさしく見えてくる  
普通という目安を計る尺がない  
介護にも限界あると知る悩み

和歌山市 桜井 千秀

まつさらな思い出づくり初日の出  
大上段で構えて行こう年始め  
傷口を繕う糸は長い目に  
誘惑の余韻さざなみ行く如く  
劇的な出会い信じる今年こそ

和歌山市 田中 みね

嘘でしよう医師の説明きくカルテ  
落ち込んで帰る夜道に雨しとど(背骨に異常 2句)  
思いきり泣いて気持を切り替える  
何たって相手はお客気いつけや  
御近所と少し疎遠の門構え

和歌山市 武本 碧

心盗まれたまんまの秋の空  
わたしから若さを奪う四季巡る  
息切れぬほどに漕ぎ合う夫婦舟  
骨太の父に似合わぬベアルック  
青春の門をさ迷う出会い系

和歌山市 堀畑 靖子

おやすみのメール淋しさ埋めてくれ  
リハビリも兼ねて続けているヨーガ  
私の膝うばいあう孫がいる  
カラオケの点で落ちこむ友がいる  
還暦のポストに届くラブレター

和歌山市 上地 登美代

あなたほど憎いものない根切り虫  
薬一本あれば安堵の豆の蔓  
柿植えて八年先を思いやる  
日本が泡になるほど病んでいる  
我儘も嬉しく聞ける回復時

和歌山市 青枝 鉄治

腹の立つニュースも受信料をとる  
淑女の顔かなぐり捨てた掴みどり  
金貸した友に出会った競馬場  
子会社へ来た三流のかいツラ  
メリットがあるから寄付を出したが

和歌山市 古久保 和子

ホームドラマの嘘を見抜いてお茶にする  
肝心なところが抜けてる記憶力  
ねじ山が潰れ頑固になるばかり  
新刊書三日つづけて立ち読みに  
スローライフ小鳥の声も聞き分ける

和歌山市 楠見章子

色かたち立派なみかん仏壇に  
懐かしい歌にも涙出なくなり  
急いだらきつと階段踏み外す  
後輩の前で立派なことを言う  
ビール来てやつと焼肉らしい味

和歌山市 牛尾緑良

精一杯生きて息抜く三箇日  
夢ひとつ持ち越しました初春のため  
罪置いた身に初春の陽があたたかい  
一羽だけ残った鳩に置く我が身  
合掌を薬師如来のウインクへ

和歌山市 松原寿子

かざぐるまの息が聴こえてはるになる  
少しづつ過去を刻んで風になる  
降参をしない男の目が笑う  
紙のような株券ひとを弄ぶ  
新しい海を目指している翼

和歌山市 福本英子

紅葉はらはら高野で逢えた新仏  
年の暮れお巡りさんの鼠とり  
医師の手を借りて平均寿命まで  
サンマ豊漁昨年の分も食べている  
友人を一人失くした選挙すむ

和歌山市 細川稚代

故里の新米ですよお亡父さん  
(亡父十七回忌3句)  
縁深い顔がよりそう秋日和  
法話聞く孫もちんまりかしこまり  
立冬へ北の街から雪だより  
カニサボテン開いてとどくいい知らせ

和歌山県 中後清史

昭和史をめくれば汗が染みている  
足音が迫り来るよう有事法  
力ではテロを鎮圧出来ません  
宗教が武力衝突する不思議  
元の鞘には収まらぬ売り言葉

海南市 堂上泰女

カラオケで夫と競う肺活量  
バラ園にマリア・カラスという名花  
勿体ない小春日和にする昼寝  
持ち歌はテネシーワルツの英語版  
望郷を掻き立ててくる鳥の群

海南市 谷口義男

競い合いして懐は火の車  
思い切り良く捨てられぬ貧乏性  
入門書通りパソコン動かせぬ  
方便の嘘をすらすらい言い並べ  
礼智信 死語になりつつある怖さ

海南市 三宅保州

新年というスタートに武者震い

御開帳の余韻未だに善光寺（晩秋紀行 4句）

空つ風の冷え癒される万座の湯

燃えたぎる想いは同じ浅間山

ロケーションはドラマどおりの八ヶ岳

鳥取市 春木圭一郎

キノエサル今年は福がきつと来る

猿芝居分かっていても手をたたく

反省もしない私は猿以下か

猿ぐつわさせたいような友がいる

犬猿の仲だが何故か学び合う

鳥取市 徳田ひろこ

御煮しめは任せて窓を拭いている

神様に願掛けに行く桐の下駄

お下がりを着てもまぶしい十五歳

鳥籠に赤飯炊いている巢立ち

満場の拍手に舞い上がる気球

鳥取市 田中瞳子

紅葉狩 病院までの車窓から

腕捲り髪を束ねて挑む麺

まわり道だが着着と子は伸びる

六十歳目前にして反抗期

保母二代 廃材集め趣味である

鳥取市 山本益子

亡母の声呼ばれたようで風の音

ひとり旅こんな極楽再度来い

目を閉じて羨み心を落ち着かす

急停車 土下座のキツネ邪魔をする

遣伝子の表示トーフが増え出した

鳥取市 録沢風花

懇願と絶叫を聞く選挙戦

草もみじ思いは里に辿りつく

ためらいがとれると進むベン先の

A型とA型 要らぬ気を遣う

償いがますます重くなる地球

鳥取市 夏目一粹

強いこと言えない弱み出たがらぬ

勝つことがたまにあるから嵌っちゃう

僕いつも短所に袋かけておく

一本の松茸匂い回し嗅ぐ

うつし世の早さにいのち縮みだす

鳥取市 美田旋風

老人の気持がわかる歳になる

一票も情に流されては困る

異常気象昔の歌とずれてくる

子が来ると夫婦喧嘩はびたり止む

自衛隊危ない橋を架けに行く

鳥取市 倉益一 瑤

旅ひとり小さい秋と夕焼けと  
虹色をまだ追いかけているおんな  
赤鉛筆に忠告ばかりされている  
説教はわかる心がついて来ぬ  
極楽トンボおまえに妬心抱いている

鳥取市 杉本孝男

お互にご無沙汰したという握手  
そつとしておきたい親友の噂きく  
彼の人にしてはと過去を噂され  
逆転の出来るジョークを持ち歩く  
名僧の法話を聴いてから迷う

鳥取市 福島庸二

率先し友の乾杯音頭とる  
これからと掛け声ばかりカラ回り  
どん底をはね返す喜のエネルギー  
反省を促す力 心の目  
来て欲しい時に見えない見舞い客

鳥取市 中村金祥

孫を抱く春遠からじ除夜の鐘  
旅ひとり漫画の主人公になる  
散弾を浴びてイラクに正義なし  
属国の性かイラクへ兵を出す  
リセットをかけて新年走り出す

鳥取市 西村黙光

思い出の生家手放し新天地  
思い出の遠く近くに父母の声  
死線越えた思い出だけは忘れない  
思い出の真ん中にある灸の跡  
思い出をたぐり寄せてるワンカップ

鳥取市 前田一枝

人生も泳ぎつかれて終止打つ  
縁あって知らぬお方と石かこむ  
寺の鐘つき忘れたか昼さがり  
すんだ目でとてもうそなど言い出せぬ  
弱虫で点滴くぐり生きのびる

鳥取市 福田登美

不意を衝き夫の入院ふと不安  
知人から花籠届き安らげる  
留守にした郵便受けにはみ出てる  
木枯しに心なごます紅椿  
神さまは私だけのものではない

鳥取市 植田一京

せめて音大きくたてて独り住み  
音楽のリズムで今日も始めよう  
よく揺れるところに経を上げている  
誤字脱字日記は私だけのもの  
豊かさが溢れ心がかわきだす

鳥取市 岸 本 宏 章

いろいろと試してやはり竹を踏む  
髭面の奥のやさしい目が笑う  
ピカン展見てから首が戻らない  
ふたりいてテレビも二つつけている  
懐が寒くなったら出歩かぬ

鳥取市 岸 本 孝 子

神仏に頼りこころの弱さ知る  
伸びる芽も一緒に摘んだかも知れぬ  
ほろり酔う可愛い女だったころ  
バスデー誰も気付いて下さらぬ  
不作だと言えば買いたくなるお米

鳥取市 武 田 帆 雀

干し柿が県庁街に吊つてある  
シャッター棒担ぎ一からご出発  
尻天に向け唐辛子の言い分  
肩書きが付いて外野で野次れない  
揚げ足を拾い集めている器

鳥取県 田 村 き み 子

面取つて南瓜煮てます冬至です  
門限を守らぬ娘あり不眠症  
合掌の姿が好きで人も好き  
納豆が好きで淋しくない春日  
雪が降る今日はわたしの誕生日

鳥取県 太 田 幸 枝

犬猿と言われた夫婦長く生き  
欲捨てた顔が柩の中にある  
妹にいいとこみんなあげた顔  
貧乏に心の温み教えられ  
本人よりその母親を見込まれる

鳥取県 奥 田 保 子

ユーモアが免疫力をアップする  
俗っぽく人間くさく生きたいな  
魂をときには泣いて浄化させ  
悲しみと笑いは表裏一体だ  
病人にがんばれなんて酷ですよ

鳥取県 土 橋 はるお

玄関に由緒ただしい桐の下駄  
しあわせがこつちに向いてくるようだ  
レンタルの机じゃ孫が可愛そう  
秋晴れの上棟式を仰ぎ見る  
阿波おどり踊る松茸連に会う

鳥取県 谷 口 次 男

戦場に平和戻れと初詣で  
柿ねらい犬とネコとがジャンプする  
携帯とハンカチ朝のお友達  
アカンペエ一万円が逃げやがる  
人間は鬘被った猿である



鳥取県 西川 和子

健康にいいとカラコロ下駄を履く  
年金の範囲で舞台狭くなり  
都合のいい事だけを聞く袋耳  
先ばかり気にして今を踏み外す  
わだかまり流して軽い肩になり

鳥取県 鳥羽 玲子

障子から夕暮れてくる風邪の床  
打てばびびく事なくなりて老い深い  
魚釣りほめられてから勘におる  
順調と見えた道にも穴があり  
ニニロツソ聴いて今夜の幕とじる

鳥取県 鳥羽 直市

越されてもゆつくりペダル踏んでゆく  
たくましく生きた昭和を忘れない  
母看取る余力たくわえ春を待つ  
卒業証手造り和紙が引きたてる  
原発もダムも嫌とは無責任

鳥取県 村上 信子

人妻の自慢話に嘘多い  
わさび抜き寿司の魂ぬけている  
お地藏様昔むかしのままで立ち  
合掌し殖えないお札数えてる  
胃に溜る悪意消したく水を飲む

鳥取県 西原 艶子

暮れて行く今年へ感謝また祈り  
流されて猫もわたしも歳をとる  
美しく老いたし花に囲まれて  
よれよれの薬袋にある安堵  
恍惚になりたくはなし辞書を繰る

鳥取県 山下 節子

満点でない妻だから気が楽だ  
ああしんど雁字搦めの義理の糸  
はん押した後だ今更戻れない  
口車用心してものせられた  
いい人と言われてからのプレッシャー

鳥取県 石谷 美恵子

ひとり旅誘惑をする宿の下駄  
信じよう肩のあたりにあるやる気  
危なくてよろめく友が見ておれぬ  
煮えきらぬひとへ一搾りのレモン  
ときめきもなく穏やかな胸の池

鳥取県 谷 寛子

つきすぎた花芽開いて見たものの  
おきれいよ白髪に真珠ネックレス  
いくつまできれいといわれたいものか  
二歳児に気づかわれてるよろこびよ  
合併に足され削られ呑みこまれ

鳥取県 前坂 なお美

青虫がわたしのキャベツ食べにくる  
王さんも好き星野仙一もっと好き  
天国へ行けるあなたと一緒になら  
小回りのきく豆自動車が好きだ  
お迎えが来てもまだまだ帰らない

鳥取県 山本 正光

蛇口から亡妻がときどき声をだす  
日の丸に狭い思いはさせられぬ  
ざくろの実割れて話をもつれだす  
割り勘で負けずに飲んで胃がいたい  
人肌が恋しい冬の独り酒

鳥取県 澤 裕子

地に足を着けてしつかり天仰ぐ  
勇気ある発言波紋投げている  
舞うたびに女は度胸つけて行く  
胃袋を満たすとハート風いでくる  
無職だと長い一日持て余す

鳥取県 蔵本 悦子

冬を越す口や手足に油さす  
ストレスでいつか地球に穴が開く  
目と眉を吊り上げ冬に立ち向かう  
人間にそろそろ神も飽きて来た  
すぐ曇る秋の天気は変り者

鳥取県 近藤 春恵

うっかりと相槌打って裁かれる  
欲捨てて無色の風となつて生き  
春うらら仏も鬼もうかれ出す  
大胆に筆を使った絵が生きる  
不器用でもペラペラしゃべるのは得意

鳥取県 土橋 睦子

阿吽の呼吸でつなぐ茶がうまい  
お浄土は楽しいとこと仏さま  
古稀もまだ主婦の縄張り持っている  
一物を腹に納めて年新た  
富士山に恥をかかしている日本

鳥取県 新家 完司

野辺送り案山子と犬に見送られ  
鼻歌で行こうこの世は遊技場  
先生も金を数えるのが大好き  
癌に比べりゃハナクソのような怪我  
働いた褒美ご飯の湯気ふわり

鳥取県 上田 俊路

輪の中で自由が凋むのに耐える  
預ってくれるなら金より若さ  
無縁仏にも忘れずに咲く彼岸花  
あれからは返事が来ない鰯雲  
やがて陽が沈み答は出るだろう

倉吉市 淡路 ゆり子

早起きの母のリズムに乗せられる  
向き合つて古びた鬼とみかん食う  
歯車がひとつ外れた子の未来  
日の丸のメダルにかける汗が飛ぶ  
除夜の鐘つく行列のどんじりに

倉吉市 最上 和枝

何不足無いのに下駄の緒が緩む  
かたつむり一度舞いたい夢がある  
バリウムを呑んだ胃袋嘔つかぬ  
手袋の穴が窮地を喋り出す  
胃袋がSOSの過食症

倉吉市 牧野 芳光

どこ見ても主役ばかりの舞踏会  
寅さんによく似た下駄で捨てられぬ  
部下の方がハローワークでよく売れる  
女らしい女がひとり菩薩像  
私のようなばうふら眺めている

倉吉市 米田 幸子

ダメージを癒す私のひとり酒  
居酒屋は熟女の憂さの捨てどころ  
兵役は三種合格寸足らず  
遠回りしても欠かせぬ義理がある  
喉元を過ぎて痛みも忘れがち

倉吉市 森川 あらた

神様の機嫌がいいと晴れになる  
靈感があるのでお化け寄ってくる  
たばこ吸う人とは距離をおいている  
死ぬまでにカネは残らず捨ててゆく  
悩みごとあると笑顔が凍り付く

倉吉市 野口 節子

なぞかけの旨い女の白い指  
よろめきが吃水線を越えて来た  
老化防止の歌い文句にいと弱い  
確認の甘さが生んだ詐欺にあい  
うらぶれて母の港に足が向く

倉吉市 松本 よしえ

おしどりの衣装見事な里帰り  
装つて尻尾に苦心する狐  
にんげんの真似をするなど猿の親  
猿の子は親をとことん信じている  
肩こりがハローワークでひどくなる

倉吉市 山中 康子

旨い茶菓 苦戦のはりを和らげる  
スケジュールこなせぬままに西陽さす  
口惜しさは隣の花が美しい  
青くさい意見笑いと涙あり  
年金の額夫のいる有り難さ

倉吉市 猪川 由美子

求めるより与える愛へ目が覚める  
ゴメンネが言えれば別れずに済んだ  
さてと還暦もう一花が咲く予感  
真紀子氏の夫なにかと大変だ  
余命表引き算すれば背が寒い

米子市 中井 ゆき

骨太になつて度胸もついて来た  
いいお酒ちょ一杯でいい初日  
曲り屋も飛驒の民家も灯がぬくい  
夢を見て越境をした根っ子たち  
木枯しに絆よったりほぐしたり

米子市 政岡 日枝子

初詣で倅せそうに下駄が鳴る  
心寒くて内側ばかりちびる下駄  
ざわざわといつもうるさい紙袋  
母校すっかり他人の顔になっている  
同じ温度で遊べる友を持つ母校

米子市 木村 富美子

いい顔で舞いおさめたし終の舞い  
父さんの桐下駄ゆずる足がない  
忘れぬあの横丁の下駄の音  
ひより下駄かあさんの音待った音  
若い日のわたしを詰めてある母校

米子市 青戸 田鶴

いとおしみ仰ぐ山にも日々の彩  
もみじより車ばかりの鍵掛峠  
モズ鳴いておだやかな秋日続くなり  
家族の下駄みんな記憶の中にある  
八十年の疲れが滲む顔になり

米子市 野坂 なみ

ばら撒きの援助袋に赤ランプ  
惜しまれて引く花道のむずかしさ  
統合の校舎 母校はもう他人  
自販機のかせぎ小銭がざつざく  
ちょこちょこが大きな下駄をはきたがる

米子市 白根 ふみ

片隅に追われるリストラの落葉  
吊し柿日に日に甘く瘦せてゆく  
空が青いから雑用後まわし  
そうさせてもらうとほどのよい妥協  
今日あたりもみじの極み明日は雨

米子市 林 瑞枝

気立て良い嫁はわが家のパートナー  
生き方を変えて倅せての平に  
ヘップバーンのように自分を好きになる  
風に追われてときどき愛の笛を吹く  
割り箸も粋な出逢いを嬉しがる

松江市 松本 知恵子

神在月 稲佐の浜に神が着く

大山に娘が鳴らすウエディングベル

ななかまど赤く実を染め祝福す

頑固さが男の美学守ってる

手を換えて手品のような詐欺事件

松江市 銭山 昌枝

幸せな時間を止める螺子が無い

渴かないように本屋へ寄って見る

無愛想な板前の味癖になる

空き箱へわたしの過去を閉じ込める

阪神が負けてもバーゲンしてくれた

松江市 津川 紫晃

出かかった言葉を吞んで爪を切る

カタカナの氾濫はく的位置はどこ

生きものが好きで地球に住んでいる

縄のれん涙のわかる席がある

秋の川 枯れ葉一人で旅をする

松江市 小川 注湖

百枚田 名月百も掬い取る

仲人席妻と一役映えて見せ

一まとめエスカレーターラッシュです

乳匂う命の未来考える

この味方頼りになると手を握る

松江市 安食 友子

クライマックス孫の華燭で頼つねる

満タンもローンに追われとほほほ

ぺこぺこが定番のようお偉さん

踊ろうよ右や左のおっぺけ

ユーモアが分らないのね四角形

松江市 川本 畔

体調を明日という日に整える

割り勘でつり銭少しごまかした

割り勘の中は恋の字見当らぬ

父という意固地な棒を貰っている

騙されてみれば多弁な海の色

松江市 三島 崧丘

母親のように入り江は船を抱く

雪しんしん話し相手の欲しい夜

顔触れがそろい居酒屋盛り上がる

元日の朝は家族も他人めく

積年の生き様綴り世に晒す

出雲市 伊藤 玲子

鈍行でおいしい風に逢いに行く

くたくたの心遊ばす鳶の赤

まだ生きる欲があるからドッコイショ

私に号令かけて生きている

安息は次の世 父も母もいる

出雲市 岡

あきら

こんな彩で終えればいいな紅葉路  
紅葉そこそ目は探してる喫茶店  
素人の缺に文句言わぬ松

ホームページより理髪屋で聞く話  
とつくりを避けカラオケに辿りつく

出雲市

吉岡 きみえ

いいめざめできますように灯り消す  
鉢巻きを締めてはみたがなにしよう  
はてさてと言ったところで職がない  
縄張りの外でおばさんよくあそぶ  
土に生き土に学んだ老いの背な

出雲市

園山 多賀子

甘言に釣られてからの不整脈  
スマイルに罪は着せない笑い皺  
秒針も私も先を急ぎます  
頑張りも限界がある紙コップ  
七草を詣じ女の長い雨期

出雲市

富田 蘭水

ほのぼのと私を生かす酒二合  
望みなど今の幸せありがたく  
定命の前なんでも食べてやる  
ドック出る新しい風まつている  
自動ドア一人ひとりを見定める

出雲市 佐藤 治代

ぼうつとして居る日魚の目いじって  
花を見に来たのに人が多過ぎる  
好きだからその正面に座れない  
内緒だが会えばわくわくしてしまう  
飽きもせずくるくる回る輪と遊ぶ

出雲市 岸

桂子

嘘一つ心つなぐに邪魔になる  
物あふれ我慢の捻子が甘くなる  
先に読む新聞折り目崩さずに  
いつの日か消える影法師とあるく  
どこか狂って訃報続きとなる冷夏

出雲市 城

多喜

どの花もわたしにソッポむいて咲く  
わたくしが打つと曲ってしまう釘  
掴んだら小躍りをしてくれた魚  
バス停で声かけられておつき合い  
子供には期待をされてないわたし

出雲市 小玉 満江

紫の色を選んで喜寿祝う  
強風へかつら拾った駐車場  
散らかした部屋で一日針仕事  
約束を忘ればしない常備薬  
白髪染め止めて肩の荷をおろす

出雲市 竹 治 ちかし

島根県 伊 藤 寿 美

体調を崩すと田舎思い出す

まだ恥を晒して不惑の歳を越え

時化の日は母の港に泊めておく

神様の都合もあつて神無月

開発という名で病んでいる野山

島根県 森 茂 美

亡妻の育てた菊が咲きだした

ゴミ出し日お利口カラス待っている

日本晴れ当てにならない視聴率

神無月雀知ってる米の出来

田を潰し外米を買う平和だな

島根県 多々納 テル子

携帯を持たない二人今日も無事

古城巡り我家の城でホッとする

バスツアー自信がついた強行軍

献穀祭 秋の収穫皿に盛る

飯三度今日もおいしく食べている

島根県 桼 原 秀 子

山の四季眺めて暮す山が好き

ひとときを何も忘れて見るのみじ

オーロラの空おどろきで見るテレビ

中国産とある食品はついさける

灯ともしの頃が嫌いになつてきた

死後叙勲受け取る妻の袋帯

七七忌終つて届く勲五等

喪が明けて秋の句会に誘われる

亡夫の好きなお菓子をもらう独りの茶

わたくしの影を港に積み残す

岡山市 井 上 柳五郎

叙勲さる戦友祝う文化の日

ノモンハン命拾うた暗い青春

年金の涸れる日来るもふと思ひ

諍いのふたり余命の幾何ぞ

リストラのない農業へ迫る老い

岡山市 大石 あすなろ

セールスに洗脳されて無駄を買う

いい年になつたからこそ旅をする

スカーフが似合う上手におしゃれする

郵便が来て急に明るくなつた午後

箒目がきれいな寺の萩も散り

岡山市 福 原 悦 子

物干し竿欠伸してます雨の音

芸一つなくて真面目に生きてます

記念樹に集う初老のクラス会

絆とはこんなに脆い積木つむ

好き嫌い今も言ってる七十路

倉敷市 井上 富子

キッチンは戦場応接間は舞台  
お節よりラーメンという若い箸

徐行人生 亀には亀の予定表

少年の胸は炎の音がする

グラマーという日もあったサロンバス

岡山県 小林 妻子

さよならの数を重ねて老いすむ

携帯がポケで蛙鳴くように

静観はしてるが世代との相違

華美の海 溺れて縋るものがない

洗濯機男が回すこともある

岡山県 山本 玉恵

すれ違う人生にある風の道

追憶の向こうで星のまたたいて

不器用な背を押す風にある情け

地図に無い橋を渡って来たのです

老いひとり模索つづけて冬の章

岡山県 国米 さくゑ

心の荷ほどいて休む羽根ぶとん

風が休むとコスモスが淋しがる

屋台骨ささえる妻の大根足

ただスマイル傘寿と喜寿のティータイム

二歩三步後から行けば見えて来る

広島市 森田 文

ふるさとに神の山あり水溢る

月は満ち月は欠けゆく一周忌

いい汗を流し応援旗が帰る

ふれ合えばみんな優しいひとばかり

弁の立つ仲間のあとをついてゆく

竹原市 三宅 不朽

石仏の笑み日々あらた気もあらた

鮎の腸正直すぎた日を想う

麦飯の頃は松茸今日も食べ

大根の肌はれやかに土を脱ぐ

海へ来てはれ晴れグチを吐く煙草

竹原市 石原 淑子

ルージユひく紅葉の彩に負けぬよう

気まずさも笑い飛ばして老い二人

カード嫌暗証番号忘れたり

夫の留守後ろの闇が怖くなる

里の駅亡母の笑顔とすれちがう

竹原市 時 広 一路

朝は元旦夜は誕生日を祝う

冬は冬なりに花屋を困らせぬ

花描いてあげれば冬の絵が和む

ときたまのお役に古い知恵袋

腹八分守り切るには美味過ぎる



竹原市 森 井 菁 居

美祿市 安平次 弘道

返り討ちされる覚悟は出来ている  
元も子も無くしたあとで目が覚める  
アイディアを生かす殺すも俺次第  
死んだ振りするコオロギの自衛策  
ライバルの弱点湯船の中に浮く

竹原市 岩 本 笑 子

赤トンボも私も竿の先を見る  
コスモスよ野菊よダム底になる  
見て見ると菊につこりとほころびる  
ストープのうつらうつらと午後の二時  
クイズ熱まだまだ覚めぬ秋夜長

竹原市 正 畑 半 覚

ニセモノの多いこの世の面白さ  
ホンモノの顔をわざわざ塗りたくる  
賽銭を欲しがる神にある尻尾  
ニセモノも必死に生きているんだな  
ニセモノの自信に満ちた顔もいい

竹原市 古 谷 節 夫

新春へゆっくり羽化をしてみたい  
以下余白書き込み増える農作業  
平凡に生きよう妻の知恵を借り  
勝算を信じ一口水を飲む  
泣き笑い川は広がり海に出る

雑魚寝してる姿自由だなと思う  
丸洗いしても魂おどろかず  
本物が怖い眼鏡を拭き直し  
偶然にしては芝居がうますぎる  
こだわっているのは姑か因習か

唐津市 久 保 正 剣

他人事で済ましておれぬのはSARS  
自叙伝を彩る恋がまだ足りぬ  
あっけなく人逝く風の会者定離  
金を撒く暗い選挙を繰り返す  
明日来る傘寿へ紫雲の空展け

唐津市 宗 水 笑

秋祭り遣伝子騒ぐ子の帰省  
アンテナが混線してる選挙戦  
バスツアー加護を選ばぬ宮と寺  
雨の夜は演歌の嘘に泣かされる  
漬け物がないとすすまぬ老いの膳

唐津市 山 口 高 明

神さまの労を犒う神楽舞  
大人にはなれぬ子供がつくり  
虐待をされても親を選べない  
青春のページを飾る金メダル  
聖戦と言い繕うて殺し合い

唐津市 丸 晴 翠

四季の彩抱いてまどろむ花時計  
晩学の辞書繰る父の背が眩し  
アンテナが捉えきれない子の居場所  
不器用ですぐ顔に出る胸の内  
道端の落差が怖い老いの足

唐津市 樋 口 輝 夫

オレオレのほろり話についてころり  
火遊びの傷点々とある地球  
晩秋の街を彩る曳山やま囃子  
百選の棚田に海の彩が冴え  
バイキング血糖値など気にもせず

熊本市 永 田 俊 子

幸せでその裏側に気がつかぬ  
ケセラセラと言って運勢欄を見る  
紅葉から貰う散華の炎ゆる色  
はんなりと話を逸らす金のこと  
ゆつくりとわが道をゆくかたつむり

熊本県 岩 切 康 子

半日は儲けたような日間違い  
重文財の煤けた像に目を凝らす  
練習をすれば背中が伸びて来る  
昔の話笑いも混じる仮通夜  
真心に真心で応えるお付合い

東かがわ市 池 内 かおり

人混みは避けますボクは背が低い  
銀行でお札数えた事が無い  
流暢な長嶋節に見とれてる  
呆けたな老けたな星の王子様  
図星だな活字追う目が泳いでる

東かがわ市 瀧 井 勝

心地よい空腹抱いた秋の旅  
地場産業名前ばかりの空洞化  
残飯に託びつつ捨てる食不振  
気紛れに餌をやったら住み着かれ  
大都市の墓標みたいなビルの群れ

東かがわ市 清 川 玲 子

大役を終えて白タビ投げ出され  
迷わずにすぱっと脱いで医者の前  
生年月日まだすらすらと言えまつせ  
うす味にしているのかと主治医の目  
野良犬も続いて渡る青信号

東かがわ市 原 賢

本音吐きそれから負けたなと思う  
どん底に落ちると他人がよく読める  
先読めず財布の口を貝にする  
老いてまだ若き日の夢追いつづけ  
永田町に姨捨山の風が吹く

東かがわ市 伊勢 八重子

愛媛県 中居善信

菊花展心のとびら開け放ち

温かい他人に愚痴をふともらす

何時だって広くて温い母の胸

よそ行きの笑顔はじける七五三

黒い手が電話口から伸びてくる

東かがわ市 川崎 ひかり

自画像に風雪たえた深いシワ

まっすぐに生きてりやいつか日が当たる

月末になると財布が風邪をひく

年月を重ねて丸くなる絆

補聴器をはずし聞いているグチばなし

松山市 宮尾 みのり

独りきりの部屋でわたしの芯を干す

豊かさが若さにプラスとはならず

手を結ぶ少し利害の匂いして

見た目より少し若い歳を言う

順調な時は鬼門も気にならず

松山市 古手川 光

お日さまに感謝の御辞儀する稲穂

紅葉の一葉一葉の色彩

石鎚山の恵み名水こんこんと

カップルのバツタが葉っ葉食べにくる

リストラという首切りがない役所

主婦の顔悪女の顔も素顔なり

無欲にはなれない鬼の面を持つ

すぐ腹を立てる小せいちいせえな

夜の道般若心経唱えてる

芯がある揺すってみても煽てても

高知市 小川 てるみ

以心伝心風とスキップして帰る

願望無きにしも非ず赤を着る

一本の道にもあつた水溜まり

蟠りひとつで部屋が温もらず

時々は充電という旅に出る

高知県 赤川 菊野

孤の家に凜と門松新春を待つ

日本茶をけいとくちんのお湯飲みで

ハイキムチ カメラの前のチマチョゴリ

仏壇の亡夫に新米でんこ盛り

古里は天までつづく千枚田

高知県 小澤 幸泉

ふるさとの切手の中に母が居る

言訳の殺し文句は君が好き

土を練る夢のかたちをひとつずつ

コップ酒とおい思い出ゆれている

コップには未練の花をまだ残す

砂川市 大橋 政良

自動ドア妥協うながすように開き  
日焼けした古い壁画が剥けている  
どう向きを変えても邪魔な但し書き  
影法師にも戒名がついている  
そそくさと以下同文でしめくくる

黒石市 相馬 一花

ヒョウタンから駒が出るまで飲むつもり  
泥棒の語原も知らず逮捕する  
新米のドレスで古米売り切れる  
仏飯を供えて拝むクリスチャン  
毒舌が消えると先は長くない

弘前市 福士 慕情

遭難の記事を見ているキノコ汁  
セーターを余計に羽織る万歩計  
雪虫が葉裏で冬を越す仕度  
地藏堂目張りも終えて冬ごろも  
お山から間もなく冬の使者がくる

弘前市 今 愁女

四つ割の白菜かばちや野菜市  
裸木をいたわりながら雪囲い  
霜枯れの黄菊のいまだ香をとどめ  
枯蔓のまだあるいのち引きちぎる  
曇降るやがて津軽はモノクロに

弘前市 高橋 岳水

椅子一つ巡り男のせめぎ合い  
灰皿が知る真相の舞台裏  
政治家もカラスも数の信奉者  
喉元の微罪を酒で押し流す  
ポケットで戦機を待っている磔

弘前市 一戸 ツネ

ホイ来たと進むひと足朝の道  
百態の戯画にあります落し穴  
貸ロツカー百円だけの涙壺  
妄想の渦に狂った河童の死  
底冷えの隅を抜きでる白い風

弘前市 岡本 花匠

計ることやめて明るい屠蘇祝う  
山芋の粘りごころを糧にする  
津軽三味 一途な恋の愛と憎  
雪ゆきユキ遊びごころにあるゆとり  
雪が来て感謝に眠る田や畑

佐倉市 岡井 やすお

初夢はアジア五地域手をつなぐ  
参議院を敬老院にしてはどう  
親分に聞かには大臣選ばれず  
マニフェスト多分守られないでしょう  
名台詞残して去っていく虎使い

東京都 後藤 早智

シンプルに透明感が増す暮らし  
雑念を払った胸に届く四季  
そぎ切った十七文字のように生き  
猫の目と真実だけで向かい合う  
困るのは人の心が透けて見え

東京都 清原 悦子

満面の笑みにもあった苦勞談  
戻れない道だからこそ慎重に  
真筆の賀状思わずほっとする  
散るためにここ一番と花が咲く  
ほらごらん笑った顔が素敵です

東京都 岸野 あやめ

初光ひとり住む身にある自由  
年賀状百枚書けたうれしいな  
不況とはどこ吹く風か六本木  
古き良き昔は知らぬ針供養  
腰と膝 痛いいたいと元気です

横浜市 菊地 政勝

年寄りの愚痴聞くこともボランティア  
保護色に染まる自分が情けない  
音もなく月の匂いの霜降りる  
晩秋に笑み割れてくるザクロの実  
言い訳の裏で自説が主張され

横浜市 小野 句多留

メール打ち果物の皮むけない手  
震度四 夫婦喧嘩にある津波  
小津安を三日続けて見た疲れ  
再婚に選ぶ女は妻に似る  
渋柿を本日つるし刑に処す

横浜市 清水 潮華

晴れて来て予報の傘をまた忘れ  
旅テレビ未知へ心を遊ばせる  
報道の隙間週刊誌で埋める  
家計簿の贅肉少しずつ落とす  
年齢へ抵抗紅の色変える

横浜市 保田 絹子

絶景の眼下に動く日本地図  
雄大な富士がはっきり口を開け  
雲間から青い大山こんには  
ポーズとる駱駝と並び五百円  
人参に美肌夢みてエキス買う

静岡県 蘭田 猿杳

豊漁のサンマ二匹を焼く夫婦  
偉業成す男の陰に内助在り  
携帯に宴たけなわを中座する  
片思い黙って苦い酒を呑む  
鉛筆は思い出深しよく舐めた

愛知県 早川盛夫

借金を返すと切れてしまふ縁  
騙されて人間なんてこんなもの  
考えて見たけど酒はやめられぬ  
これ以上呑めない酒を呑んでいる  
寄せ鍋で趣味の絆を温める

富山市 島 ひかる

年賀状一枚増やす新世帯  
懐にそつと仕舞つて来たみくじ  
人情がコトコト浸みてるおでん  
味浸みて静かになった鍋の中  
皆勤の自負が投句を続けさせ

富山市 舟渡杏花

逆光に素顔を晒すテロリスト  
死ぬ時の約束ごとが多くなる  
花が咲き散つておろかな歳重ね  
自祝日やせめて干物の小鯛など  
身の丈に合わなくなってきた太鼓

京都市 都倉求芽

一病同士 今年もよろしく祝い箸  
永遠のクイズ一年ずつ老いる  
網渡り幸か不幸かせずに来た  
猿山の猿に誰かと似てるのが  
猿芝居ならお手のもの永田町

池田市 栗田久子

さまざまな暮らしが匂う街の辻  
忘れてはならぬ意識の震災忌  
独居でもどんと豪華にするおせち  
食べ飽きた餅を焼いてる小正月

池田市 岡本吉太郎

ブッシュさん強し米国流を押しつけて  
小泉さん最初は勝つても続かない

民社党九条守るには力不足

イランより便りはきなくさい匂いする

和泉市 西岡洛醉

表戸を叩いて逃げたのは神か

秋風の中で転げた私利私欲

鏡台の一帖半が妻の城

罪ひとつ妻に内緒が背に刺さる

泉佐野市 山本蛙城

この秋のコイヘルベスという不気味

生め殖やせだあれも言わず年金論

不人気へ高見盛という無邪気

マニフェスト両成敗にした庶民

大阪市 清水絹子

赤飯炊くせめて仏と古希祝い

秋最中 古希愛であつて湖西線

厚化粧隠し通せぬ古希のしみ

しんみりと白状されて叱られぬ

大阪市 清水利武

大阪市 中村 叡子

反省のさるがあの世でお目出度う  
初日之出 露天風呂から手を合わし  
新しい年へ鯨も親子連れ

河豚の鍋死ぬも生きるも二人連れ

大阪市 渡部 さと美

七十をスタート腹に気をためる  
三ざるを捨てて消えゆく人間味  
美しい日本見直す日本画

みかんみな天を向いてるみかん色

大阪市 玉置 英子

この手鏡美女を映したことがない  
どうしよう上乘せ続く物忘れ  
鉢植えをふやして止めた清浄器

殺人をメールで依頼とは呆れ

大阪市 町田 達子

輝いた日想う亡夫の肖像画  
年甲斐もなくおセンチになつて  
体調の弱り予定を狂わせる

アレクサンドロス大王展を見たいもの

大阪市 中田 あい子

秋の野に紫の花とけこんで  
和してなおいつも孤独な監督業

妻の留守そこそこいけた娘の料理  
堅い人案外女にもろすぎる

御近所もみな高齢化おだやかに  
産地直送真心こもる荷が届く  
地球上 段々熱が高くなる  
開票を固唾を吞んで夜半過ぎ

大阪市 伊藤 武

透析の拷問耐えて今日を生き  
妻の愚痴核心をついてくる  
杖ついてグラビヤを見にコンビニへ  
七つボタン歌つて老いのほほを染め

河内長野市 植村 喜代

紅葉を映して秋の旅誘う  
だんじりの音だけ風に乗って来る  
元氣ならいつか行けると旅のこと  
ベランダから薄色した岩湧山

河内長野市 井上 喜酔

生と死を見つめカマキリ霜の朝  
薄情な男の本音つい滑る

歯車が狂い始めた古希の坂

好き嫌いはつきりさすと壁ができ

岸和田市 木村 正剛

かぞえても数が足らない除夜の鐘  
お隣と競い合つて注連飾り  
家計簿をご覧遊ばせこの赤字  
足るを知る境地に遠く掴み食い

吹田市 岩屋美明

志功展胸の豊かな線に酔い  
チンブイブイ妻の魔法で年を越す  
肩すかし何度食っても会いにゆく  
根回しの出来た会議でタクトふる

高槻市 左右田 泰雄

言い訳に困って流すあぶら汗  
一筋の光があれば生きられる  
湧き水のその喉ごしの爽やかさ  
来たばかりなのに娘はもう帰る

高槻市 西谷 治三郎

無理させた丸い背中に手を合わせ  
外人さん英語で神社に祈ってる  
父の背を流すつもりの墓掃除  
肥えたいが痩せる広告ばかり出る

高槻市 江原 秀夫

アメリカの峰がゆれてる世界地図  
ほじくれば誰でもうずくすねをもつ  
平穩の寄るべ探して山の宿  
いきいきと乗り込む朝のクラブバス

高槻市 生田 義一

ら抜き語がはびこる午後の喫茶店  
無人駅ばあちゃん二人日向ぼこ  
その話三回目よと孫笑い  
燃えつきて惜しまれ去った甲子園

豊中市 水野 黒兎

ひとときも心臓にないずる休み  
度忘れを互いに笑う共白髪  
蟻地獄ここにも天の落し穴  
ワイパーのひとゆれ毎に過去を消す

豊中市 檜谷 郁子

移り住み風水の運幸を呼ぶ  
読み書きの時代は移るメール打つ  
書くほどに何時まで続く昭和史よ  
添え書きがやはり本音かだまっとこ

大東市 児玉 蛙

建前と本音をうまく使い分け  
大それた夢は持たない五人の子  
捨てられぬ小物があふれけつまずく  
ふる里の友はやさしく温かい

大東市 南原 正和

古稀なんかボンと蹴飛ばしダンシンゲ  
お隣の美人気になる一人旅  
掛合いで軒かいてる古稀夫婦  
絵にならぬ一日今日も過ぎて行く

寝屋川市 酒井 勇太郎

合コンの目的玉の奥探し  
丹精の親のシナリオ無視される  
月並みで良いと親馬鹿諦める  
先生と呼ばれ世間に疎くなる



枚方市 鈴木政子

尼崎市 山田耕治

中東戦五十年経っても終らない  
戦中でなし農産物を盗むとは  
万景峰号来るたび違反繰り返し  
自慢気にセンベイ嚙んで歯が欠ける

枚方市 森本節子

川柳誌で近況知ってくれる甥

ヘルパーさん送り迎えは旦那様

伊丹市 山崎君子

コハクチョウ羽根を休める日本の秋  
教えたり教えられたりヘルパーさん  
ヘルパーさんむすめが一人増えました

枚方市 宮川珠笑

一円をまけてくれないレジスター  
寝ていても眉間のしわが動く妻  
説明は居眠り質疑ではわめく  
ケイタイに微笑み仕舞い込む女

守口市 結城君子

天国への距離が縮まるバースデイ  
天広したなばた会はどのあたり（たなばた会はきょうだいの会）  
昇天はエスカレーターについてから  
ミサイルも地震もないと呼びにくる

兵庫県 大谷幸次郎

花一輪机にもまた季が巡る  
机よりテレビに向かう秋の夜  
秋霜の一喝に遭い身が締まる  
いい風があれば振り向く風見鶏

何本もあるであろうがママの傘  
夏祭子はおしろいの天花粉  
海見える窓を選んだ一人旅  
九十媼真ん中にして島の唄

サンマ豊漁幸せ匂う裏通り  
たか子さん昔の笑顔好きでした  
松の花ひとりの庭を充たしてる

神戸市 池田善守

初めマニフェスト土壇場は名前連呼  
生きている今日一日を大切に  
診察の結果伝える声はずむ  
オープン賑わい横目店仕舞

神戸市 伊勢田毅

後援会世襲議員が首つなく  
雲行きを見抜いてそつと座を外す  
眠られぬ夜は日記を読み返す  
ハンチング斜めにかぶり古稀に行く

三田市 久保田千代

さあ勝負鍛帳が今上がる時  
満月に明日への活を入れられる  
借景の庭に静かな月の冴え  
二階から下りる足音聞き分ける

西宮市 菊池 トミエ

夕焼けの空を見ている童唄  
ただ歩く健康法や天高し  
恥一つかいて賢くなることも  
追うほどに夢逃げて行く秋の月

西宮市 刈田 泰司

節くれた手があの頃をなつかしむ  
生まれた子牛の一步二歩三歩  
出産に立ち合い理屈ない涙  
子を産んだ日が輝いている日記

和歌山市 宮本 三喜夫

デパートも時勢の波で店を閉め  
業界も整理統合大はやり  
観光地自販機ですがよく稼ぐ  
よく辞めたまずは健康よかったよ

倉吉市 山本 玲子

ピーポーの音に胸騒ぎを覚え  
痒い所に手が届かなく身悶える  
狐のシヨール肩から擦れて逃げそうだ  
ワインのせいで魔法の口になつてきた

鳥取県 吉田 孔美子

今日は屋台に花束持つて寄る  
屋台の袖から旨いものもらう  
鼻毛伸ばして喜々と年金ぐらし  
グルメなり軒は落ちててもぼろ着ても

鳥取県 乾 喜与志

巳年の生まれ九度目へにあと九年なり  
朝夕の経を続けるお正月  
稜線を仰げば疲れなど消える  
言の葉を忘れ苦笑いのあたま

鳥取県 林 露杖

衆院選俺らが候補はぶつちぎり  
隠密の如く隣に嫁が来た  
老人会の旅行キャンセルして朝寝  
盗人は粗暴に詐欺は巧妙に

鳥取県 岩崎 みさ江

あやまちは繰り返さぬの碑が泣こう  
堰切つて溢れてしまう愚痴であり  
左見て右を見る間の物忘れ  
赦されて赦すところをいただきぬ

鳥取県 奥谷 彩子

風花と和みあつてた仏さま  
秋の陽にはしやぎ紅葉の冬支度  
肩たたきする人に待つ肩たたき  
親子だから本気で叱り叱られる

鳥取県 佐伯 やえ

失望を立ち直らせたばたんの芽  
生涯の家みつけたり白い萩  
冬の辞書ひよっこり来てはよろこばず  
今年こそ川のよどみを取りのぞく

鳥取県 下田 茂登子

哀しさを汗に流して今日も暮れ  
人生にあきらめ一つ置いて秋  
ひよっとして変人わたしだったかも  
どの場所においても変人一人居る

鳥取県 平尾 菜美

階段を昇るベースが落ちてくる  
夢ロマン語る晩酌よく弾む  
人間が大好き祭りやめれない  
足が地につけば吹っ飛ぶ寒い風

鳥取県 平井 栄翁

老いの足はめあう今日の山登り  
よいすしを食べたく財布中を見る  
鳴き砂を上手に鳴かす軽い足  
無縁仏 残りだんごを皆盛られ

鳥取県 石尾 かつ乃

飾らない老母は素足に下駄がよい  
散歩する自然の恵み背に受けて  
廃校になった母校にある未練  
菊香る晩秋の碑に立ち止まる

鳥取市 加藤 茶人

吊り橋の程に来てから迷い  
停電もいいな すませば虫の声  
屁理屈の後は黙秘という権利  
失恋のそれから効いたダイエット

鳥取市 宮脇 道子

孫達は祖母甘くみて拗ねてみせ  
咲く鉢に気持水倍もやり  
落葉舞うサラリと撫でる隙間風  
年金も命も細り身は肥満

鳥取市 富山 檳榔樹

初春は夢を力に余生描く  
銀河冴え蟹鍋の味染みてる  
オブラートに包むトラブル透いて見え  
米不作ひょうきんカカシ下を向く

鳥取市 永原 昌鼓

葬儀屋と寺がてぐすね引く長寿  
やじろべえ何があっても狂えない  
どなた様も同じ歩調で歳をとる  
凡人も野心時には目を覚ます

米子市 永井 三津子

ああ離婚引いて引かれた日もあった  
信頼をしていたのに矢がとんで来た  
輪の中でストレスたんとたんと溜め  
ほどほどにうさぎも切れりや咬みまっせ

米子市 門脇 晶子

拳骨をしらぬ子供に骨がない  
風雪に耐えてきました父の屋根  
肩書きを脱ぐと庶民の顔になる  
骨惜しみせぬまま母は旅立った

米子市 光井 玲子

青空に心のうさを吸い込まれ  
人並みの仕合せ抱いてただ感謝  
時々愛の鞭だと突き放す  
開発の波に母校さらわれた

米子市 木村 春枝

根の絡み世のしがらみを見る如く  
いやな年きっぱり忘れ初詣で  
ファミリーに慶びのあり風変わる  
新年を申がしつかり盛り上げる

島根県 持田 多輝子

まだ生きる希望捨てない白髪染め  
波風を立てず一言距離をおく  
割り箸がサクッと割れる日本晴  
死ぬ時はピンピンコロリという話

出雲市 石倉 芙佐子

戦雲も超えて初日の神々し  
離れ住む母と娘のやしろべえ  
ああしんど此処から先は自然体  
柿の種朝な夕なに水をやり

出雲市 板垣 夢醉

鍵穴は逃げてばかりは酔うた指  
お茶好きで茶柱だけは信じ込む  
台風に負けてなるかと鬼瓦  
大切な皿床の間に飾られる

出雲市 多久和 敬子

秋晴れに心の中も陽に当てる  
いい便り待って一日暮れてゆく  
虫食いの野菜が好きで買って来る  
後戻り出来なくなつた六十路坂

出雲市 久谷 まこと

いわし雲大漁旗に港沸く  
暮れ早く交わす言葉も手短に  
精進で歳に似合わぬ底力  
待っている笑顔はすべて許してる

出雲市 小白金 房子

上棟へ掛矢が響く里の秋  
言い出せぬ言葉を耐える腹の虫  
柿たわわ先祖へ感謝皮をはぐ  
箱膳を囲んだ遠い亡姑の味

松江市 佐野木 みえ

出雲富士 見上げ娘と露天風呂  
聞き流す事もまああるく生きる知恵  
子離れが出来ない親のエゴがある  
ライバルが時々私の影を踏む

岡山市 富坂 志重

突つ張り合い勝ち負け無し凡夫婦  
言いたい事言つて笑つて長生きす  
生かされて今日も夜明けだおめでとう  
下手くそなお経へ亡夫の笑う顔

岡山市 川端 柳子

しあわせと書き手の平を握りしめ

旧姓で呼ばれ答えた夢うつつ

いいないないしあわせごっこして遊ぶ

お疲れさま散りゆくもみじ見送る目

広島県 福島 万年

白内障癒えて眩しい妻の紅

新しい年自画像を描いている

虎と泣き虎と笑って五十年

犬の見るテレビを猫は見っていない

宇部市 平田 実男

稔るほど頭もたげるキャリア組

直ぐ役に立つ道草で得た知識

引き算に変わる定年後の暮らし

雰囲気でごんなに変わる酒の味

熊本市 高野 宵草

駆け足で秋が過ぎてた退院日(入院 3句)

退院の生きて夕焼け空に佇つ

布団から出たら初冬が抱きに來た

雑草の忍耐見たりアスファルト

唐津市 井上 勝 規

星がない だから遠吠えしたくなる

輝いた頃が顔出す古日記

嗅覚がお見事妻の低い鼻

予定ある日はいきいきと八十路坂

高知市 北川 竹萌

歩みきた誠実一路日の目みる

日曜市 里菜園の苗あさる

古里菜園玉葱三〇〇植えてくる

夕映えの軒の干し柿あかね色

松山市 丹下 美津子

出迎えの娘が待っている梅田駅

お伽噺に出てくるような家を建て

七五三 こども賑う中山寺

紅葉も少し早いか壺阪寺

松山市 高橋 宏臣

美しい嘘だ騙されるとしよう

参考になつたと負けは認めない

人の真似するなと子猿しかられる

いじらしい男で妻に酒を酌ぐ

青森県 小寺 花峯

悲しくも笑いに浮いた二枚舌

隣の薔薇は気にしない木瓜の花

毎日が休み楽しさ半減す

トリスバー復活若さよみがえり

弘前市 宮崎 ヒサ子

短靴でさつさと歩く雪降る前

二人ぼっちもいもんだなと月夜酒

七十路は片付けながら探し物

こわいから予防注射の予約する

弘前市 櫻庭順風

パフォーマンズ今日もやる気の験担ぐ

格式を求める声にある悶え

稽古場で負け土俵では勝つ不思議

花束に困惑の顔するなんて

弘前市 須郷井蛙

出張の夫を追って旅に出る

東京は破裂しそうなゴミの山

流行を追わずに生きた母の貌

米櫃が空っぽ寒い風が吹く

弘前市 相馬銀波

脇役の一人出番の初春を待つ

嘘はうそでも目標でしたダイエツト

戻るとも出るとも取れる妻の愚痴

スタンスを搜して揺れる影法師

十和田市 阿部進

赤色がとっても似合う歳になり

己がヘソそつと見ているヘソ曲り

悪女にも魔女にもなれず古稀迎え

舞い込んできたこの恋は離さない

滋賀県 中宗明

見栄を張りペンツレンタル デートする

現世代常識人が変人だ

湯治場は苦勞ばなしで意気が合

何気ない世間ばなしでヒント得る

京都府 稲葉冬葉

人生を狂わすほどの人もない

エコー技師たのしんでいるように見え

強いこという美人看護師だったなあ

気晴らしに新しい靴履いて出る

京都府 丹後屋 肇

鉢巻と法被を着せる肩車

鉦太鼓笛 軽トラに法被の児

スピーチも上の空なるフルコース

緊張感ほぐれて溶ける三次会

亀岡市 井上 森生

豊満な鯉と素朴な和紙人形 (津和野)

松陰が志を貫いた三疊半 (松下村塾)

柔らかなうすむらさきの肌の酒器 (萩焼)

河の威に技で応えた太鼓橋 (錦帯橋)

### 第32回しもきた川柳同夢ごあんない

課題 「樹」 3句 (新作)

選者 高見宏子・坂下和子・瀧正治・田代伝・森田栄一・大谷

参加費 晋一郎・秋本トヨ子・荒砂和彦・大田かつら・高田寄生木

記入 一、〇〇〇円 (定額小為替・現金・誌呈)

①郵便番号②住所③姓④電話⑤県名⑥性別⑦年齢

⑧もしも一億円が当たったとしたら使い道は

用紙 A5判 (15×21センチ)

締切 1月31日消印

送付先 〒039 300 青森県下北郡川内町浦町 高田方川柳同夢事務局

主催 しもきた川柳同夢の会

# 白選集

橘 高 薫 風

西 田 柳 宏 子

病人も介護も入歯屠蘇の膳  
まだ成れぬ本の匂いのする人に  
熱爛に男の友達が居ない  
一日で十年生きた氣のする日  
発狂をするまでのこの繰り返し

遠 山 可 住

西 村 早 苗

ペットボトル勝手に飲めと議事すすむ  
売れ残る大根の花蝶が舞う  
精一パイ今年を生きた年賀状  
メル友という見知らずの友が出来  
幕引きのチャンス拍手が止まぬうち

土 橋 螢

仁 部 四 郎

父ははのうしろの山に雪が降る  
美しい女に追われる夢の中  
笑ったら躰がすこし軽くなる  
明日も生きる約束をして仕舞う  
何のために生きる信心のこたえ

ハイオメデトウサン八十四の元旦  
おめでとうさんの呂律に歳を知る  
新年の賀詞に年寿の重味抱く  
阪神の知恵と云っているシヨック  
新年の賀詞を背中と肚に抱き  
散歩道ふと口ずさむわらべうた  
四季めぐる猫のひたいの冬囲い  
老いの風 風にまかせて風のまま  
大それた望みはもたぬ裏表紙  
竹箒落ち葉散るのを待っていた  
御時勢が更迭劇の主役かも  
日付けこそ更迭劇のキーワード  
裏門で更迭劇に朱が入り  
仇討ちを更迭劇は覚悟せず  
民衆は更迭劇にすぐ倦きる

野村 太茂津

平伏せば胸に靖国みそなわす  
黄金の言葉いただく初日の出  
追風を背に矢面に立つ覚悟  
紋付袴も作務衣も同じ胸の裡  
来年は卒寿鎮守の森に生かされて

波多野 五楽庵

木枯しの韻律満ちて亡母の町  
外れ簑ばかり拾っている迷路  
情念に生きるしかない雪おんな  
堅琴の糸が淋しい娘の忌  
妻を打つほどに哀しく酔うている

藤井 明朗

菊豪華秋の名残を惜しんでる  
新年を迎え会いたい友を待ちわびる  
寿命頂く神仏の加護感謝  
複雑怪奇世界の平和まだみえず  
生きる力を川柳あとおししてくれる

藤村 / 女

一年が幸せだった初もうで  
酔えば寝て起されば飲んで松の内  
いい事がありそう茶柱に期待する  
お年玉曾孫五人を待っている  
生き抜いて母は小さく丸くなる

芳地 狸村

転倒の自転車事故が夢の中  
骨折の右手使えぬもどかしさ  
左手でつまむスプーン味がない  
骨折の腕に合わせる食事法  
リハビリにたのしく励むトレーニング

宮口 笛生

蟹鍋へ孫にこにと蟹の足  
金魚鉢金魚試練の冬にいる  
たつぷりと酒もあります三が日  
生き抜いて金魚正月迎えたり  
寝正月まだまだそんな歳で無い

森下 愛論

壊された夢を追ってる茶をすすり  
輪に入り訳分からぬままに笑い合い  
何思う含み笑いをする女  
良心で食えるかいなと欠伸して  
時差つけて菊の香りも秋の色

八木 千代

リュックいっぱい行く末の地図詰めておく  
さざ波をつめた袋を胃のあたり  
破れないで欲しい五体の袋たち  
あやふやを死ぬまで抱いている袋  
袋あけると蝶が目覚めて出ていった



八十田 洞庵

親が子<sup>が</sup>を子が親を刺す世のあわれ  
落葉踏む音させて来るだんな寺  
引き算が出来ぬ余生で老いを知る  
春が来るまではいつも生きている  
恋と学叶えと絵馬に欲ばりぬ

両 川 洋 々

代理出産国籍持たぬ児が生まれ  
いじらしい奴だ男にしてやろう  
どん底で半端な金に目がくらみ  
パフォーマンズだけで政治ができるかい  
破調句のような一生笑うなよ

阿 萬 萬 的

惚け防止の薬と下手な句を作る  
先走る知ったか振りでうとまれる  
大欠伸してもやもやが消えました  
ときどきはぐらつく夫婦独楽の芯  
すぐ顔に出るのもただのお人好し

石 川 侃流洞

ハイチーズひねた笑いを強いられる  
眠ったらそのままだろうか老いの床  
食べて寝てもうときめきはない米寿  
仁義礼智信大正ひと桁しがみつく  
望遠鏡宇宙の果てはまだ知らず

板 尾 岳 人

身の締る思いを抱いて初日の出  
携帯を猿に持たせている街だ  
木から猿落ちて携帯離さない  
御主人に逢える喜び抱き逝かれ  
年賀状出せない訳がありまして

(垂井千寿子さん)

奥 田 み つ 子

初光 八十年の塔の艶  
仮面まだ脱げないままに冬に入る  
勝ち負けは嫌い勝ち負けばかりの世  
育てられた月日やさしさ溢れてた  
あれもこれも及ばぬながら恩返し

河 井 庸 佑

忙中の閑を無駄には過ごさない  
これしきの謎が解けぬを口惜しがる  
心持ち表し果たす義理ひとつ  
口ほどに動かぬ体もどかしい  
やんわりと祖母の寝め身に応え

川 島 諷云児

過去繰れば愚かさばかり悔いばかり  
長い道時には雨も曇る日も  
噂一つない寂しさと安心と  
福の神今年も素通りする師走  
一年の早さを思う年賀状

木村 あきら

山川草木皆新たなりお正月  
福笹が街中をゆく初恵比須  
葉牡丹も一際映える初日之出  
方言を入れると冴える祝い唄  
新玉の年へ祈りが深くなる

工藤 吟笑

君が代を歌えば父の背も伸びる  
千年の眠り古墳が目覚ます  
日本海波に男の詩がある  
荒波に江差追分溶けてゆく  
荒波を乗り切つて来た九十年

黒川 紫香

九十年僕より若い宝塚(宝塚歌劇九十周年を祝う)  
春日野や天津乙女も知っている  
ラインダンス足の裏まで見て帰り  
宝塚親衛隊もみな女  
ばあちゃんに負けず母ちゃんヅカファン

小西 雄々

なだめても納得しない脛の傷  
友の手の温さを保つとんびの輪  
蒼天に雀もいだく夢ひとつ  
真実を見とどけるため玉子割る  
向い風を追い風にして母校出る

小林 由多香

改革へメンバー若く替えてみる  
我が家でもたまには欲しい良い匂い  
美しい金魚うまそうには見えぬ  
急いでも汗ばかり出る老いの足  
のんびりとゴールなどない趣味の道

斉藤 焔

朝露のまんまりんごの丸齧り  
解散のニュース無縁の鍬を振る  
道草の話を好きなたつむり  
鳳仙花いのちのうたが弾け出る  
永遠の平和を探る太いペン

田口 虹汀

井桁に橘それが我が家の旗標  
本人に心の窓を開けて見せ  
爺の代から我が家は丸に九枚笹  
炬燵のお陰これで寒さも防げます  
前年よりも平凡だった文化祭

竹内 紫鏑

寄せ書きの旅 後年の詩につなぐ  
句は休み論考しるす精と根  
姿勢から医師に元氣と褒められた  
旋律を知るまでカリヨン巻く散歩  
満期がどうので句集にも締切日

新年や 今年は何をしようかな  
いまこそ花を戦争のない地球  
雑兵は雑兵なりの意地がある  
冬木立 愛想笑いなどしない  
この歳になって分らぬ事ばかり  
残高はもう気にしないケセラセラ  
ワンテンポいつも遅れるもどかしさ  
矍鑠としてると敬遠されそう  
感情線なだめすかして生きてます  
ポツクリとゆく気私のマニフェスト  
いい年になる瑞雲の申が明け  
猿に似て猿にはならぬ墨と筆  
ゆるゆると八十路の坂を杖持たず  
人生の余白大事にして生きる  
肝心なところを遊ばす名人芸  
寒いけど見入る見事な星月夜  
意味のない事で笑わす漫才師  
おとなしい顔をしている反逆者  
好きでない人とも握手して帰り  
破られる宿命をもつ新記録

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 河 | 恒 | 玉 | 田 |
| 内 | 松 | 置 | 中 |
| 天 | 町 | 重 | 正 |
| 笑 | 紅 | 人 | 坊 |

### 第55回 三原市神明祭協賛川柳大会

とき 2月8日(日) 10時開場

ところ 三原市市民福祉会館 5F

(JR三原駅前南へ徒歩3分)

- ◇挨拶 備後番傘三原万松川柳会 八島 白龍
- ◇祝辞 三原市教育長 植木 章弘
- ◇祝辞 広島県川柳協会会長 定本 広文
- ◇事前投句 「綱」 三浦 宏 (呉市)
- ◇宿題と選者 「艶」 森中恵美子 (摂津市)
- 「土」 田中 新一 (大阪市)
- 「爪」 定本 広文 (広島市)
- 「釣」 和田 宏 (今治市)
- 「蕾」 小島 蘭幸 (竹原市)

◇席題なし。事前投句締切 1月25日必着

◇出句 各題共2句まで。出句締切 11時30分

◇会費 2,000円 (昼食、発表誌呈)

◇懇親会 3,000円

(大会終了後同所で午後7時までの予定)

◇欠席投句は、1,000円同封。1月25日必着

◇投句先 〒723-0012 三原市旭町2丁目1-8  
八島白龍宛 (0848-63-2947)

主催 備後番傘三原万松川柳会

後援 広島県川柳協会

### 第24回 ときせん賞作品募集

雑詠2句 (未発表句)

選者 大野風柳 河内天笑 去来川巨城  
森中恵美子 小松原爽介

投句締切 平成16年1月31日 消印有効

発表 平成16年4月号誌上

賞 ときせん賞1名・準ときせん賞2名  
佳作7名

投句料 「時の川柳」購読者は500円(定額  
小為替)購読者以外は1000円(定  
額小為替)発表誌進呈 ▼切手拝辞  
投句用紙 便箋大(B5サイズ)用紙に作品2  
句と住所氏名を明記のこと。

投句先 〒650-0026 神戸市中央区古淡通  
2丁目1-21 土井喜久栄 宛

選句方法 無記名清記の上、選句。一句ごとに  
その合計点で順位を決め、上位10句を入賞  
句とする。(平拔2点・五客3点・三才4点)

◎多数のご応募をお待ちします。

時の川柳社



板尾岳人選

岡山県 矢谷 富士野

愛媛県 黒田 茂代

終章を飾る落葉の風に舞う

自分詩を語る落葉の吹きだまり

豊作の祭りに神も千鳥足

残り火をくすぐっている春の風

竹箒ちびて今年も秋終る

吹田市 木下 敏子

これほどの倅でいいサラダ盛る

残り火をとろとろ燃やす紅葉狩り

人並みのつもりで好きな服を買う

倅せがはち切れそうな紙袋

響き合う言葉だいに夫婦独楽

岸和田市 雪本 珠子

違う道目線変えれば見えてくる

舞台裏誰もが持つて生きている

さりげなくルームキーだけ置いてある

ほろ苦い夫婦喧嘩も久し振

もう会わぬきめて心は揺れている

たまゆらの命揺らして風立ちぬ

未完成のまま遠い日の心の絵

一リットル飲んで細胞洗う水

因果応報みなに優しくしておこう

生れつき右脳とわたしうまが合う

今治市 野村 清美

ちぎり絵に幸せ重ねバラが咲く

大空へ胸のしこりが解けてくる

過去の事みんな忘れた玉手箱

見届けて知らん顔する昼の月

口づけて捨てられました紙コップ

東京都 やまぐち 珠美

目をそらすたびに流れてしまう虹

代返の効かない問いを押す不惑

いつまでも素焼きの恋で割れやすい

平仮名で綴り原義をとりもどす

沈思まで深みを手繰る秋の闇

大阪市 尾崎 黄紅

七匹の申従えて春迎う

鍵穴を覗けば錐がでてきそう

考える輩に毛嫌いされている

上り下りする階段にまだ負けず

絵に描いた恋をしている老いの猥

池田市 多田 契子

これからの寿命と今も交戦中

これからも愛くれる人捜します

いたわりの言葉を出せた南風

温もりが欲しいと虫は眠らない

シャンソンがまとわりついたぬるい午後

和泉市 横山 捷也

絵の具では出ぬふるさとの母の色

蛇行した川を気ままに生きて行く

三叉路を迷って選んだ道だから

無農薬虫と半分ごっこする

更年期ですとドクター軽く言う

河内長野市 大西 文次

まさかとは思うまさかが来た不況

じたばたとせんでも朝がやって来る

哲学の本を枕によく眠る

なんのかの言うても同じ釜の飯

松茸を食べない訳は別にある

岸和田市 坂口 英雄

飽きる日も時々主婦の台所

勤労に感謝したいが職はなし

行列があると並んで見たくなる

不況でも文句いいつつみな元氣

秋の旅景色もいいが酒も良し

岸和田市 亀井 皎月

おめでとう不幸を知らぬ年賀状

老春の乱れ気になる年賀状

恙なき福を頼みに初詣で

障子替え光が映える初日の出

健康で素直な老いを祈る歳

堺市 大久保 伸子

日本の四季にへとへとしています

アルバムをみれば会いたい人がいる

裏切りにあつて人間鍛えられ

改札機かみつくように切符のむ

丸い背をいつも叩かれ生きてます

吹田市 須磨 活恵

丸腰で生き延びて来た履歴書

ふるさとの海鳴りを聞く秋の鯖

ひと皮のレタスに朝の幸を盛る

もう古い夢は捨てましょハイヒール

春を待つ私の中の蒼い野火

羽曳野市 森 下一 知

美しい嘘で退ち去る見舞い客  
しがらみに潮の流れを読み違う  
振り向けば危ない橋も二度三度  
言い訳はもう通じない温暖化  
ワイシャツのルージユに続く低気圧

枚方市 二 宮 紫 鳳

背を正す明治の姑の生き手本  
イキイキと停年迎え今が旬  
孫の声取り合う受話器で仲直り  
人が好き似たもの夫婦の開放感  
前向きに歩み確かなベアシューズ

藤井寺市 鈴 木 いさお

たとと芽を出せよと種に言い聞かせ  
ごめんねと謝りながら間引きする  
買う方が安いと言われつらい葱  
メイドインチャイナで我慢土瓶蒸し  
左利き集合場所は縄のれん

箕面市 寺 井 柳 童

秘書疑惑赤い気焔に法のメス  
書のかすれ素質があると煽てられ  
万景峰歯切れの悪いドラが鳴る  
マジシャンの話芸が冴える種明かし  
狂い咲き箕面市桜四丁目

八尾市 赤 木 妙 子

力尽き気紛れ風に舞う木の葉  
指先に触れて絆を確かめる  
健康は宝石よりも金よりも  
無料という殺し文句が足をとめ  
洗いたい気を捨て切れぬ無洗米

大阪府 神 野 千恵子

切り札を大事に持って持ったまま  
風景がまあゝるく見える雪景色  
ひなたぼこ耳鳴りさえも心地よく  
両の手に数えて余る友がいる  
相性の合う病院でほっとする

神戸市 両 川 無 限

あれ以来妻に忍術かからない  
私より短気な人に近よらぬ  
風を読みすぎて自信が揺らぎだす  
まだセーフ鏡に呪文かけている  
ふと思う独りになった時のこと

奈良市 乾 春 雄

勇み足少しいい気になりすぎた  
老化して斜めにゆれる独楽の芯  
首縦に振ったばかりに義理が出来  
我儘を通してくれぬ信号機  
親しさに車間距離つめ悔い残る

和歌山市 喜田 准一

損得が絡んで殻が固くなる  
いい答だけを待つてゐる虫のよさ  
反対の口火を切つてゐる勇氣  
それなりに聞き置く軽い氣の意見  
強過ぎる灰汁を個性と言い替える

田辺市 大峠 可動

自画像が猿に似て来て冬籠り  
煩惱を抱いて大事なものも抱き  
米価混迷狂つた時の置きみやげ  
忘却のように落葉が溜まる秋  
事始め天に一章地に一章

和歌山県 辻内 次根

生欠伸今日一日を食い尽くす  
大脳を色鉛筆で刺激する  
ほんやりとして溜息をついてゐる  
ちつぽけな自分を許すまで歩く  
遠くから風に会話が乗ってくる

和歌山県 村中 悦男

沈黙の仏に心奥見られ  
陶芸家君の骨つぽ市販だね  
くり返すいいわけ話にうそがある  
駐車場空いて満車の道路わき  
こつこつと安値の野菜を出荷する

鳥取市 山口 千代子

口喧嘩負けるが勝ちの夫婦劇  
娘の家で笑つて泣いて氣を晴らす  
ふと思う私何時まである命  
距離守ることで夫婦の和がつづく  
老い遠慮せねば波風立つ同居

鳥取市 森 美智代

三猿は無理のようです初日記  
わたしより知恵も上です猿軍団  
新しい服と明日を待つてゐる  
古紙に出すカタログばかり多過ぎる  
総選挙済んで忘れるマニフェスト

鳥取市 近藤 秋星

北風が勢力を増し冬に入る  
生きている証にもなる賀状書く  
木々でさえ最後は紅葉して飾る  
明日は明日私は今日の花を植え  
一生を花咲くこともなく終えぬ

米子市 足立 由美子

私なり悔いないように今日を舞う  
下駄箱にも季節の風を入れてやる  
カラコロと記憶の中の下駄の音  
胃袋にだけは本音をうちあける  
楽しみをいつも探している帽子

鳥取県 吉田 弘子

見物客値踏みしているオリの猿  
一夜漬け袋の中で朝を待つ  
自己流に気合いを入れるドッコイショ  
すっからかんだから野心が燃えてくる  
野仏も霜を合図に衣更え

鳥取県 福西 茶子

孝行の真似してみせる肩たたき  
父に似た入道雲が笑いかけ  
正直を絵にしたような父の背  
背信を許した道に雪が舞う  
雪が降る真赤なコート着ることに

出雲市 加藤 スズコ

今日も無事疲れ呑み込む缶ビール  
刈取りを終えて案山子も横になる  
台風に秋を見ないで落ちた柿  
心地良い風と遊んで米を研ぐ  
郷愁のドラマを包む茜雲

出雲市 荒木 英子

熟れた柿カラスの仕業知恵くらべ  
秋日和真つ赤に燃えた京楓  
天高く私のハート今青春  
七十路に私を変える好奇心  
忍び寄る寒さに堪えて夢を追う

愛媛県 花岡 順子

腕磨くための投資を惜しまない  
若い気のうっかり飛んだ水溜り  
ジャンプした夢が一気に冷めてくる  
夢ばかり追いかけていて風邪を引く  
床みがく心が映るほど磨く

高知県 近森 功

杖ついてまだ七色の虹を追いつ  
赤い糸もつれをほぐす子の寝顔  
一枚の舌で並べた嘘の数  
還らない昔をまたも口に出す  
カタカナで公約だますマニフェスト

高知県 桑名 孝雄

四方拝歌が聞こえるあの辺り  
一里塚承知で屠蘇を酌んでいる  
未熟だな耳順とつくに越えている  
無病息災甲種合格する気焔  
撤饌の儀お神酒が少し減っている

秋田県 秋野 宏

哀しみの涙は青い空が拭く  
騙し絵を見抜けず農の半生記  
不発弾みなそれぞれに持ち合せ  
名も知らぬ花にみとれる秋日和  
少年の怖さ知らずに怖くなり



大阪市 中村 トミノ

大阪狭山市 羽田野 洋介

八十路坂登りながらに夢さがす  
恋悩みあつて始まる文学書

たてじまに野球音痴も魅せられる  
マニフェスト風呂屋のお湯にならぬよう

大阪市 平井 露芳

抜けるまで待てと歯医者慌てない

不眠症癒やすラジオの深夜便

扇風機のふりして温い風を出し

七戦は甲子園なら勝てたのに

大阪市 升成 好

寄り添っていては跳べない水たまり

かすれ字で余白生かしたつもりの書

怪我をした数勲章にしています

面倒が嫌であやまり癖がつき

大阪市 伏見 雅明

賽銭の音に振り向け仏さま

母の膝百人力の匂いする

愛しさにリボンを結び贈ります

満面の作り笑いも生きる知恵

和泉市 小坂 凡英

ちらちらと落ちる葉もあり総選挙

句をひねる風呂に親しむ候が好き

那谷寺で西国済ます不埒者

玄奘と鑑真に会う西の京

もう一杯その一杯が乗り過ぎ

あのチャンス逃したことがきっかけに

やわらかな言葉の裏にある本音

貫禄について行けない影法師

泉佐野市 稲葉 洋

怒号には耐えたがやさしさに崩れ

命日という結び目がある絆

年頭を守るに多き座右の銘

初春の陽射しよ弱き者にこそ

交野市 田岡 九好

もうよろしやろと塩爺引退す

喉見せて太平の世の大あくび

お役所の文章読んでボケ防止

美人には上目遣いになるわたし

河内長野市 木太久 正一

囲碁二段一念発起再挑戦

人生の秋 垣間見る小津映画

カレー煮る整腸効果期待して

大輪の菊隣からお嫁入り

河内長野市 坂上 淳司

挨拶をしそびれ以後は犬と猿

残り香を追って深みにはまり込む

お迎えが早く来てとは本心か

おふくろを騙したことがただ一度

岸和田市 森 元 ふみよ

いい加減軽い財布に愛想尽き  
友人の呑気さ加減に癒されて  
このところドッコイショが口に出る  
御堂筋男の貌を見に走る

堺市 奥 時 雄

ヘルメット外し和尚の顔になる  
侮辱にも仕事だからと涙のむ  
描けそうでやはり描けない抽象画  
銅像の威厳は知らず鳩のフン

吹田市 二 宮 栄 子

子等皆が泣かせる言葉置いて去り  
秋なすに義母の笑顔を重ね見る  
手のひらの傷にはふれぬ老いの知恵  
仏からお下りもらう鮭茶漬

高槻市 田 中 初 恵

チョコチョコとついで試す意気地無し  
ぬれぎぬを防いだ女性専用車  
正直で人傷つけることもある  
やがて逝くその日もきつと微笑んで

富田林市 稲 川 恵 勇

意地悪な風先頭に立つと吹き  
惚けたふり知らない事にしています  
恋を知り青い果実が熟れていき  
尻尾ふりこれも仕事とよいしよする

寝屋川市 岡 本 勲

赤トンボ唄ってむかしたぐり寄せ  
どの薬効いたか元氣とり戻し  
使い捨てカメラ知ってる事故現場  
写真帳めくると母が生きている

東大阪市 小 川 賀世子

遠い日の記憶の糸を手繰り合おう  
それぞれの悲喜劇聞いている子猫  
狂想曲の幕引き今はひとりの灯  
亡夫への惚気お互い負けていず

枚方市 大 昇 隆 広

星月夜汚れた昼の裏にあり  
屋台の灯 憂い温めて街の絵に  
早仕舞い小さな旅へ途中下車  
ちよつと旅逃げられぬ日々から逃げる

枚方市 莊 司 弘 之

今年また今年こそはと初日の出  
三猿をうまく使つていい年に  
ほろ酔いで眺める月の心地よさ  
比較するものがあるから悩み出す

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

両親を送り夜長の爪を切る  
返事ない亡夫と話す菊日和  
千羽鶴飛ぶようにして窓の風  
初日の出四方八方手を合わす

藤井寺市 俣野 登志子

胃カメラをのむ頃調子よくなる胃  
完璧な妻を望まれ疲れ果て  
窓越しのとなりのバラに癒される  
若いねと言われその気になった罰

八尾市 松葉 君江

少子化に頭の痛い地藏さん  
お灯明心の飢えを取りもどす  
早起きの血の一滴が母譲り  
欲一つ捨ててそれからよう眠り

八尾市 西川 義明

思案する扇子閉じたり開いたり  
キッチンで母の温みの音を聞く  
ゴキブリの大親分を打ちのめし  
うまいもん半分つこする老夫婦

八尾市 中島 春江

素っ気ない挨拶をする好きだから  
挨拶のしかたひとつでわかる仲  
聞くと見る違い大きい口車  
縫う気はないが頼りになる人を

八尾市 脇 俊子

君なしで生きて行けぬと囁かれる  
啓蟄を待てず私も春を着る  
歳月の想い出つめて紐をかけ  
風穴をあけて一歩前に入る

八尾市 平川 幸枝

長き夜の折合いつけてペンの息  
指切りがこんなに重いカレンダー  
個としてのわたしがあつて消耗品  
今日も過ぎデジタル文字が過去となる

八尾市 寺川 はじむ

飾り気を盛らぬ親父にある威厳  
中吊りの見出しが喋り出す雑誌  
安上りリフォーム後に知る手抜き  
正解を蹴って男の意地を見せ

大阪府 高木 道子

頼まれたように木の葉を散らす風  
勇退と解雇厳しい永田町  
諸々の火種を抱いて黙りこむ(麻原)  
ダイエットおいしい秋に目をつむり

神戸市 山田 婦美子

患えば少し冷たい隙間風  
堪忍の終着点は何処だろう  
よき事もあつたが収支ゼロになり  
肩叩き券だけ届く孫の便

尼崎市 河津 正治

ときめきを隠す鬼灯葉が揺れる  
おも舵いっぱい今日から妻のタクトです  
退屈を言つては居れぬ蟻の列  
持て余す刻を悪友よく見抜く

篠山市 谷 田 多美子

シルバー席睫毛きれいに描けますか  
来年も世話になります夏バジヤマ  
ドクターに甘えて見たい今日の鬱  
たこ焼きの誘い振り切る白い風

三田市 堀 正 和

僕んちの時計に少し時差がある  
露天風呂ここが極楽かもしれぬ  
筋書きを知って見ているサスペンス  
本当の敵は味方の陣にいる

奈良市 成 橋 邦 柳

有栖川サギ師の宮に乗取られ  
誕生日すんだ事すら気がつかず  
暖冬もふところ寒し年の暮れ  
この病神よ仏よ何処ですか

奈良市 田 中 賢 治

居酒屋で今日のもめごと飲み流す  
金バッジ渡り歩いて蹴飛ばされ  
高下駄を履いて改革雪の道  
ネクタイに今日一日の気を締める

奈良市 矢 野 良 一

カラオケのセリフ直らぬ国訛  
たこ焼きはなにわ育ちの文化財  
少子化に引く山車佗し村まつり  
洗えば資源捨てればゴミの紙バック

奈良県 江 波 正 純

片隅のオンリーワンでよしとする  
長寿国追加のいのち謳歌する  
エエカッコしてみたけれど落ち着かず  
まちごうて尊敬されて肩がこり

和歌山市 根 田 よしこ

美しい嘘も時には罪となる  
誰にでもにつこりできる得意芸  
主婦という現役ずつと続けたい  
明日もまた忙しいから生きられる

和歌山県 森 下 順 子

罪のない軽い嘘なら潤滑油  
残飯整理して私のお留守番  
残り福少し弾んで老いの恋  
次々と風が運んで来る噂

鳥取市 横 田 春 名

母の胸いつでも避難場所がある  
いばら道亡母の背中は越えられぬ  
ケセラセラ危ない橋を渡り終え  
いい夢をも一度見たく旅支度

鳥取市 岡 田 信 恵

突き当る壁が厚くてさきみえず  
自己主張得意な顔で訴える  
年金の傘の中でのおつきあい  
食欲はバランスとって健康美

鳥取県 鈴木 一弘

母校には恩師の声が壁に住む  
嫁の座で母に習った所作で舞う  
下駄履いて人の心の窓覗く  
下駄履きで満月跨ぐ水溜まり

鳥取県 岡村 孝明

優しさに胸の扉を開けて待つ  
隠しても喜び自然漏れるもの  
愛犬の涙にこぶし下ろせない  
定退の余裕は旅で忙しい

鳥取県 西垣 美知子

空仰ぐ神の返事が遠すぎる  
忍と情け負けない母の私小説  
たくましい子等が集る樹になろう  
写経して身から出た錆落したい

鳥取県 竹森 富久江

忙しさ季の伴走が急きたてる  
画廊から黄ばんだ風が洩れてくる  
ぐちだけは野へ解き放ちシャボン玉  
案じては待つことのみに母の性

鳥取県 細田 裕花

旅ひとり寂しい時は笑います  
引き際の美学忘れた老いの意地  
ひんやりと素足の好きな暮らしぶり  
レンタルで物を持たずに暮らす主義

松江市 松浦 登志子

母は月優しい光満々と  
片づけを終えて背伸びで見る月夜  
故郷に親なく長い冬の色  
パンよりもご飯に汁が良いらしい

出雲市 小豆沢 歌子

いい汗を掻きたくなって治す傷  
木枯しの向こうに冬の音がする  
やさしくて手紙の角も丸く見え  
私が投げて返している疑問

倉吉市 青砥 菊枝

人それぞれ個性があつて味がある  
百円シヨップあれもこれもと高く付き  
自分史の小さな嘘は許されよ  
他人事じゃなかった膝が愚図り出し

米子市 猪森 スミエ

骨粗鬆転ばぬ先の杖を買う  
職探し今日も激しい向い風  
神様が時々くれる福袋  
胃袋と相談の上ダイエツト

鳥根県 毛利 幸

やみくもに走った人生六十路坂  
ふるさとは私を抱く母の胸  
川の水怒りころして蛇行する  
透明になつてあの人怖くなる

島根県 福岡 博利

わが影のあゆみシナリオ罪はない

楷行草いじくりまわし長閑なり

古里の旧家も消えて秋の暮れ

鉄塔を伝って往けと道教え

島根県 武島 ちよえ

つつかい棒はずされ風のなすがまま

損得に賭けた日もあり影法師

かけ替えた橋に温みが伝わらぬ

適切な言葉が出ない気のあせり

島根県 松本 聖子

腕ぐみを解かしてくれたヒントくれ

容赦なく木枯し吹いて傷疼く

難聴で争う事もない平和

どたん場で本音を吐いて一呼吸

府中市 馬場 利子

機を織る錦の織目母の彩

生きのびて秋の思い出皿に盛る

やがて春命の重みかみしめる

残菊を女心を活けてみる

宇部市 高山 清子

老母の手のぬくもり残る握り飯

かわらぬことの易しさ難しさ

答弁を聞けばやっぱり風見鶏

温泉の湯気の向こうに亡母を見る

北九州市 岡田 幸生

ブライドが邪魔して莫迦になれずいる

濡れ衣を着て本当の味方知る

生きている温もり貰う露天風呂

プラス思考で生きております一人著

唐津市 坂本 兵八郎

見せぬようしてる小さな知恵袋

取り敢えずしつぱ振ってる犬の知恵

日めくりが痩せてはじくる老いの鬱

金かけたけれどやっぱり蛙の子

宜野湾市 杉谷 一栄

口癖になってるらしい有難う

玉手箱中身知ってるけど欲しい

欲が出て米寿の夢も叶いそう

左ばし躰ける方が珍らしい

今治市 渡邊 伊津志

あめんぼう水を鏡として躍る

雑草の私語聞き分ける顔の皺

盲点を知ると可愛さ見えてくる

自画像は愛を託したメッセージ

愛媛県 宮本 末子

新米の不作は言わず子に送る

良い母の躰で育つ良い曾孫

小春日の長さで遊ぶ象の鼻

性格が見事出てくる餅拾い

高知市 伊野部 和 江

そつば向く花に言い分ある窓辺  
亡き義父に夢で心配してもらい  
生け花の鉢で芽吹いてゆく気合い  
折り返し地点そろそろ恩返し

札幌市 三 浦 強 一

ライバルの尻尾掴んでいる微笑  
欠点も特徴もなく生きている  
追求の妻へともかく黙秘権  
コンビニがあり独身を謳歌する

秋田県 湊 修 水

古い二票床を脱け出し行使する  
宰相は支持を受けたと言うけれど  
虎軍団古々米並みに見直され  
コンバイン舌打ちをして秋終る

東京都 井 上 つよし

過去は佳し今もまた良し自然流  
木洩れ日が絵になる今朝の散歩道  
青と黄で癒しの緑生む絵筆  
古稀すぎてほんとの円は未だ描けぬ

武蔵野市 亀 井 円 女

好きなだけ夢を見させてくれた亡夫  
大阪のたこ焼きたんと食べた夢  
枯れ際が大事ですぞと独り言  
十人十色好かん人やら温い人

横浜市 長 島 亜希子

ウィルスにホットメールをかき消され  
謝辞みごとさが故人の子と言われ  
久々の帰省大目に見てやろう  
探しものここかあそこのうさぎ小屋

新潟県 高 野 不 二

年金があるから俺が世帯主  
現金を持たねば怖いものはない  
別々にへそくりを持つ停年後  
大臣の言う事聞かぬ人もいる

富山市 松 見 た え

人生の転機を変える旅切符  
焼く前に見てほしかったサンマの背  
新婚へ大家何かとお節介  
気付かない内に秘密の荷が崩れ

岐阜市 平 野 あずま

肅々と玉砂利を踏む初詣で  
コンビニのおでんに冬が煮えている  
老いの知恵一病巧く飼ひ馴らす  
お茶飲んだだけの会議に税使う

京都市 清 水 英 旺

日だまりにのら猫がいて我もいる  
落陽の瞬間芸だ空変化  
ケイタイを買って現代人になる  
法堂を圧する読経に頭垂れ

京都市 三宅満子

抜こうかと思う朝また花が咲く

物忘れは神にもらったブレゼント

一人前に新酒の出来をほめている

大阪市 井丸昌紀

待ち合わせ改札口は二ヶ所ある

ためらっている間はないぞトンビ舞う

今の子等外に馴染まず小宇宙

大阪市 池上清治

満開のコスモス妻の首を埋め

嫌われず離れぬほどに孫叱る

テレビから元気をくれたタイガース

大阪市 三浦千津子

日本中お祭りにしてタイガース

さあチャンス息整えて高く飛ぶ

人生にいろいろありて泣き笑い

大阪市 中村忠敬

成人式初めて和服着た日です

健康によいとぶどう酒ばかり飲む

札束で優勝買いたいジャイアンツ

大阪市 近藤正

変人も見慣れてくればただの人

泥沼のイラクへ人も金も出し

物忘れ探すそのものさえ忘れ

大阪市 吉内タカ子

定年のない趣味生かすおじやま虫

朽ち欠けの脳も磨いて盆梅に

日に一度新聞だけは目をととす

大阪市 寺井弘子

亡き母の歳を越えても母恋し

お互いの葉見せ合う旅の宿

そつと乗る一喜一憂の体重計

生駒市 小西稔

大仕事終えて一杯うまい酒

まりを蹴る古代の儀式もみじ色

金もうけうまい話は蹴る勇氣

泉佐野市 備後三代子

浴室をのぞく隣のつるし柿

ダイエット明日からという袋菓子

露地やさい並ぶお店に足の向く

河内長野市 内海綾乃

元氣あり壁にくいこむつたの莖

はやく姑仏間で菓子を食べている

夫逝きて何時の間にやら三回忌

河内長野市 印藤智子

自分史をまとめて肩の荷がおりる

青春のなごりためらい傷のある

時刻表ノートの上で旅行する



柏原市 伴 洋子

摂津市 望月遊美

ためらいは優しさ狹さ気の弱さ  
哀しみの深さ無言の目が赤い  
好意だけお受けしますとそっけない

門真市 矢阪英雄

根性を叩き直してから歩く  
大型のベット受け入れ旅に出る  
コンビニは若者達の調理室

岸和田市 土橋房枝

元旦は朝寝朝酒許される

バーゲンになるまで見てるウインドー  
ご馳走をあんなに食べてまだ茶漬け

岸和田市 堤 植代

薬づけ人間様も蟹様も

携帯のベルない暮ししてみたい  
歯切れよい幕切れにして中曽根さん

堺市 萩野象山

トワイライト夜行列車とは迂闊  
北海道着いて雨とは情けない  
振り出しに戻りど忘れ思い出し

堺市 河盛龍三

羽織袴威儀を正して飲み過ぎた  
外国の客は着物でお出迎え  
南無阿弥陀だけで極楽太鼓判

人生の棚卸し脱線ばかり  
一人息子が居て何とか生きて居る  
赤いベレー急がず行こう前向きに

高槻市 執行稲子

びつたりと意気を合わせて初舞台  
年中無休わがまま言わず無人駅  
呆けに効くといきいきワイン溢れそう

高槻市 安田忠子

参観日廊下で私語の親見る子  
一ヶ月孫の守りして元氣でる  
快眠と食欲あつて今が花

高槻市 大崎侑子

不況などどこ吹く風の村祭り  
受皿がなくて顧問に祭り上げ  
乙姫の未練太郎に玉手箱

豊中市 藤井則彦

百葉の長はさすがに効いてくる  
この薬止めたらひよっと治るかも  
今日もまた手帳の余白眺めてる

豊中市 源田啓生

エプロンで包んだ愛はいつまでも  
切り取った窓から政治覗くだけ  
ひとり旅ショルダーバッグに詰めるだけ

参道に世相を綴る鉛細工  
人間のエゴで季節を迷わせる  
秋空に雲の新作展覧会

富田林市 古田千華

東大阪市 今岡真人

雨上がりにしずくの向こう虹の橋  
温もりを心に編み上げ冬を待つ  
フルムーン季節はずれの露天風呂

寝屋川市 中川恵香

枚方市 小川良吉

良いムードになった所である電話  
マニフェスト選挙終ればゴミとなる  
年の瀬も虎の威を借りまたバーゲン

羽曳野市 仲谷真一

藤井寺市 西村栄一

風呂と食スローライフの旅日記  
味噌汁の具にみる四季のうつろいを  
上げ膳に妻は満足フルムーン

羽曳野市 永田章司

藤井寺市 喜島芳江

老母の手がやさしく諭す戸の歪み  
里山で都会訛りをみそぎする  
飼い主に似てきて犬のおて上手

羽曳野市 吉村久仁雄

藤井寺市 伊藤アヤ子

自分史を書きたくなった冬ごもり  
民宿の蟹はでっかい顔をする  
今日も鍋明日も鍋の雪しぐれ

羽曳野市 福田悦子

藤井寺市 若松雅枝

戦いの絶えぬ地球を星がとぶ  
二十年前の手帳で夢を買う  
することがないので秋の窓を拭く

くやしさが時が癒した秋の海  
社民党拉致問題が足枷に  
貧乏も演歌のさびで花になる

失恋と浪人僕の青春で  
ただ歩くだけの役だがむずかしい  
バラはバラ カスミ草にもある自信

着いてすぐ故里なまりついて出る  
茶柱も立たぬ流行のバックの茶  
休日がほしい女の家事仕事

ひと言が過去を許して鍋つつく  
秋茄子を嫁と仲良く食べている  
仲直りうれし涙をかくす湯気

運不運あつて人生面白い  
ジャンケンで決めた運です文句なし  
終章を先に読むから興が冷め

藤井寺市 吉田 喜代子

仕舞風呂洗い終つて除夜の鐘

大阪府 小栢 こずえ

二〇〇四年穏やかな日を唯祈る  
言い分はあろうが武器は捨てなさい

八尾市 鷺見 章

木犀の香りとどける秋の風

大阪府 藤井 郁代

おしほりで今日が始まる車椅子  
朝のパンおいしく食べて有難く

八尾市 田中 トシエ

腕組んで見ても開かぬ知恵袋

神戸市 田中 章子

手のひらの運が逃げ出す隙間風  
底辺のぜいたく今日はお茶漬けだ

八尾市 笹倉 ひろし

みそ汁の匂いと女房そばにいる

神戸市 木村 忠義

河童橋がつちり穂高かかえ込む

馴染客今日も悩みの指紋置き

大阪府 畑中 節子

湯豆腐が浮いて来るのを待つレンゲ

尼崎市 古川 正子

年の差も忘れてはしゃぎゆく平和

顔の皺かくす眼鏡が派手すぎる

大阪府 前田 ゆい

曙にエール送ろう大相撲

夢州の夢ははかなく土地売れず

駄馬百頭いても力は湧いて来ず

尼崎市 桑原 東園

明日あると思う心が生きる糧

うまく振るタクトに付いて行く平和

残照にしぼんだつばみ咲きははじめ

大阪府 藤井 郁代

腹を立て後でちよつぱり恥ずかしく

お正月新たな希望初詣で

辛抱を重ねて夫婦いぶし銀

神戸市 田中 章子

スランプに初心にもどる勇氣いる

敵に塩送る大人に子は成長

少しだけ眼鏡ずらせば見える他人

神戸市 木村 忠義

捨てられぬまだ使えるが先に立ち

腰痛が家族旅行を狂わせる

雰囲気でこんなうまい酒となり

尼崎市 古川 正子

娘より電話の予感よく当たる

銀杏の葉黄色く染まり小雨降る

傘寿過ぎまだまだ独り暮します

尼崎市 桑原 東園

歯が痛む祭ばやしは遠ざかる

意地悪なひと言胸にのしかかる

喜びも寂しさもある喜寿祝う

伊丹市 延寿庵 野鶴

喜怒哀楽顔には出さず世を渡る  
自然体のリズムで生きる古時計  
一期一会生きる縁の摩訶不思議

川西市 井本 清山

断りの電話に嘘を少し入れ  
他人事と思って老化迎え撃つ  
国老いて年金いじめられている

三田市 辻 開子

早朝の電話のベルは不眠症  
ウォーキング落葉踏み踏み歩がのびる  
六十路にて無洗米とは知らず研ぐ

三田市 石原 歳子

JAへ秋の実りを買いに行く  
休刊日眼の休日になっています  
元気かと出会い頭に葱をくれ

西宮市 片山 忠

オレオレの声に騙され哀し過ぎ  
へまをした話いちばん盛り上げる  
スカートのはける権利を放棄する

西脇市 七反田 順子

血統書持っているのは犬と猫  
さばよんだつもりはないが若く言う  
命綱何時も持ってた父が居た

兵庫県 岩本 美緒子

うす藍色溶かす好みの晩秋へ  
喜寿の顔ずらり並んだクラス会  
累代の守り感謝に喜寿過ごす

兵庫県 黒崎 美紗子

実る秋入りきれない冷蔵庫  
耳よりな儲け話に乗り遅れ  
まだ先があるとのんびり年の暮れ

兵庫県 安達 厚

飾つとく本に朝晩にらまれる  
古里の味つれてきたとろろ汁  
兄弟がますます似てくる古希の坂

檀原市 藤永 実千代

明日抜く歯を丁寧に磨きおく  
失いし歯にも自責の念を抱く  
脇締めて事に当たれと亡父の声

奈良県 南海 美知夫

大接近火星ようこそこんにちは  
夏やせかダイエットだかわからぬ娘  
根っからの善人として来た人生

和歌山市 土屋 起世子

たそがれの女心に静電気  
ふわふわの布団で闘志鈍くなる  
初日の出見たく夜行の大晦日

鳥取市 谷岡 清子

ぬけるよな青空心無に戻す  
木犀が地べたに金の莫塵を敷く  
菊作り仏に供え気が晴れる

鳥取市 西尾 敬之介

よいしよされのぼせて絶句主賓席  
この背中どやしてやろういくじなし  
声に出ぬ般若心経燃えてくる

鳥取市 河田 のり代

悲しくもピエロは泣かぬ化粧する  
唄う度狂う調子に未知を見る  
経力に縋り百まで生きれそう

鳥取市 大坪 天涯

結局は夫婦ふたりつきりになり  
ため息が次から次に出るふたり  
やつかいなものだ意地など捨てちまお

倉吉市 前田 喜美子

決心がボストの前でやつとつく  
保険金多額になれば恐い夢  
幾星霜こえて夫婦の顔丸い

倉吉市 酒井 芙美子

世渡りの下手で浮いたり沈んだり  
法の下うまく泳いで甘い汁  
不本意な言葉誤解をまねくもと

米子市 小塩 智加恵

歩く事忘れぬ足が二本ある  
気が合った旅の道連れ亡母に似る  
ばあちゃんが一里四キロ知っている

米子市 池尾 保子

履歴書を出してはみたが職はない  
駄菓子屋で買う子も払う消費税  
老人が増えて健保は目を回す

鳥取県 平木 公子

ああ悲惨ティシュー一緒に洗濯す  
もったいないの心母から娘へ伝え  
十歩先歩き変人に見られる

鳥取県 岩崎 和子

干柿がゆらりゆらりと朝の風  
生きて行く術の薬を呑んでいる  
四季の顔大山仰ぎ街へ出る

鳥取県 西原 真一

一票が日本の未来を左右する  
投票を棄権するのも意志表示  
人間を信じられずに犬を飼う

鳥取県 毎田 信翁

呆けたねと先手を打って笑い声  
女房の天気晴れたり曇ったり  
九条に我慢我慢の日が暮れる

鳥取県 橋谷 静江

一粒の薬に頼ることにする

良い事がある日薄着で頑張れる

健康で生かされている有り難さ

鳥取県 山岡 久枝

童謡を歌う心に花が咲く

雑草も枯れて新年待つばかり

浮き沈みしながら今年暮れてゆく

松江市 山根 邦代

積ん読をくずし夜長の友とする

ふるさとのパワー元気にしてくれる

日向はこゆるみ出してる胸の内

出雲市 榎 ミツエ

母の味忘れられない味噌汁だ

モデル見て若さあふれる笑顔する

年寄の知恵を借りたい時がある

出雲市 川島 和歌子

晴れの日が何より嬉しい冬の旅

柿ひとつ食べて明日の夢を追う

輪を描いて遊び上手な赤とんぼ

安来市 原 煩惱児

嫁の骨抱いて倅が健気なり

招かざる客が老後をせめまくる

追従のうまさ嫁から学ぶもの

鳥根県 菅田 かつ子

卓上の一輪挿しも初春の顔

留守番のインスタントが超美味し

七十のスタートラインへ胸を張り

岡山市 土居 ひでの

海からのなさけ戴くおぼろ昆布

針金の先で突かれている弱音

カナリヤの水取り替えて今日も無事

倉敷市 撰 喜子

子らの声はじけ夕焼け似合う街

百面相ママの素顔を知らない子

輪の中でいつも叛旗をひるがえす

府中市 岩本 雅代

深み行く秋が野山を画布にする

聴く耳を聞こえぬ素振り難を越え

鍋みがく明日の生き様鍊りながら

唐津市 岩崎 實

妻へだけ電話がかかり秋深む

影若くサイクリングのペダル踏む

雨もよい買物先に退院し

東かがわ市 向山 治延

人生の波乱も越えて八十路行く

一生に一度だけ咲く竹の花

梅の花活けてやさしい無人駅

愛媛県 安野 かか志

反骨の拳が少し老いてきた  
思案する胸を覗いた青い月  
終便を静かに送る無人駅

南国市 小原 圭二

道しるべ控え目に立つへんろ道  
コスモスがぼつぼつ消えて冬支度  
最後には拝み倒しになる選挙

高知県 百田 幸

正論を吐いて失礼悔いている  
良い夢の続きをみよう目をつむる  
それなりに生きがいがあり井の蛙

高知県 貞岡 佐紀子

越冬の虫に教わる処世術  
夕焼にみかんが熟れるこの平和  
洪柿は見事変身恋模様

日高市 根岸 方子

美顔術まだ間に合うと信じたい  
許すこと覚え肩こり癒される  
明日こそは勝算信じ床に着く

青森県 福士 トキ

にぎやかに仏間を飾る秋味覚  
十月の蚊には打つ手を引っ込める  
萩枯れて我が身の老いも増す感じ

日立市 加藤 権悟

みの虫の揺れよ孤独が過ぎないか  
だんだんに夫婦に溶けてゆく湯呑み  
ジョーカーを抱いて男の貌になる

横浜市 巖田 かず枝

白無垢の笑顔で送るVサイン  
祝福の長持唄に娘の涙  
良い事がありそな老母の早春譜

横浜市 石原 三郎

笑うなよお子様ランチ熱燗で  
悪筆も心が見える年賀状  
正直に答えて医師に叱られる

横浜市 布山 嘉信

ゲーム機に読書の秋が奪われる  
貸衣裳世話の始めの七五三  
古本市活字離れが嘘のように

横浜市 金森 徳三

耳もとに抜毛が秋の噂する  
本当の事に気付いた置手紙  
子も孫も抱いて曾孫もまだ抱く気

静岡市 中西 雅

物干しに家族のドラマゆれている  
イミテーション笑っているよな小引出し  
迷惑と思いつ友の愛に生き

同人特集

私の一句

ペンライト今日は喜劇のフィナーレ  
 古希の顔これかと鏡のぞきこみ  
 女傘濡れているので拭いてやり  
 裏切らぬ花の命は短くて  
 戦後派の改憲論よふざけるな  
 独身に馴れた干場は賑やかだ  
 一枚ずつ鱗落として群にいる  
 エプロンが歩いてくるよ給食時間  
 有頂天の帽子はすぐに飛ばされる  
 独りでも明日の構図は確と描き  
 一円を大事にしてる貯金箱  
 温もりへ急に心の傘ひらく  
 隠しごとせずドドーンと生きんかな  
 火も風も口説いた指輪外せない  
 祝日に日の丸揚げず式もせず

|     |     |     |     |     |      |     |     |     |     |      |     |    |    |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|----|----|-----|
| 佐倉市 | 出雲市 | 竹原市 | 鳥取市 | 松原市 | 東大阪市 | 大阪府 | 京都府 | 鳥取市 | 尼崎市 | 泉佐野市 | 高槻市 | 堺市 | 堺市 | 豊中市 |
| 岡   | 園   | 森   | 小   | 小   | 森    | 八十  | 稲   | 倉   | 黒   | 山    | 川   | 板  | 河  | 橘   |
| 井   | 山   | 井   | 西   | 池   | 下    | 田   | 葉   | 益   | 川   | 本    | 島   | 尾  | 内  | 高   |
| やす  | 多   | 菁   | 雄   | し   | 愛    | 洞   | 冬   | 一   | 紫   | 蛙    | 諷   | 岳  | 天  | 薫   |
| お   | 賀   | 居   | 々   | げ   | 論    | 庵   | 葉   | 瑤   | 香   | 城    | 児   | 人  | 笑  | 風   |



鬼一つひみつに飼って鏡みる  
曇天に冷夏噂も米不足

余白から風の匂いのする画集  
教え子が自慢の苺抱いてくる

汗をした顔に夕陽が美しい

運勢は努力次第という手相

最後の芸は土下座するよりほかにない  
生きてゆく垢を洗ってくれる酒

青空の広さを知っている雲だ

焼戻し古希が挑んだエベレスト

一石を投げて器量を試される

我慢とみるか悟りとみるか木守り柿

わだかまり解けてあの山青く見え

鬼の顔映らぬように研きます

太陽が笑う私も笑わねば

自己採点だんだん甘くなってくる

大根の太さに土がほめられる

やることが目白押しです老けられぬ

祭り寿司寡黙な父は飲むばかり

出雲市

富田

蘭水

島根県

西村

早苗

和歌山市

木本

朱夏

弘前市

斉藤

朱夏

東かがわ市

木村

あきら

東かがわ市

工藤

吟笑

弘前市

波多野

五楽庵

四條畷市

吉岡

修

竹原市

正畑

半覚

弘前市

櫻庭

順風

大阪市

河井

庸佑

枚方市

海老池

洋

松江市

佐野木

みえ

寝屋川市

平松

かすみ

出雲市

佐藤

治代

出雲市

岸

桂子

広島市

森田

文子

和歌山市

桜井

千秀

豊中市

水野

黒兎

えいやつと跳んだら見えてきた明日  
 男などいちころですと出す涙  
 嬉しいよ誌友がやつと同人に  
 見栄という飾りが前を行きたがり  
 なにもかも平等にして陽が沈む  
 捨て切れぬ物もこの際みな捨てる  
 戦争中俺も洗脳されていた  
 人にとって運とは何か考える  
 大義なき戦に民の血が流れ  
 こんなところにこんな写真がまあ若い  
 ごろ寝して六甲おろしに酔うている  
 字余りな妻に舌足らずの夫  
 四ツ角をいくつ曲ると春がくる  
 遍路笠日々に心を洗われる  
 一期一会の梵鐘に柿実る  
 善人が寄って間延びのした話  
 残り福という楽しみに生かされて  
 鍵穴を抜ける幻想だとしても  
 知らん顔しといてやろかあのことは

|       |     |      |     |     |      |     |     |     |      |      |     |      |     |     |     |     |     |     |
|-------|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 河内長野市 | 奈良市 | 和歌山市 | 広島県 | 松江市 | 羽曳野市 | 大阪市 | 松江市 | 豊中市 | 和歌山市 | 寝屋川市 | 茨木市 | 藤井寺市 | 大阪市 | 青森県 | 大阪市 | 富山市 | 美祢市 | 大阪市 |
| 村上    | 天正  | 宮本   | 藤解  | 津川  | 酒井   | 安達  | 小川  | 田中  | 田中   | 高田   | 藤井  | 高田   | 津守  | 小寺  | 中澤  | 舟渡  | 安平  | 川原  |
| 直樹    | 千梢  | 三喜夫  | 静風  | 紫晃  | 一壺   | はじめ | 注湖  | 正坊  | みね   | 博泉   | 正雄  | 美代子  | 柳伸  | 花峯  | 伽羅  | 杏花  | 弘道  | 章久  |

無茶やめてこころの花を咲かせたい  
 保育器のこぶし無限を抱いている  
 透析を終ると万才したくなる  
 コテージの篝火ロマン呼びさます  
 カメレオンゆつくり戦時色となり  
 赦す気になった言葉に角がない  
 パチンコも煙草もやめた指疼く  
 未どし老母おだやかに屠蘇の順  
 淡々と空のこころを彫っている  
 遠浅の海で育った堺っ子  
 訃報記事先に年齢見てしまう  
 裏切りの風にゆれてる曼珠沙華  
 久し振り肩の凝らない人が来る  
 手を合わす母によく似た野の仏  
 華やかな色はうつさぬ影法師  
 利き酒へ自慢の舌が主張する  
 埋めていた夢が競って咲きそろろう  
 芝居果てや々と私の貌になる  
 逆境に泣いた日宝とも思う

|     |     |     |     |      |     |     |     |       |     |     |     |     |     |      |      |     |      |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|------|
| 弘前市 | 高知県 | 大阪市 | 枚方市 | 和歌山市 | 海南市 | 米子市 | 米子市 | 河内長野市 | 海南市 | 大阪府 | 吹田市 | 大阪市 | 池田市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 出雲市 | 寝屋川市 |
| 岡本  | 赤川  | 伊藤  | 津守  | 青枝   | 三宅  | 白根  | 野坂  | 植村    | 谷口  | 粕山  | 大谷  | 榎本  | 栗田  | 武本   | 吉村   | 石倉  | 森    |
| 花匠  | 菊野  | 藤武  | なぎさ | 鉄治   | 保州  | ふみ  | なみ  | 喜代    | 義男  | 隆盛  | 篤子  | 舞夢  | 久子  | 碧    | さち子  | 芙佐子 | 茜    |



新聞を二紙三時間ニヒリスト  
自分流幸せみつけ一人旅  
さよならと言わずまたねと肩よせる  
掌を返す裏も表もみなわたし  
先き読めぬ戦後を生きた父の汗  
点滴を早めていらち叱られる  
寅さんが「よう」と来そうな無人駅  
み仏の唇お言葉聞けそうで  
菩薩にも羅刹にもなり子の躰  
近すぎて山の気品に気がつかぬ  
俺のクローンきつと俺とは仲たがい  
狭すぎる視野をカラスに笑われる  
出し入れに難儀している貴重品  
偏屈と変ってしまう正義感  
夢掬い無駄も掬って生き上手  
みぞおちに一人私のテロリスト  
美しい空だ笠智衆がいる  
寿命まで生きられるから飲んでいる  
ギャラリーの前で蛙は跳びたがる

|     |     |     |      |       |     |     |     |     |     |     |       |     |     |     |      |     |     |     |
|-----|-----|-----|------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|
| 唐津市 | 神戸市 | 出雲市 | 羽曳野市 | 河内長野市 | 八尾市 | 静岡県 | 大阪府 | 大阪府 | 米子市 | 吹田市 | 東かがわ市 | 大阪市 | 西宮市 | 大阪市 | 富田林市 | 橿原市 | 川西市 | 枚方市 |
| 仁部  | 池田  | 小玉  | 吉川   | 井上    | 内海  | 蘭田  | 町田  | 桑田  | 澤田  | 早川  | 清川    | 松尾  | 坪井  | 津村  | 中井   | 居谷  | 西内  | 寺川  |
| 四郎  | 善守  | 満江  | 寿美   | 喜醉    | 幸生  | 猿沓  | 達子  | ゆきの | 千春  | 棲世  | 玲子    | 柳右子 | 孝一  | 志華子 | アキ   | 真理子 | 朋月  | 弘一  |

成功のうしろにいつも母がいた  
 愛してる退職してから数が増え  
 一流の中で溺れている天狗  
 人はみな旅人過去とあきらめと  
 二幕目はきつと花野の真ん中に  
 こぼれ種助け求めず花となる  
 背信の踏絵も踏んで生きのびる  
 生かされて僕の天国現在地  
 極限に咲く一輪のいのち聞く  
 贅沢は座り心地がいらしい  
 机だけある交番に灯が点り  
 古い靴妻がさっさと捨ててくれ  
 逃げ道にいつでも母がいてくれる  
 老い二人となりの寝息たのもしや  
 花遍路杖が喜ぶ土の道  
 何欲しいと聞かれて元氣所望する  
 ペコペコとするのも生きる芸のうち  
 好きな事するバアちゃんが光ってる  
 夕ごはん終えてアマゾン遡る

|     |     |      |     |      |     |      |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |       |      |
|-----|-----|------|-----|------|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|------|
| 大阪府 | 枚方市 | 八王子市 | 八尾市 | 富田林市 | 倉吉市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 篠山市 | 岡山市 | 京都市 | 交野市 | 芦屋市 | 熊本県 | 尼崎市 | 八尾市 | 吹田市 | 東かがわ市 | 羽曳野市 |
| 米澤  | 二宮  | 播本   | 宮西  | 池森   | 山中  | 西山   | 松尾   | 遠山  | 小林  | 高島  | 森本  | 黒田  | 高野  | 軸丸  | 村上  | 穴吹  | 池内    | 徳山   |
| 俣子  | 山久  | 充子   | 弥生  | 森子   | 康子  | 幸子   | 和香   | 可住  | 妻住  | 啓子  | 弘風  | 能子  | 宵草  | 勝巳  | ミツ子 | 尚士  | かおり   | みつこ  |

自惚れに後押しされてしゃしゃり出る  
 火も水もだんだん怖くなるいのち  
 ストレスがはじけそうだよ休肝日  
 インパクト脳に与える本を読む  
 二十歳から十飛びで来た八十路坂  
 花の芯つめたいものを抱いている  
 追われ追われて煙草税という包囲網  
 オルゴール開けると転げ出る運命  
 ころ待ちしているあのひとの賀状  
 大往生の煙まっすぐ深い秋  
 石仏に似た顔となり旅終える  
 大吉を引いて油断をしてしまい  
 法律が地団駄を踏む十二歳  
 タイムリミットまだ未使用の明日がある  
 水中花コップの中で嘘をつく  
 明日ありと自叙伝を書く古稀の年  
 さくらんぼ声も明るい宅急便  
 ふり返る山坂よくぞ八十路  
 五風十雨 雨はざんげをするために

|    |     |     |     |     |     |     |     |    |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 堺市 | 大阪市 | 姫路市 | 交野市 | 吹田市 | 出雲市 | 鳥取県 | 高知市 | 堺市 | 竹原市 | 京都市 | 高石市 | 奈良市 | 出雲市 | 豊中市 | 大阪府 | 鳥取市 | 大阪市 | 羽曳野市 |
| 志田 | 本間  | 古川  | 山川  | 太田  | 伊藤  | 谷口  | 川竹  | 柿花 | 古谷  | 都倉  | 浅野  | 米田  | 城門  | 山門  | 澤田  | 西村  | 川端  | 安芸田  |
| 千代 | 満津子 | 奮水  | 日出子 | 昭子  | 玲子  | 次男  | 松風  | 和夫 | 節夫  | 求芽  | 房子  | 恭昌  | 多喜  | タミ  | 和重  | 黙光  | 一歩  | 泰子   |

ああそうか今日から私八十歳  
 命みな明日のために地に還す  
 体調が悪くて嘘が弾まない  
 筈も私の恋も今が旬  
 いい知らせ私の中で鶴が舞う  
 その時は寢床にもぐる手もあろう  
 笑ったら損しますのか女店員  
 野ばら一輪飾りわたしの誕生日  
 砂嵐いくつ消したか愛と憎  
 手のひらのみかんころお正月  
 歩けるという幸せに今気付く  
 痴漢して先生首がおちました  
 万病に効きます愛というくすり  
 妥協して三面鏡をそっと閉ず  
 笑うこと大盛りにして老い二人  
 不況ほど輝く腕の妻である  
 隙みせてしまったアンパンがうまい  
 若者がテンポ合わせてくれている  
 雑草の或る日大輪夢に見る

|     |     |      |    |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|------|----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 箕面市 | 奈良県 | 富田林市 | 堺市 | 米子市 | 寝屋川市 | 大阪市 | 出雲市 | 堺市  | 出雲市 | 八尾市 | 大阪市 | 鳥取市 | 鳥取市 | 唐津市 | 唐津市 | 西宮市 | 米子市 | 和泉市 |
| 岩津  | 渡辺  | 片岡   | 山本 | 光井  | 江口   | 板東  | 小白金 | 西村  | 吉岡  | 生嶋  | 清水  | 岸本  | 岸本  | 久保  | 井上  | 緒方  | 木村  | 西岡  |
| ようじ | 富子  | 智恵子  | 半銭 | 玲子  | 度    | 倫子  | 房子  | りつえ | きみえ | ますみ | 利武  | 宏章  | 孝子  | 正剣  | 勝視  | 美津子 | 春枝  | 洛醉  |



平成の文化に老母のスイッチオン  
 後もどりできぬ人生今が華  
 風紋よ砂も絆をもっている  
 以心伝心おなじときめき追う二人  
 人恋しついオレオレにのる老後  
 虫けらは虫けらなりの椅子がある  
 家事解放さあて何から遊ぼうか  
 蝶になる夢を見ている春鏡  
 桜咲く頃に逢おうと言う便り  
 ゆっくりと偲べば恩人ばかりなり  
 人の話しっかり聞けと耳二つ  
 佳き人の雪礫なら打たれたし  
 歳とるもよし漱石を読み返す  
 父と娘の溝へメールが橋渡す  
 やがて来る春に萌えよと種を蒔く  
 乳飲み子の匂いはほんにやわらかい  
 嫌ってた国の訛に癒される  
 桜島西郷どんで済む国自慢  
 若返る努力続ける妻の頬

|     |     |       |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |      |     |       |     |     |     |
|-----|-----|-------|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|
| 八尾市 | 吹田市 | 河内長野市 | 和歌山市 | 兵庫県 | 鳥取市 | 寝屋川市 | 弘前市 | 大阪市 | 熊本県 | 鳥取県 | 高知市 | 鳥取県 | 藤井寺市 | 唐津市 | 大和郡山市 | 米子市 | 大阪市 | 大阪市 |
| 神原  | 野下  | 山岡    | 楠見   | 大谷  | 有沢  | 堀江   | 今   | 前   | 岩切  | 土橋  | 小川  | 田村  | 楠    | 宗   | 坊     | 中   | 榎本  | 清水  |
| まさ  | 之男  | 富美子   | 章子   | 幸次郎 | せつ子 | 光子   | 愁女  | たもつ | 康子  | 睦子  | てるみ | きみ子 | 昭子   | 水笑  | 柳弘    | ゆき  | 日の出 | 絹子  |



道連れは蟬に蜻蛉に昼の月  
 秘密などない顔をして差向い  
 老いひとり三時は三時腹の虫  
 月並みの暮らしに飽きて旅に出る  
 癒されて愛の歯車まわり出す  
 温かい人に私も付いて行く  
 降って湧くピンチ転がり込むチャンス  
 遙かなる嶺を見上げてまず一步  
 あなた好きけれどヴィトンはもっと好き  
 耳搔きを持ってあなたを追いかける  
 少年を嫌でたまらぬカブトムシ  
 生きのびた命ゆっくり水をのむ  
 湖の深さを知らぬまま泳ぐ  
 病む母にお粥炊いてる太い指  
 身の丈の倅せでよし福寿草  
 辿り来て暫し忘我の花の下  
 話題には遠くひとりの城守る  
 男の自信吞めば膨らみ覚めて消え  
 み仏のおこころならば受けましよう

|           |           |           |            |            |          |          |           |             |            |           |           |           |           |             |          |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|------------|------------|----------|----------|-----------|-------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 東大阪<br>指宿 | 東大阪<br>谷口 | 伊丹市<br>山崎 | 寝屋川市<br>山本 | 和歌山市<br>松原 | 堺市<br>齋藤 | 堺市<br>村上 | 弘前市<br>福士 | 河内長野市<br>水谷 | 藤井寺市<br>鴨谷 | 黒石市<br>相馬 | 大阪市<br>渡部 | 米子市<br>木村 | 大阪市<br>奥村 | 東かがわ市<br>川崎 | 鳥取県<br>林 | 岡山県<br>山本 | 大阪市<br>鶴田 | 鳥取県<br>岩崎 |
| 千枝子       | 義         | 君子        | 三郎         | 寿子         | さくら      | 玄也       | 慕情        | 正子          | 瑠美子        | 一花        | さと美       | 富美子       | 五月        | ひかり         | 露杖       | 玉恵        | 遠野        | みさ江       |



切り株に繋ごう逃げやすいように  
 燃えながら紅ほうずきは淋しがり  
 顔の皺ほどよくふえて姑の座に  
 大喧嘩もう仲良しの縄電車  
 川柳を友に傘寿の夢を持つ  
 涙まで流した無念もう忘れ  
 振り出しに戻れる碧い海がある  
 女房に袖を引かれて義理を欠き  
 柵越えてまた柵がある生きるって  
 メンバーは十人十色みな光る  
 追われることも追うこともなし師走風  
 どこへどう行く矢印のない旅路  
 一芸を得て人生の味を知る  
 昭和の皺を平成の風が掘る  
 春を待つ花と小犬のカレンダー  
 思うことずけずけ言える友が居る  
 魯山人の皿おおらかにいのち盛る  
 一呼吸おいた返事に策がある  
 男達よ少し孔雀を見習おう

|     |      |    |      |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |     |     |     |
|-----|------|----|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|
| 米子市 | 和歌山市 | 堺市 | 寝屋川市 | 鳥取市 | 岸和田市 | 生駒市 | 唐津市 | 尼崎市 | 鳥取県 | 八尾市 | 八尾市 | 松江市 | 尼崎市 | 尼崎市 | 和歌山市 | 大阪市 | 横濱市 | 守口市 |
| 八木  | 福井   | 河内 | 北田   | 小林  | 長谷川  | 飛永  | 樋口  | 長浜  | 西原  | 吉村  | 長谷川 | 三島  | 春城  | 春城  | 堀端   | 西出  | 菊地  | 石森  |
| 千代  | 桂香   | 月子 | 一笑   | 由多香 | 呂万   | ふりこ | 輝夫  | 美籠  | 艶子  | 一風  | 春蘭  | 浜丘  | 武庫坊 | 年代  | 三男   | 楓楽  | 政勝  | 利昭  |



一日へ心をただす顔洗う  
めでたさや七めぐり会う回り歳  
日本の憲法九条不滅です  
真っすぐに歩いていると思うてた  
もの豊かこころ満つにはほど遠い  
賑やかに送り出されて淋しかり  
ぬか床の底に隠したラブソング  
だんだんと拝む姿勢になる介護  
自分史に笑いのページふやしてる  
ぼくアトム本当はもう休みたい  
卵割るとても幸福感をもつ  
よろこびの情報だった囲まれる  
宿命と言えど意を突く杖をつく  
巳の年の港に八度目の巳年  
息継ぎの下手なわたしの祭笛  
わたくしの背なに母校の芯がある  
散文にして性分を悟らせぬ  
自分史に焼いたページの痕がある  
レモネードわが老春は急ぎ足

|     |     |      |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|------|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 香芝市 | 大阪市 | 羽曳野市 | 岸和田市 | 西宮市 | 西宮市 | 藤井寺市 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 大阪市 |
| 大   | 西   | 塩    | 岩    | 山   | 西   | 太    | 上   | 岩   | 吉   | 中   | 中   | 中   | 中   | 中   | 乾   | 上   | 德   | 森   | 奥   |
| 内   | 田   | 満    | 佐    | 本   | 口   | 田    | 田   | 崎   | 田   | 原   | 原   | 原   | 原   | 原   | 原   | 田   | 田   | 山   | 谷   |
| 朝   | 柳   | 敏    | ダン   | 義   | い   | 扶    | 俊   | 公   | 孔   | 汲   | み   | 諷   | 喜   | 宣   | 宣   | 宣   | 宣   | 盛   | 彩   |
| 子   | 宏   | 子    | 吉    | 子   | わ   | 美    | 路   | 誠   | 美   | 香   | 子   | 人   | 与   | 子   | 子   | 子   | 子   | 桜   | 子   |
| 子   | 子   | 子    | 子    | 子   | 子   | 子    | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   | 子   |

# 林生路郎物語

(25)

— 川維戦後復刊号 —

東 野 大 八

日本敗れたり—モロアの「フランス敗れた」はまだロマンが漂っていたが、日本の敗戦の現実はまだに非情な現実そのものであった。怨みは深し昭和二十年夏八月。

瓦礫の山の廢趾の底で、だれもかれもボロ軍服に戦斗帽で、女はよれよれのもんべをはき、薄汚いワンピース姿はパンパンたちで、ねだつた洋モクをふかす姿も哀れだった。

ゆらぐ幣原内閣は退陣し、後継内閣が決らぬ中で、東京では五十万を数える参加者によつて「食糧メーデー」が、赤ハタと革命歌の怒濤で描き出した。進駐軍の後盾でようやく出現した吉田内閣は、やつとの思いで、戦争放棄主権在民の憲法改正案を通過させた。時に十一月三日。公職追放の嵐の中である。

翌二十二年、吉田首相の「不逞の輩」から二・一ゼネスト不発の末、四月総選挙で社会

党内閣が出現し、極東裁判は大詰にさしかかっていた。

終戦翌年五月の「米よこせ」デモは、アカハタが皇居になだれ込み、「汝臣民飢えて死ね」のプラカード事件をひき起した。しかし当時の天皇は国民と同じ耐乏生活を続けておられ、御飯は七分搗きの米七に麦三の割でそれに代用食もあわせ食していられた。お菜も里イモと大根の煮付けが主であった由。

この頃の両陛下下の食事は大体一日千五百から六百カロリーで、一日の御生活費は六十五円五十銭から七十五円見当といわれていた。国民も衣食住に困っていたが、農村ではヤミ成金が続出し、食糧をヤミに流し百円札が高さ一尺たまる毎に「尺祝い」をやらかし、フスマに百円札を貼るはかげた振舞いをやる農家もいて、巷にはヤミ成金が横行した。

—これやこの行くも帰るも米をさげ 水車

—腹に巻く米は冷いものと知り 弓削平

—猫今日もお粥のしづくだけ貰い 葭 乃

—我々が今食う米へ閣議也 路 郎

「共産党が無闇にばつこして、当時の国民感情に反し、天皇と皇后をヒロヒト及びその妻と「アカハタ」に書いていたとき

—古くとも僕には仁義礼智信

と僕は詠んだが、この句は作ろうとして作った句ではないから生命があるが、新聞社から頼まれて、どんな句を詠もうかと思つて詠んだ句はそうはいかぬ。」(「川柳雑誌」No 322・昭和29・3時事吟について)

路郎はこうした敗戦直後のこと衆議院議員選挙に打つて出た。「かつて私は、二合五勺問題のため、代議士に立候補したこともある。私は物に熱を持つたちなのである。」(「川柳雑誌」旅人出版記念講演より)

—人類は悲しからずや左派と右派 路 郎  
「この句は社会党の一本化を詠んだものではない。『古くとも』にしてもこの句でも、僕の思想が句になった訳で、時事を詠むつもりで詠んだのではない。」

—殴り合いもせずに歳費は値上げされ  
引揚げや復員してきた女に二人の夫があつた悲劇を知つて

—二歩ですと将棋のように片づかず  
と僕は詠んだ。なるほど世相を巧くつかんで

いるというのが時事吟のしんしょうだろう。

—待ったなしの歩に刺されたる犬養毅も僕の句だが、これも当時の時事吟で、これを今作るとすれば詠史川柳という訳だね。

釈瓢斎氏は本人は俳句だといっていたが、一般の俳人から云つたら大したものでないと言われている。彼が雑誌を出すというので相談を受けたが「下手よ集れ」と云う旗の下に集つた人も相当あった。彼はこんなキャッチフレーズがうまかった。天声人語（朝日新聞）の欄全部を『川柳雑誌』の川柳で埋めたこともあった。川柳もかくの如く変つたという意味だね。新聞に時事吟を詠もうとすれば少くとも五、六種の新聞を読まねばならず、仲々大変だ。時事吟の選をするのは、普通の選より至難だ」（同上）

麻生路郎句集「旅人」出版記念会（昭和29・2）での講演で、戦時中の句集出版のことに就いて触れている。路郎の句集作製に対する意欲の一端が覗れるので抄録しておく。

「私の川柳生活四十年の折に、不朽洞会から句集を出してやろうといわれ、私もその時出す気になったが、出すならば変つたものを出したいと思った。

ちょうど十年前のことであるから、戦争の最中で、然も日本の状態の怪しげな時であった。それでも出してやろうといわれ、緑雨君が信州の松本まで行って紙の見本を持って帰

つてくれたが、気に入ったのがなく、私の手で群馬県から帝室博物館に納めていると云う一枚すきの和紙を手に入れ、それを大阪へ送つてこさせて、丹路君の勤務先の山本銅業倉庫へ保管してもらっていた。型はB列5号で絹糸で和綴じにしたいと考えていた。しかし絹糸も手に入らない時であったが、これも戦死した銃人君の手で集めていただいた。表紙裏の色仙歌も気に入ったのが手に入り、最後に紋表紙が大阪になかったのが京都へ捜しに行こうと思つた矢先に、山本銅業が戦火に遭い、全部が灰塵に帰した。いろいろ世話して下さつた方には申し訳ないが、私としてはホツとした気持であつた。」

物資窮乏の戦時中といえども、プロ川柳家の自負襟持にかけて、それにふさわしいわが身の句集に懸命に打ち込む路郎、いかにも彼らしい性格がうき彫りにされている。

こうした敗戦直後の瓦礫と飢餓線上の中で路郎はやがて再び川柳の業火に身をやく再出発を開始した。そのかみの筆号不死鳥を地दैいく柳魂という人もいた。

川柳雑誌の戦後復刊号は、昭和二十一年八月一日発行で「第一巻第一号・創刊大正十三年・通巻三百四十号」を肩につけ「麻生路郎主宰を大きく肩に揚げ「川柳雑誌・八月号」とあり、菊倍判八ページ。新聞用紙のザラ紙

でびつしりと誌面を埋めた活字は、全頁すべてを路郎が書いている。

題字横の「再刊の辞」はつぎの通り。

—飢餓線上に立つも我等に川柳あり—

昭和十八年十二月号（通巻三九）で、一先づ終止符を打つた「川柳雑誌」が新日本の文化建設を目指して再登場するなどは私自身考えてもいなかったことである。

もうこの齢で雑誌の編集でもあるまいと思つていたので、これから余生を象牙の塔に立てこもつて、研究に専念するつもりでいたが終戦後、日が経つにつれて川柳不朽洞会員はいうまでもなく、柳友諸君からは非再刊して欲しいという切なる望みを聴かされては、そうそうむげにしりぞけかねて、驚馬に鞭打つて隘路の多い出版事業に再び携へることにした。一ト度再刊と決意した以上、どんな難関にぶつかろうと、へこたれるようなことはしないつもりだ。しかし非営利的な仕事だけに、現実の厳しさはなかなか容易ではない。

平和を冀求され国民の飢餓を深憂される天皇の下に、進駐軍の朗らかな歌謡曲のラジオを聴きながら「川柳雑誌」再刊の辞の筆を執つた。

『川柳雑誌』の生みの親は私であるが、育ての親は一つに諸君の手でなければならぬ。頼むぞ諸君！（路）

そしてこのあと「不朽洞句抄」麻生路郎の

タイトルの下に、七十九句の作品を発表している。路郎にとって、川柳雑誌にとつても、空前絶後の量産的作品群といえる。いかに路郎が、川柳復刊に気負い立っていたかがわかる。まさにうつつ積された川柳熱の爆発ともいうべきか。堂々七十九句のうちから主なるものを参考までに掲げておこう。

—この炭も僕が焼いたとまでなされ

路郎

—請売りの多い天皇制を聴き

〃

—供出を知らず蝗が飛びちがう

〃

—インフレに割り切れぬこと日に多し

〃

—丹前だ餅だ故郷はよいところ

〃

—逐鹿陣営より

〃

—志士として花の散るのも知らぬなり

〃

—新円で陣中見舞届けられ

〃

—落選へはや葉桜の候となり

〃

—これは路郎の衆議院立候補の体験句と思われ。この前の方に

〃

—捨て石の一つたらんか立候補

〃

の句がみえるが、この一句は印象に残る。復刊第一号の編集後記「いろいろ」にこうある。

「昭和十八年十二月号限りで終刊とした本誌も、社はそのまま存置し、句会は空襲下でも続けてきた。いかに集りが悪くなっても、川柳の火を絶やさぬため最後まで頑張った。

殊に内容の低下せぬよう指導には全力を傾倒した。そしてわが社では御用川柳や、モットーのような川柳は作らぬように絶えず厳戒した甲斐あって、ウワタイムにもかなり優れた句を残すことができた。そのためには特高課へ呼び出されて小言を頂戴したり、一旦発送した雑誌を返還して貰ったり、難行苦行をさせられたものだ。

それに大阪文化協会の世話役から、衆議院議員の立候補、各学会の指導、市立高女での川柳講演、川柳サービスの開設等々、私自身眼の回る忙しさだった」

そしてそのあと、正味一頁にわたり川柳人の戦後消息欄がびっしりと書かれている。まさに戦争と川柳人とも呼ぶべき一篇の人間ドラマがそこに描き出された形である。主なるものを抜き書しておこう。

▼小川静観堂氏南方から復員されない。消息杜絶▼長崎柳秀博士夫妻は、昨年六月御影の自宅の壕で戦死された。(中略)「金魚屋に舞妓袂を教えられ」の一軸が記念として私の手許に残っている。

▼加川泉泡氏は今津の戦禍で焼夷弾のため傷つき四日目に亡くなれたとの事▼水谷鮎美氏は勤務先の阪神電鉄が戦災▼出口夢詩朗氏は二十三年の在外生活で築いた七千六百万円をすっかり置いて小倉へ引揚げていられる▼岩崎柳路氏も巨財を打ち捨て張家口から北

京へ出られたそうであるが、終戦後同氏に出した通信が九カ月ぶりに舞戻った。

▼中島生々庵博士は大阪の診療所を戦災で失われ、堺市浜寺諏訪森町の自宅に診療所を移された▼西田岬楽氏は、大阪府の嘱託で食野草の指導に当られることになった▼井村寒浪氏は戦災で家を失い、痛しくも母堂を亡くされ引続き父君、令閨を病魔にさらわれ、氏は入院中である。

▼石曾根民郎氏は松本の旧居へ戻って印刷所再開「川柳しなの」を再刊された▼前田五健氏は自宅戦災、蛭子直三氏朝鮮光州から山口県へ引揚げ▼岸本水府氏は目下京都で出版屋をはじめと忙しそうだ。

終戦直後の出版事業は、印刷工場施設はなれなくなったが、問題は紙でこれの入手こそは難事の中の難事だった。占領軍用は別格として第一は新聞用、第二が教科書用で、新聞とて地方紙はタヴロイド判「二頁の有様。いわゆる割当用紙時代で「マル炭」「マル木」という名の裏取引が横行したものだ。川柳がこの用紙地獄の二十一年夏に刊行されたのは、大阪朝日ビル三階の進駐軍物刊行検閲室に、路郎門下のハワイの前山北海、古川魔花麗の二人がいたことだ。この幹旋でいわば川柳復刊号はいち早く陽の目をみたのである。川柳も稀特集で路郎は望外の僥倖だったと、この事に悦びの回想を書いている

# 誹風柳多留二四篇研究 62

大野 秀二・橋本 秀信

小栗 清吾・粕谷 長生

山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

480 定紋であたりをかこふ能い花見

大野 定紋は、家々でままつている紋。それぞれの家で用いる紋。また、その人がままつている紋。

花見でも庶民の花見ではなく、御殿女中か、または大名家の奥方の花見などか。よく咲いたところに幕を打って囲いを作り、琴を弾いたり、弁当を食べたりして花見を楽しむというのである。

いつちよく咲た所へ幕を打

定紋か風にべたつくい、花見 天二満一

清・佐藤 賛。

481 江戸へ出てゑぼしをしばかりにきる

大野 三河万歳は三河の国から年末に江戸に出て来て、正月に才藏と一緒にお得意先を回り新年の祝詞を述べてまわる。万歳は正月だけであるので一時的に風折烏帽子を身につけることになる。

万さいの歸り布子にかけゑぼし 九七  
ゑぼし大紋でさんまを二ツ買い 二四三

清・佐藤 賛。

482 三度笠あれだくとゆりをこし

大野 三度笠は、「三度飛脚」がかぶる笠の意。菅笠の一種。ごく浅く作つた笠で、遠くから見ると一文字に見えるもの。飛脚、旅商人などが多く用いた。

旅向いの句か。はるか遠方から三度笠を被

つて帰って来るのが見えた。あの格好の三度笠がお待ちかねの御人だとわかつて、待ちくたびれて眠っていた者を揺り起こした。こういう状況と解したが……。または自宅に帰ってきたところか。

知る人のあこを見付ける三度笠 三九一四

旅むかい子と取りかえる三度笠 三三三八

小栗 賛。品川に沈没している旅迎いとは考えられぬか。

橋本 礎+小栗説賛。

清 「ゆりおこし」の措辞に品川での旅迎いを感じる。

佐藤 同右。

483 けいせいもあたりはつれの秋が有

大野 登楼する場合は張見世で充分に見比べて、氣にいった遊女を揚げるわけであるが、外見だけでは性格や氣質などがわからず、揚げてから氣にいらぬことなどや、また売り残りしかない場合しぶしぶ揚げた遊女の氣立てがよかつたりして傾城もあたりはずれがあるという句。秋は收穫時期であり、農作物などに当たり年と外れ年があるように傾城にもあたりはずれがある。

娘の顔見せもあたりはづれ也 二四二一



橋本 賛。「秋」は「とき」と読む訓もある。

山田 同。秋は「とき」でしよう。

伊吹 賛。「豊凶を定める重要な時であるから、『危急存亡の秋（とき）』のように用いる。」（字通）

清・佐藤 賛。

484 爪音ハかんじばち音つかされる

大野 琴の音は上品に感じるが、三味線の陽気な音では心が浮かれるような気分になるというのであろう。三味線は吉原のすがきや芝居の舞台音楽など心を浮かされることに関係が深い。

古川柳では琴は奥様、三味線はお妾というパターンがあるが、本句もすこしは、それぞれの性格などが関係しているであろう。

爪音やさしく撥音いかつ也 芭三三  
はち音トかだん／＼きえて四ツを打

明八梅3

橋本 賛。感応する。「琴線にふれる」という成語も生まれた。

清・佐藤 同。

485 後家の内男の声で鰻をよび

大野 類句などからみて女性がふぐを食うのは一般的ではなかったように思われる。

後家になったのだから誰にはばかることなく好きな物は食うことにして、ふぐを呼ぶが、世間体もあり、男のような低い声で呼ぶのか。または本当に男がいてふぐを呼ぶのか。するとこの男は後家の情人であらう。

ふぐを喰ふ女房なんぞのなくれなり

明三松2

鰻も喰いますと花嫁しやれたもの 七三

小栗 女の声で呼ぶのものはばかられるが、後家で男がいないので、誰かに呼んでもらうということか。

橋本 小栗説もつともなれど、何故そうなるのか必然性を感じられないというか判らない。むしろ礎の情人であらう。

清 男が居ない筈の後家の家から男の声、というのが句の面白味であらう。情人でよいのではないか。

佐藤 同右。

486 ころび出し糸やハ古いかけもとり

大野 白芸者の内は三味線を弾くだけであつたので、細く切れやすい三の糸をたくさん切り、糸代もたまっていたのであろう。踊り子

が転びだし金も稼ぐようになったので、糸屋は古い掛け（糸の代金）も取るようになった。金はあるところから取る。踊り子の転び代は二分が相場となっていた。

三の糸むしやうに切れるしらげいしや

天五信3

ころんだ子忒分とらぬ内おきぬなり

安六礼2

橋本 賛。取れる（回収できる）ようになつた。

清・佐藤 賛。

487 呉服ものつりをしながら売もあり

大野 魚釣りをしながら釣り仲間といろいろな雑談をしているうちに、商売の話になり、呉服物を売るようになったということであらうか。

本句についてはよくわかりません。

小栗 尾張町あびす屋の句。店先に大きなあびす様の絵が掲げてあるので、「釣をしなから」と表現したもの。

店先きてつれをして居尾張丁 安八宮2

清 あびす屋の絵は割合に多いから、見られると宜しい。一目瞭然である。

佐藤 同。

# 苗香のむ

藤田 泰子選

いつか跳ぶ切符一枚持つている  
私から何か剥ぎとるカレンダー  
お日様は力ずくでは咲かせない  
独りがいい今日は淋しい方がいい  
水を下さい私の湖が枯れていく  
まだ恋を書き足りなくてボールペン  
逆光の夕日あなたを見失う  
この縄をとけば奈落へ墮ちるだら  
捨てに行く海で笑われそうになる  
幸せ買いに百円村に行ってみる  
六法全書 聖書の厚さ比べてる  
人権擁護モザイクの向う側  
来し方へ消すに消せない恋がある  
未完の絵あとひと筆が重すぎる  
二人居て一人居るより寂しい日  
さみしさをまぎらすアメをなめている  
もう指紋うすれページが繰りにくい  
振り出しに戻ればいいさ七転び  
監督はにこにこしない勝ち戦

|      |       |      |       |      |       |     |       |     |       |     |       |      |       |     |       |       |       |      |       |     |       |     |       |     |       |     |       |
|------|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|
| 藤井寺市 | 太田扶美代 | 羽曳野市 | 徳山みつこ | 藤井寺市 | 鴨谷瑠美子 | 西宮市 | 牧瀬富喜子 | 鳥取県 | 佐伯 やえ | 米子市 | 池尾 保子 | 和歌山市 | 福井 桂香 | 西宮市 | 西口いわゑ | 大和高田市 | 鍛原 千里 | 寝屋川市 | 森 茜   | 米子市 | 青戸 田鶴 | 堺市  | 矢倉 五月 | 愛媛県 | 花岡 順子 | 豊中市 | 安達寿美子 |
| 熊本市  | 永田 俊子 | 松江市  | 川本 畔  | 和歌山市 | 武本 碧  | 西宮市 | 安土 理恵 | 西宮市 | 黒田 能子 | 西宮市 | 安土 理恵 | 西宮市  | 黒田 能子 | 西宮市 | 安土 理恵 | 西宮市   | 黒田 能子 | 西宮市  | 安土 理恵 | 西宮市 | 黒田 能子 | 西宮市 | 安土 理恵 | 西宮市 | 黒田 能子 | 西宮市 | 安土 理恵 |

ばあちゃんにリボンを付けて描いてくれ  
不況風 財布は風邪をひきやすい  
真つ白なハンカチで泣くお葬式  
繰り言を聞き流してるシクラメン  
犬の目をした人間が多すぎる  
人生でちよろくないんだよね空よ  
何時も主役一人芝居を繰り返す  
とてもきれいに騙し続けている鏡  
見たくない時も鏡を見てしまっ  
新しい私を探す服売場  
絵空事だった一つと差向い  
ありのままに日記書くのも勇氣なり  
ヒロインの気分ですとり見る夜景  
たった二人の足並が揃わない  
嘘少し交ぜもう一度リハール  
淋しさは枯れ葉の落ちる音にある  
打ち明けた友にシナリオ変えられる  
上澄みを捨てて美談がよみがえる  
ネジ巻いて巻いて私を取り戻す  
しあわせをこぼさぬようにまるく受け  
寿の酒をほとけと差向い  
年金は仏に見せてから遣う  
誰もいないところでそつと吠えてみる  
臆病でまだ怪我をしたことがない  
足跡を辿れば星に近くなり

|      |       |      |       |      |       |     |       |       |       |     |       |     |       |      |       |     |       |     |       |     |       |      |      |    |       |     |       |
|------|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|------|----|-------|-----|-------|
| 寝屋川市 | 平松かすみ | 富田林市 | 池 森子  | 和歌山市 | 西山 幸  | 大坂市 | 津村志華子 | 河内長野市 | 植村 喜代 | 大坂市 | 川久保睦子 | 東京都 | やまら珠美 | 和歌山市 | 吉村さち子 | 米子市 | 白根 ふみ | 八尾市 | 高杉 千歩 | 東京都 | 岸野あやめ | 藤井寺市 | 楠 昭子 | 堺市 | 志田 千代 | 大阪府 | 本間満津子 |
| 鳥取県  | 西原 艶子 | 奈良市  | 清原 悦子 | 和歌山市 | 高田美代子 | 大坂市 | 播本 充子 | 和歌山市  | 森下 順子 | 大坂市 | 川久保睦子 | 東京都 | やまら珠美 | 和歌山市 | 吉村さち子 | 米子市 | 白根 ふみ | 八尾市 | 高杉 千歩 | 東京都 | 岸野あやめ | 藤井寺市 | 楠 昭子 | 堺市 | 志田 千代 | 大阪府 | 本間満津子 |

たつぷりと酸素を吸って峠越す  
切り札を持つてはいるが使えない  
噛み合って歯車すでに敍しあう  
よそ様は仲良さそうな共白髪  
滑らかに嘘を吐く日の紙人形  
昨日と同じドラマ演じて元氣なり  
恋文では無いがときめくものがある  
これも定め陽かげで咲いたこぼれ花  
軽いうそスバイスにして倦怠期  
挙式から出産祝やつぎばや  
意地張って勝てば勝ったで痛む胸  
陽が落ちる模索の道の地図を買う  
冷蔵庫には妻の存在感がある  
かしこいな猫のひたいを撫でている  
ある時に親を越したとふと思つ  
荔枝の実に昔の夢は甘くあり  
遠い絵に残るわたしの七五三  
小気味良い言葉で敵が責めてくる  
ただでさえ回らぬ首を寝違える  
負けたなと思つ笑顔をかえされる  
転んだら一緒に転んでくれる友  
心配をされてる方が大欠伸  
問答無用笑つてすますお正月  
ハイハイと言えば楽です笑えます  
夫より固い絆や友の情

|      |       |    |
|------|-------|----|
| 熊本県  | 岩切    | 康子 |
| 寝屋川市 | 籠島    | 恵子 |
| 和歌山市 | 松原    | 寿子 |
| 東大阪市 | 北村    | 賢子 |
| 富田林市 | 中井    | アキ |
| 富田林市 | 片岡智恵子 |    |
| 高知市  | 小川てるみ |    |
| 倉吉市  | 野口    | 節子 |
| 東大阪市 | 小川賀世子 |    |
| 大阪市  | 津守    | 柳伸 |
| 和歌山市 | 上地登美代 |    |
| 弘前市  | 一戸    | ツネ |
| 吹田市  | 山本希久子 |    |
| 八尾市  | 井尻    | 民  |
| 神戸市  | 山田婦美子 |    |
| 尼崎市  | 春城    | 年代 |
| 愛媛県  | 黒田    | 茂代 |
| 箕面市  | 出口セツ子 |    |
| 大阪府  | 米澤    | 偲子 |
| 吹田市  | 大谷    | 篤子 |
| 羽曳野市 | 吉川    | 寿美 |
| 大阪市  | 大川    | 桃花 |
| 堺市   | 西村りつえ |    |
| 鳥取県  | 田村きみ子 |    |
| 海南市  | 堂上    | 泰女 |

鴉鳴かぬ日にも夫に酒がある  
親だからずつと何かを肩に載せ  
危なげで影は主から離れない  
私を巴里に誘ってくる画集  
時刻表と地図で旅行をしたつもり  
転ばずに大地と語り歩きたい  
アドリブで行く人生の長い旅  
拗ねながらケーキ丸ごと平らげる  
よく食べてよく寝て老人らしくない  
独身貴族介護保険を払つてる  
夕闇が迫る 決断下すとき  
百貨店ほんに祭りが好きらしい  
言い負けた続きにワイン足している  
愛も恋も酔い過ぎぬようなさいます  
フルムーンバスのツアーは静かすぎ  
娘の悩みの温みで溶けてゆく

|       |       |
|-------|-------|
| 八尾市   | 宮崎シマ子 |
| 鳥取県   | 西川    |
| 鳥取市   | 和子    |
| 和歌山市  | 永原    |
| 倉敷市   | 昌鼓    |
| 和歌山市  | 古久保和子 |
| 米子市   | 撰     |
| 岡山県   | 喜子    |
| 山本    | 千春    |
| 堀江    | 玉恵    |
| 大阪府   | 板東    |
| 和歌山市  | 倫子    |
| 三田市   | 福本    |
| 西宮市   | 英子    |
| 鳥取市   | 久保田千代 |
| 和歌山市  | 緒方美津子 |
| 徳田ひろこ |       |
| 和歌山市  | 桜井    |
| 東大阪市  | 千秀    |
| 豊中市   | 笠井    |
| 榎谷    | 欣子    |
| 郁子    |       |

扶美代さんの句―チャンスがあればと持つている一枚の夢、  
新しい年に対する意気、前向きな姿勢が素敵です。俊子さんの  
句―あつという間に一年が過ぎ誕生日を迎え、自分は少しも変  
わっていないつもりなのに去年とは何かが違う、「剥ぎとる」とい  
う表現が月日の残酷さを感じさせます。碧さんの句―温室で  
季節外れの花が無理やり咲かされている。太陽は君が咲きたい  
時に咲けばいいのだよと、見守つていてくれる作者のやさしさ  
が窺えます。群さんの句―恋をした時、夫の死を宣告された時、  
慰めの言葉さえ煩わしく一人になった日々。いろいろな過  
ぎた日を思い涙が零れてしまいました。

輝 く

米田 恭昌選



天地人皆輝いてお元日  
冠雪に輝きを増す富士の峰  
甲申に輝くように顔洗う  
初せりに輝き見せるりんごっ子  
輝きが違ふどうやら恋してる  
輝いています只今婚約中  
よるこびが輝いている葉指  
輝いて涙で濡れるバージンロード  
キッチンにはびかびかゴミばかり溜まる  
どの顔も輝いているカーニバル  
輝いて見える男となら歩く  
輝きはないがどっこい生きている  
手が出ない輝く石のゼロの数  
持つ人が持てば輝くガラス玉  
銀髪の輝き父の退職日  
輝いた過去が邪魔する二度の職  
輝いた頃はバブルの絶頂期  
脚光を浴び輝いた自負がある  
自分史のあの輝きを振り返る  
輝いた日もあり今を生きたるる  
雑魚なりに輝きたくて辞書をくる  
おもちゃ売り場へ来ると輝く子の瞳

哲男 良一 螢 雅城 一粹 尚士 章子 愛論 霜石 柳弘 順子 (花) 孝雄 正剣 ちかし 典子 正雄 武佑 庸史 東雲 ヒサ子 春雄 善信

輝くひとを陰で支える地味な人  
支えてる人が輝く時がある  
原石の輝きはどて丁度良い  
九回の裏で輝く夢を抱く  
ドナーカード宝石よりも輝けり  
イミテーションで輝いていた若い指  
ロングヘアーに輝く明日がある若さ  
金賞に輝く墨のかすれかた  
朝市の顔が輝く国訛り  
夕映えの海宝石を撒き散らす  
億光年の星にまじって亡母の星  
マイウエイ決めて輝き出す未来  
眠いけど月下美人の輝く夜  
水面が輝き河童出てきそう  
栄冠に輝く覇者の良い笑顔  
住  
光輝万歳中国飛行士無事帰還  
倦怠期輝き失せている指輪  
恋をしておんな輝き取り戻す  
空は星人には愛が輝いて  
ハリポッター園児きらきら動けない  
人  
ハローワーク輝きはしい人ばかり  
地  
ラブコール静かに手話の輝く目  
天  
限りなく輝いている母子手帳  
軸  
老いてなお輝き増すは妻ばかり

孝一 たもつ 次根 朝子 保州 理恵 寿美 重人 茂代 寂子 富子 (渡) 美代子 度 高明 輝夫 (楠) 遠野 猿杵 勝視 千里 鉄治 播本充子

てのひらの熟柿を誰にあげようか  
てのひらに仏飯さげて今日も無事  
てのひらの数珠が煩悩解き放つ  
子の船出母てのひらを振り続け  
クリームをのばすてのひら女めく  
たんぽぽも夢もてのひらふつと舞い  
八起き目の運を掴んだてのひらよ  
手のひらにはらりと落ちた雪の片  
てのひらを聞くと運がこぼれそう  
手のひらで林檎の重さ計られる  
てのひらに息ふきかける雪だるま  
てのひらに握手の温み残る人  
手のひらに乗せた子供が手を焼かす  
てのひらで握り潰した怨み節  
手のひらに乗せる程度の愛はある  
虹つむてのひらいつも開けておく  
てのひらの罪手の甲が知っている  
柔らかいてのひら鬼の骨を抜く  
てのひらでしっかり握る明日のドア  
てのひらに引かれた僕の設計図  
地震予知証はマグマのてのひらに  
古里の遠い記憶を手のひらに

てのひら

佐野木みえ選



螢 敏子 晴翠 あずま 理恵 彩子 朝子 婦美子 強一 愁女 慕情 昌鼓 旋風 准一 善信 俊路 初恵 哲男 ちかし 柳弘 栄子

幸福を掴むてのひら開けている  
 岩清水手のひらで呑む山登る  
 てのひらで葉の粒を確かめる  
 母卒寿生命線は皺の中  
 機械化が消すてのひらの深い皺  
 てのひらにカンニングした蜚雪期  
 手のひらの大河ドラマは終わらない  
 てのひらのまだ濡れ衣が乾かない  
 てのひらに乗る幸せを追い続け  
 てのひらを合わせ心の棘を抜く  
 てのひらに温もり残し母は逝き  
 てのひらで弾んでK点越えたマリ  
 大仏さまのてのひらに乗るお身ぬぐい  
 手のひらにも迷い覚えたEメール  
 てのひらに載る幸福を持つて生き

佳

掌の中の珠がこぼれた披露宴  
 弥陀の掌を拒んで落ちる青リンゴ  
 てのひらの汗が知つてた義理の数  
 てのひらのぬくみ淋しい子を溶かす  
 里帰り両掌ひろげて風が待つ

人

てのひらで土かき寄せた甲子園  
 地の  
 てのひらですくい命の水飲ます  
 天  
 母の掌を降りて見事に開花する  
 軸  
 てのひらに溢れる愛をありがと

勝巳 妻子 圭二 いさお 棲世 猊杵 霜石 章久 紫晃 正和 愛論 美代子 雄々 こずえ 尚士 正剣 あやめ あずき 俣子 奮水 奮水 志千代 太田扶美代

氷 柱

緒方美津子選



氷柱から乙女の夢が零する  
 みちのくの氷柱に息吹く春の私語  
 分校の軒に氷柱のすだれ伸び  
 つらら溶けて長い手紙を書き終る  
 鍾乳洞に一億年の造形美  
 氷柱から一滴ずつの春がくる  
 氷柱の九条とけて出る恐さ  
 友の計を氷柱抱いたように聞く  
 つらら手折れば出稼きの父眼に浮かぶ  
 春を待つ氷柱音符が溶けはじめ  
 囲炉裏はた氷柱眺めて熱い酒  
 氷柱が溶けて人間らしくなり  
 世間の風に触れてもみたい氷中花  
 氷柱にも寒さに耐えたいらしい瘤  
 氷柱の中でも見栄を張る黄バラ  
 故郷発氷柱の夜行列車着く  
 鋭さを月の雪で増すつらら  
 いにしへの夢を抱いてるつらら石  
 氷柱のばらの嫉妬が怖くなる  
 僻村のつららも消えた温暖化  
 氷柱が人間拒む北の海  
 風の子が氷柱齧つて翔んでいる

岳水 順風 輝夫 高明 正山 照子 一風 正雄 五月 美明 みね 勝巳 一粹 哲男 黒兎 美也子 茂代 志華子 典子 慕情

会議白熱氷柱を置く冬さなか  
 春を待つ滴のつららもとははじめ  
 バーボンに氷柱浮かべる山の小屋  
 鼻たれの頃のつららは太かった  
 余罪まで氷柱に閉じ隠しとく  
 心が凍る氷柱の鋭さで  
 友の計報つららが胸を刺してくる  
 左遷地の氷柱へ春は未だ遠い  
 背く子が帰らぬままにつらら溶け  
 春風のデユエットで幕を引く氷柱  
 氷柱へ籠る心を解かす愛  
 出稼きの父の便りをまつ氷柱  
 氷柱花短いドラマ演じきる  
 今日を限りの氷柱を抱きしめる  
 氷柱解けても息子の遺骨戻らない

佳

ハローワークにある極太のつらら  
 氷柱が溶けても許す気になれず  
 突つ張つた氷柱も融ける母の愛  
 ひと安心つららの下が寒い冬  
 廃校のつらら童謡忘れてる

人

突きつけた氷柱の刃溶かす君  
 地の  
 この地にも住む人がいる大水柱  
 天  
 春を待つ氷柱も僕も饒舌に  
 軸  
 大水柱溶かして嫁ぐ子に幸を

恭昌 ミツ子 浜丘 水笑 公誠 (花) 順子 とき あずま 晴翠 朝子 寿美 鉄治 保州 たもつ 充子 俊子 敏子 修 正和 理恵 善信 高瀬霜石

# 初歩教室

題——今年

三宅保州

この「初歩教室」を永年ご指導された吐田公一氏から私が浅学を顧みず引き継ぎさせていだいてから、早いもので一年を経ました。その間、多くの方々からご投句、ご支援を賜りありがとうございました。

「初歩教室」と銘打つてはいますが、ご投句される方には誌友歴、柳歴の長い方も多くて、一般的な「初歩」というレベルを超えられている佳句もたくさんいただき、川柳塔方歳という思いを強くしました。

一方、初歩ということで成長を願って厳しい添削と批評もさせていただいていますが、作者の意に反することもあり、私の力量不足と相俟つて、ご不満をお持ちの方もあったことと懸念しています。せめて添削の理由なども十分説明したいのですが、スペースの関係でそれも叶わず申し訳ございません。

救いは、この教室にご投句されている方が、当誌の各壇や各地の結社、大会等で佳句が入

賞されておられるのを嬉しく拝読して、その成長振りのご活躍に意を強くすることであります。

今年も、引き続き誌友の方々のご投句と、役員、同人各位のご指導、ご叱責をお願い申し上げます。

## 【同想句】

予想されたことですが、「今年こそ」という表現と発想が圧倒的でした。「今年こそ」が平凡で悪いとは限りませんが、あまりにも多いと非凡で卓越した「今年こそ」でない佳句にならないものです。

今年こそやり遂げてみよう 一 度 邦 柳  
今年こそと唱え続けて十八年 いさお  
今年こそ日記忘れずつけましよう 綾 乃  
今年こそと毎年同じ願い事 益 子  
今年こそ今年こそとは三年目 弘 之  
今年こそ来年こそと夢を盛る 節 子  
今年こそ今年こそと無為無策 満 子  
今年こそ今年こそとはと神頼み 芳 江  
今年また目ざした願い尻すばみ 稔  
今年こそなどと力まぬ事にする 秋 星  
元旦の誓い今年もむつかし 孝 明  
ジャンボくじ今年の夢の見納めで 弘 子  
今年こそ今年こそとジャンボくじ 正 和  
今年こそ解決したい拉致のこと 正 和  
両句とも同想の多い句でした。

御堂筋夢見る虎の目が光り 賢 治  
最後まで酔った今年のトラの覇氣 はじむ  
連勝へ今年も頼むタイガース 昌 鼓  
タイガースの句もたくさんありました。

## 【添削・批評句】

原 明けまして今年も二人で祝う屠蘇 千 華  
正月の祝吟としては良いのですが、川柳としては平凡のきらい。中八音字は避けたい。  
原 陽やけして今年の坂も無事に越え 政 子  
日焼けの理由を「農に生き」とか詠みたい。  
原 絵手紙で今年は挑戦ライバルに 洋 子  
絵手紙とライバルに挑戦がそぐわない。  
添 絵手紙で賀状を作りたい今年  
原 再会を約した友にまた詫びる と き  
添 しあわせは今年も会える友が居る  
原 ランドセル孫の背中で嬉しそう みね代  
添 ランドセル今年は孫に贈れます  
原 観て聴いて読んで心を豊かにす 実千代  
添 観て聴いて読んで今年の糧にする  
原 川柳に悲しき心救われる 信 子  
添 川柳に今年も救い求めたい  
以上原句四句は「今年」の題とわかり難い。  
原 今年ほど夫婦嬉しい年を抱く タカ子  
何が嬉しいのか読者にはわからない。  
添 今年こそ実現したいフルムーン  
原 オベから九年今年もいのち元気で 円 女  
いのちと元氣は重複気味です。

添 手術から九年今年も長らえる  
原 禁煙を今度こそはと去年今年  
添 禁煙の誓いは続く去年今年  
去年今年は「こそ」と読む。俳人、虚子の「去年今年貴く棒の如きもの」が有名

原 年老いて今年の抱負顔陰り 郁代  
句が暗すぎます。前同きの句にしましょう。

添 老いたりといえど今年の抱負持つ

原 流行語今年はきつとマニフェスト こずえ

もう去年のことですから視点を変えて、

添 さて今年どんな言葉が流行語

原 自分史に今年は何んの年と書く 章司

添 自分史に輝く年にしてみました

原 当たり年三猿に習う姑であり 賀世子

添 姑として三猿目ざしたい今年

原 あれしたい今年はこれもしたい欲 登志子

添 あれしたいこれもしたいという今年

原 こんねんも老いの袖子風呂暖かい 映子

添 袖子風呂に今年の垢を流したい

原 今年暮れ庭木伸びどく伸びず 勝久

添 よく伸びた庭木見習いたい今年

原 初詣で硬貨に託すこの一年 侑子

添 一年を硬貨に託す初詣

原 垢おとし来年の芽に期待して アヤ子

添 来年の芽に期待して枝を剪る

原 今年こそ寝ていてほしい腸ポリプ 栄子

添 今年こそ暴れてはしくない持病  
原 遠来の友と沁み沁み今年酒 初恵  
添 旧友と今年の新酒酌み交わす

【少し工夫すれば佳くなる句】

この欄に毎回掲げる句は、よい意味でも悪い意味でも無難な句です。思わずウーンとなるもの（「膝ポン」の句）、感動や訴えが加味されれば最高。言うは易く作るは難しですが、今年も精進して下さい。

これという難題もなく年暮れる

古日記今年も同じ井の蛙

超特急今年も終る是非もなし

走り去る今年に欲しいあと十月

冷めやらぬ今年も過去の波に乗る

今年から米寿を越えた道歩む

金婚に喜寿と傘寿を祝う年

今年こそそ四坊主と言われたい

今年こそ無駄な時間は作らない

腹いっぱい笑顔つめ込む今年こそ

表紙飾る今年の顔が笑つて

三猿で今年一年恙なく

今年だけで終わらんといてタイガース

【佳句】

今年こそ打ち明けようと半世紀

やりくりをまた楽しんでいた今年

状態しが溢れ今年も無事師走

今年また中吉でした初詣で 好  
職退いて今年は拭ける窓ガラス 清  
私色に染める今年も五七五 幸  
今年こそが目減りしてゆく初日の出 九好

今年こそ強い夫で居る決意

今年こそわたしの春を掴みたい 准一

新しい出会いが欲しい今年こそ 利子

次の世の鏡に今年どう映る 志津子

佳句のうち、「今年こそ」の措辞を使つ

た句が五句ありますが、その発想や表現に

ついて感動や訴えのある句で、その意味で

【同想句】欄の句との違いがあると思いま

した。

【今月の推せん句】

今年また川をさらえて待つてます 撰 喜子

「川をさらえて待つ」という暗喩（例え

を間接的にしてその効果を狙う手法）は女

心の切なさを詠んだのではないでしょう

か。表現の巧みさと奥の深さに打たれます。

そうなんだ今年は母がもういない 羽田野洋介

新年を迎えて、毎年の位置に母がいない、

正月のしきたりを取り仕切ってくれた母は

もう居ないという万感の想いを「そうなん

だ」という一語に凝縮されています。

【私の句】

さて今年何が起こるかお立ち会ひ



# 秀句鑑賞

同人吟 小島蘭幸

— 12月号から

最近各地でジュニア川柳が花盛りである。

嬉しいことだ。昨年福山市で開催されたけんみん文化祭・二〇〇二文芸祭川柳大会でジュニアの部の選をさせて頂いたのだが、その時の講評に私は次のように書いている。

ジュニア川柳の魅力は何といっても感性の豊かさにあると思います。そこには大人の私達には想像出来ない宇宙空間が存在しているのかも知れないのです。今回一、八六二人の小・中・高校生の作品を拝見してその思いを一層強くすることが出来ました。そしてさわやかな感動に包まれたのです。自分の言いたいことを全部言ってしまうと単なる報告になってしまいます。また、逆に省略しすぎると意味不明になります。さらりと省略して軽くて深い作品は柳歴を重ねてもなかなか詠めないのですが、今回は素晴らしい作品がありました。この時私が選んだ最優秀句は小学二年生の作品だった。「せいせきをかあさんと見てVサイン 眞紀」ジュニア川柳の益々の普及を願う今日この頃である。

日本を守り続けているサクラ

蔵本悦子

最初12月号に桜の句なんて思っていたのだが、だんだんと満開の桜だけが桜ではないと思ってきた。庭の一本の桜の木は春夏秋冬私を守り、家族を守り、我が家を守ってくれているようだ。たった一枚だけれど満開の桜の下で撮った家族の写真がある。やっぱり日本にはこの句のように桜が一番よく似合うようだ。下五を桜とせずサクラとしたのは国際色を出したかったのであろう。

秋夜長鬼遊豆秋暮薫風

川端一步

秋の夜長を好きな川柳作家の句集を読む。正に至福の一刻であろう。鬼遊川柳に泣き、豆秋川柳に笑い。薫風川柳に大きく領いている作者が見える。この句の巧みところは下五の喜寿薫風の喜寿にあると私は思う。今、私は瘦身の鬼遊さんを思い出している。キウウという呼名を思い出している。そしてセンチメンタルになってきた。

お供えを一つ戴く午後三時

津村志華子

なんとも可愛い作品ではないか、午後三時になるといつも仏さんと一緒にお茶を飲んでおられるのだろう。ゆるりとした一刻が過ぎると「ただいまおばあちゃん」と孫達が次々帰ってくるのだ。明るいおばあちゃんと孫達の会話が聞こえてくるようだ。例えば「アッおばあちゃん仏さんのおまんじゅうが一つ減っている！誰が食べたんやろ」「仏さんが食べたんよきつと」「サアサア宿題宿題、宿題をしてから一緒ににおやつを食べようね」「ハイ」……

ひとりになった時の準備がはかどらぬ

舟渡杏花

いつかはひとりぼっちになるという深刻な話題を詠んでいるが、どことなく救われるのは下五のはかどらぬにある。しかし、いつかはひとりぼっちになる日が確実に訪れるのである。せめて心の準備だけはしておかねば……

忘れん坊のわたし長生きできるかも

楠見章子

忘れん坊のわたしと言いつける作者は、きつと何事にもよくよしない大らかな性格の持ち主なのであろう。忘れん坊のわたしに川柳とくればこれはもう鬼に金棒である。



## ファミレスのコーヒー愛を語れない

播本 充子

ファミリーストランはどこも盛況でにぎやかである。若いグループに家族連れ、小さな子供達の笑顔もはじけている。熟年のカップルであろうか、愛を語れないと言っているがファミレスのこの風景が好きなのではなからうか、そんな気がしてならない。ファミレスを出て、ゆつくりと秋の街を散策して、今度はしっとりとした珈琲館でこころゆくまで愛を語ればいいのだ。

## 無位無冠楽しんでるスニーカー

市丸 晴翠

下五のスニーカーで爽やかな一人の紳士の顔が浮かんできた。その顔は一つの仕事をやりとげた男の貌である。無位無冠のなんと楽しいことよ、さあ今度はスニーカーを脱いで奥さんと一緒に川柳を！

## 夫禁煙わたしはケーキ止められぬ

米澤 俣子

「僕は今日から絶対に禁煙するぞ」「あなたが禁煙したら、じゃあ私はケーキを止めるわ」こんな夫婦の会話が聞こえてきそうぞで微笑ましい作品である。きつと仲の良い夫婦に違いない。ふつくらと可愛い女性を想像して楽しくなった。

## 忙しい日は忙しく歯を磨く

谷口 義

当り前のことを当り前に詠んでいるのだが楽しい川柳だ。朝早く起きてバタバタと準備している一人の男を想像して思わずニヤリとさせられた。そもそも歯を磨くという動作はたつぷりと時間があっても忙しく見えるものだ。これはもうマツハの世界であろう。そんなにバタバタしなくても思うのだが……

## 川を見ていると無口になってくる

高島 啓子

無口になってくるという表現は使い古されているが、上に「川を見ていると」を持つてくると美にいいではないか、無口がピタッと決まっていて動かないのだ。

さらさらと流れる川を見ていると若かったあの頃が走馬灯のように蘇ってくる。静かに臉を閉じると美空ひばりの「川の流れるように」の歌詞が浮かんで来た。

## 介護保険証が届いた秋日和

西出 楓楽

介護保険証が届いたという重い現実を、秋日和がやさしく包んでくれているのが実にいいではないか、現実とは現実としてしつかり前を向いて歩いて欲しいものだ、下五の秋日和小津監督の映画の一シーンを見ているよう

な気になってきた。

## ウーロン茶で頑張っている三次会

早川 盛夫

この句にはビックリさせられた。実は私も飲み会があるといつもウーロン茶でお開きになるのを、ひたすら耐えて待っているからである。私は飲めないことはないのだが、車で通勤しているので飲めないのだ。最近では飲酒運転の罰則も厳しくなり、誰も飲め飲めと言わないので助かっている。私は付き合うのは一次会だけと決めている。二次会、ましてや三次会なんてとてもとでも耐えられないであろう。作者が三次会まで頑張れるのは、単なる飲み会ではないのではなからうか。ウーロン茶もほどほどがいいようだ。

## お祭りの中で独りになっている

太田 扶美代

ふつと独りになることがある。お祭りでも雑踏でも……人間はどこかで独りの世界にあるがれているのかも知れない。

## はつとしたシヨックで五年若返る

嵯峨根 保子

面白い句だ。はつとしたシヨックで五年若返るのならいつもはつとしていたいものであるがそうはいかないであろう。はつとしたシヨックで五年若返るのは一回きりなのだ。

# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

東京都 やまぐち珠美  
漕ぎだしたときはまばゆい海だった

芒だけ見ていた風の眼を見ずに

福原市 安土 理恵

諸行無常 多分昔のことでしょう  
無関心だから言い訳いりません

和歌山市 木本 朱夏

コスモスは風と契つて風に死ぬ  
落葉松の林につづくわが愁い

弘前市 高瀬 霜石

生きるとや風船ひとつ染みひとつ  
ちちの釘わがこめかみにまだ朽ちず

弘前市 斉藤 劬

稲の穂の涙ぽとと聞こえます  
森の切り株でロダンの顔になる

富田林市 池 森子

ありがちな話と落ちる秋の虹  
熱狂の果てです余韻のまま星座

和歌山市 西山 幸  
積む石のどれにも父の母の顔  
歩き疲れて生年月日重くなる

大和高田市 鍛原 千里  
美辞麗句はどくとなぜかむず痒い  
偽りの虚飾へ心やせてくる

西宮市 牧淵富喜子  
その場所を離れて立てば風ばかり  
すこしずつ言葉がずれて黄昏れる

和歌山市 福井 桂香  
もみじ葉の沈む儀式を見届け  
くるみパン森の事情を語り出す

弘前市 福土 慕情  
見舞いにはまだ行つてない重い靴  
リハビリの虹へ近づく一歩二歩

羽曳野市 徳山みつこ  
絶滅種になりはしないか本の虫  
枇杷の花 私もひそと咲いている

大阪市 岩崎 公誠  
嘘の実を踏んで坂道駆け落つ  
時給など人に言えない賃仕事

大阪市 前 たもつ  
少年の狂気に悩む元教師  
堂々と狂つた時計とき刻む

横浜市 保田 絹子  
急速に会話中断されたまま  
気配りに心の傷を穿られる

岡山県 山本 玉恵  
身構えた途端に夢は遠ざかり  
まだ夫婦長いゲームの繰り返し

奈良市 乾 春雄  
ブランコが横にゆれ出す反抗期  
リストラに生きる軍手の泥まみれ

八尾市 井尻 民  
葬送を終えて見上げる寒北斗  
黄昏れて絵の一枚に彩をたす

大郡和歌山市 坊農 柳弘  
禁酒禁煙男の覇気が錆びてくる  
凡人の域は越せない午後のお茶

和歌山市 桜井 千秀  
はんりの図柄にしよう出入り口  
独り寝に浅い眠りも善しとする

唐津市 仁部 四郎  
ゲルニカに原爆の図という補作  
拍手した責任も問う戦争画

唐津市 井上 勝視  
末世など見ずに逝けるも幸せか  
ドナーにもなれぬ臓器も生きる欲

鳥取県 土橋 螢  
幸福を装う度に計報くる  
仏からもらった知恵の持ち腐れ

尼崎市 春城武庫坊  
枯野彷徨心の糧を追い求め  
落踵背にみんなの幸を祈ろうよ

竹原市 正畑 半寛  
猿まねをしておめでとおめでと  
読み終えた本に最敬礼をする

寝屋川市 森 茜  
サイフォンに熱い想いをたぎらせる  
海南市 三宅 保州

美しき記憶上海リルも老い  
美称市 安平次弘道

夕焼けが素敵で亡母を想い出す  
弘前市 高橋 岳水

迷つては居れない僕の冬支度  
弘前市 相馬 銀波

素敵だわとバラ一本を差し上げる  
米子市 林 瑞枝

お静かに究極の朝送りとおる  
弘前市 一戸 ツネ

母が逝き荷崩ればかり起こす父  
吹田市 岩屋 美明

うかうかと生きてうかうか死ぬ定め  
高槻市 乙倉 武史

こりもせず明日へあすへと先送り  
和歌山市 吉村さち子

ブティックで明日の私を掘り起こす  
倉敷市 井上 富子

お美しいとテレビですます紅葉狩り  
尼崎市 春城 年代

遺伝子の劣だけ継いで来た血筋  
熊本県 高野 宵草

冬の空仲間外れに慣れてくる  
八王子市 播本 充子

妥協を繰り返しつつ長い道  
米子市 光井 玲子

暮仲間の届く年賀は果し状  
弘前市 中山 雅城

月別にまどめてくれたホッチキス  
今治市 野村 清美

ケータイオフ本気で別れ想う冬  
奈良県 渡辺 富子

ブランコを揺らし涙のケ・セラ・セラ  
大阪市 古今堂薫子

冬眠も出来ずひとりの米をとく  
高知県 赤川 菊野

その次を話せば飛躍するあなただ  
鳥取県 田村さみ子

透明になってケンカの種がない  
松原市 玉置 重人

ゆつくりと枕の下で解けるもの  
松江市 川本 畔

能面の下にも同じような顔  
鳥取県 上田 俊路

落ちられぬ一葉だけのプラタナス  
弘前市 宮崎ヒサ子

仕残しの山で長閑な申の歳  
八尾市 高杉 千歩

イントロを開けば楽器となる五体  
海南市 堂上 泰女

合鍵を割符のように持たさる  
出雲市 園山多賀子

妥協した数だけ人間角がとれ  
和歌山市 青枝 鉄治

コスモスよやさしさ欲しい人ばかり  
米子市 青戸 田鶴

慰めの言葉を紡ぐレクイエム  
高槻市 左右田泰雄

のど仏出来て我が子も変声期  
鳥取県 土橋 睦子

白すぎる白紙少女が病んでいる  
富田林市 片岡智恵子

家系図にそって歩いたけもの道  
倉吉市 山中 康子

子の休暇終りわたしはがらんどろ  
高槻市 田中 初恵

山笠囃子家の裏から筒抜けで  
唐津市 田中 虹汀

顔ぶれを見比べている羽づくろい  
唐津市 久保 正剣

拒まれる瞬間までの有頂天  
四條畷市 吉岡 修

雑居じんわり葉になつてくる  
鳥取市 徳田ひろこ

心まで墨絵に染める雪景色  
松江市 三島 淞丘

父ちゃんの視野より広い肩車  
東かがわ市 木村あきら

秋は静かに忘れた歌を提げてる  
倉吉市 牧野 芳光

履歴書が過去を一枚ずつ脱がす  
西宮市 西口いわゑ

若さとはまだ半熟の柔らかさ  
愛媛県 花岡 順子

戻らないと決めて女が渡る橋  
八尾市 生嶋ますみ

古里のなまりが溜る冬駄舎  
京都府 丹後屋 肇

マニキュアの指が男の骨を抜く  
羽曳野市 森下 一知

鳥取県 佐伯 やゑ  
菌を見せぬ男に話してみとうなる

羽曳野市 吉川 寿美  
笑い上戸でとても悪女にはなれぬ

枚方市 海老池 洋  
華やかなデビューもあったシヤボん玉

米子市 木村富美子  
よく食べて眠って欲をまだ残し

横浜市 金森 徳三  
建前も本音も知った仲になり

奈良市 矢野 良一  
純よりも雑の強さが逞しい

愛媛県 中居 善信  
鉛筆の芯の堅さを持て余す

大阪市 川原 章久  
修道女楚々と小振りの黒すくめ

豊中市 水野 黒兎  
古傷の疼く晩秋ビルの街

鳥取市 録沢 風花  
切れは胸に畳んでいる微笑

八尾市 宮崎シマ子  
つまらないテレビ情性でつけてある

箕面市 出口セツ子  
核心を突けば涙の味がする

鳥取市 夏目 一粋  
競うでも僻むでもなく生きている

大阪市 神夏磯典子  
にんげんが一番怖いお化けたち

札幌市 三浦 強一  
五百羅漢五百の思惟の顔がある

松原市 小池しげお  
涙腺のずっと向こうにある記憶

和歌山県 辻内 次根  
爽やかを拾って歩く朝の道

愛媛県 黒田 茂代  
聞きながら忘れるわたしの脳回路

摂津市 もちづき遊美  
過ちと思えば謝罪なさらねば

高知県 近森 功  
ボツリボツリ誰かの愚痴に似た蛇口

食吉市 野口 節子  
ストレスをたつぷり詰めた男下駄

京都市 都倉 求芽  
靴の踵歩き疲れた型に減る

鳥取県 岩崎みさ江  
賞め言葉の毒に少々当てられる

泉佐野市 稲葉 洋  
判つてゐる別れを弱者には言えず

藤井寺市 太田扶美代  
偽詩人秋の深さを食べつくす

鳥取県 谷口 次男  
ここは過疎なんてどこにも書いてない

和歌山県 古久保和子  
今日からは自分のための時間割

尼崎市 内田美也子  
リセットのボタンで若さ取り戻し

三田市 堀 正和  
五十円切手のつなく友が居る

鳥取県 西原 艶子  
どの部屋へ行っても眼鏡置いてある

姫路市 古川 奮水  
冗談がうけて天狗になり易い

東京都 岸野あやめ  
警察が幽霊坂と教える

和歌山県 田中 みね  
選り好みでできる歳かという釣書

大阪市 三浦千津子  
無防備な顔へどきつとする頼み

香芝市 大内 朝子  
青空をハートに抱いて生きている

堺市 矢倉 五月  
戻りたい歳は十七夏のコト

和歌山県 中後 清史  
ちよつとした短慮が妻を遠ざける

海南市 谷口 義男  
見てる間に効果出て来た鼻薬

東大阪市 北村 賢子  
政治家よ無色の水に住めますか

唐津市 山口 高明  
先進国になつて銭出す事ばかり

大阪狭山市 羽田野洋介  
亡母の記憶一番似合う割草着

奈良市 米田 恭昌  
回り道寄り道もして子が育ち

吹田市 太田 昭  
嘘ついた夜は鏡を見たくない

大阪府 澤田 和重  
金婚へ辻褄合わせまた続く

砂川市 大橋 政良  
あと一歩こゝで心に隙が出来

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—12月号から

宗 水笑

選に當って何回も読み直しましたが、当然の事として私の力量、好みの範囲を出ていません。せつかくのいい発想。いい視点の句でも言い切ってしまうと川柳のよさが出せなくなりがちです。私を含めて読む人にイメージを広げる、余韻のある句を作りたいものです。指切りのままで終った親不孝

平川 幸枝

学生時代、あるいは修業中「きつと立派な〇〇になるよ」と言った事がどれほど実現したでしょう。成功ばかりが人生ではない。くじけずに次の努力をすることが親孝行です。

庭師来て大きくなった秋の空

堀 正和

せつかくの庭の名木、茂るにまかせてうつそうと。プロの技で刈り込まれ散髪をした後の爽快さ。見上げる空が、今までと違い青く大きくなくて心も大きくしてくれます。

決め球を打たれて自信揺るぎだす

布山 嘉信

投手の目、打者の目一瞬の勝負。打たれたら次回打ち取ればの気概で立ち直ろう。

老夫婦鍋に昨夜が残ってる

西川 義明

たまの鍋料理。二人分のつもりが出来た時は五人分位にふくれます。「お互い食べべくなつたね。残りは明日温めましょう。」

雑巾をしぼる教えも役に立ち

小西 稔

雑巾がけ一つ知らずに嫁に行くのは結構な身分のようですが、頼りないものです。よくこれ仕事で心を強く、美しくします。

初恋の人の名前は間違えぬ

青砥 菊枝

当然です。その他いくつの恋とは違います。名前も顔も忘れていくようでは、本当の初恋とは言えません。青春の宝ですが、さしざわりのある所では軽々しく言わないように。

悪筆と思ひ込んでる表書き

杉谷 一栄

何事につけ自分を過少評価しがちですが、(中にはその反対の人もいるにはいます。)本当の悪筆はめつたにありません。個性豊かな字と、人様は言ってくれます。

鋭さがすこし災いする乙女

執行 稲子

才色兼備がそのまま災いをすることはありません。それを鼻にかけた鋭さが、一目おかれます。心やさしければ鬼に金棒です。

エプロンで包んだ愛は忘れぬ

源田 啓生

幼い時、充分に愛に包まれて育った子は、包丁を振るったり、バットで殴ったりはしません。エプロンで包まれた愛は、脳内にしっかりとインプットされています。

頑張れに代わる言葉の見つけからず

藤永 実千代

何事につけ頑張れと言いたくなりますが、もっと大切な方法のある時に、この一言より他にないのは切ないものです。

なにくそと今日も男が本を読む

坂本 兵八郎

ソレソノ心意気。この本は軽い読み物ではなく抵抗のある本のようです。食べ物とは体本は心の栄養です。「男」が川柳らしい。

※なお印象に残った次の句を添えます。

年金に鑑降ろした父の船 岡田幸生

お迎えに早く来てとは本心か 坂上淳司

寺の門出て凡人の顔になり 安達 厚

納豆の糸が甘える不精髭 近森 功

# 本社 十二月句会

十二月八日(月)午後一時  
ア ウ イ ー ナ 大 阪

やつと冬型の気圧配置になって、薄ら寒い  
中120名の参加を得て句会が開催された。

お話は吉村一風さん。昭和17・19年の第二次世界大戦中に上海に赴任していた頃の思い出。「魔の都市 上海」と言われていたそうで、日本人絶対優越の中で楽しかった反面、怖いことも多々あったそう。楽しすぎて使い込みをして、内地送還もよくあったらしい。日本人仲間で川柳の会があり、生まれて初めて作ったのが「儂苦来西 アラ多苦来西黄包車」だそうで、「ノンクレシ アラトウクレシ ワンボツォ」と発音するらしい。「人力車に乗っている日本人も外地で苦勞しているだろうが、中国人の車夫の方が貧乏でもっと苦しいと言っている」との意で、感傷ついていた日本人の中で人柄が滲み出ているように思える。

そのあとは、往時とは様変わりした現代の上海の大発展につき、詳しく説明があった。

月間賞は立蔵信子さん(大阪市)に輝く。

(司会 玄也)(記名 月子・朋月)  
(受付 ルイ子・賢子)(清記 尚士)

## 席題「裸」

米田 恭昌選

盗聴の好きな裸の王様で  
コイヘルベス裸のままで浮いている  
身ぐるみを剥いだ株屋へ化けてやる  
ごめんねと母を裸にする介護  
小柄でも裸一貫親父の掌  
年齢がモロに出てくる素つ裸  
裸木は負けじ魂秘めている  
裸だとわかると誰も寄つて来ず  
豊富な裸体がお好きルノワール  
財布みな裸にされる競馬場  
これ以上脱ぐものがない野球拳  
このところ妻の裸を見ていない  
政治家も裸の王になるなかれ  
エプロンの下はスッポンパンが好き  
脱げばすぐ人気戻ると言う自信  
裸一貫わが風雪を振り払う  
どうにでもなれと男のすつ裸  
混浴にタオル一枚邪魔をする  
裸婦像がときどき足を組み替える  
水脈の行き着く先にいた裸族  
裸祭り重ね男になってゆく  
裸一貫何も失うものはない  
この歳でまだ恥ずかしい素つ裸  
本音出す男同士の風呂の中

真理子 雅文 修 耕治  
五月 正坊 天笑 楓楽 度 美代子 天笑  
愛論 森子 萬的 孝一 美明 恵子 保州 則彦 俣子

裸婦像の前で産声思い出す  
裸一貫むかし話を自慢する  
ゴーギャンの裸婦がこの僕呼びとめる  
帰りざわ論古裸で握らせる  
裸木はしつかり明日を掴んでる  
虚心坦懷裸になればすむ話  
追伸で心の裸見せしめよう  
裸木の新芽身籠り春を待つ

佳 として冬裸木は春の支度する  
バスタオル巻いて敬語の電話口  
過去みんな捨て裸木のいさぎよさ  
裸木の意地は亡父にも似て哀し  
裸木の根強さを知る霜柱

人 許し合う心裸の人間味  
地 マイナスイオンほのかに匂うヌード集  
天 呱呱の声天地を掴む丸裸  
軸 皆がみな元は裸と立志伝

兼題「荒れる」 高杉 千歩選  
反骨の人さし指が荒れている  
荒れ果てた庭はバブルの夢のあと  
英霊の叫びだろうか海荒れる  
荒れてはる補聴器一寸はずしとこ  
荒れたすと鉢巻きをする癖がでる

比ろ志 千歩 洋 俣子 楓楽 甚一 昭 朝子 深雪 正雄 みつ子 森子 美籠 朝子 たもつ 鐘造 螢 かりん 欣子 比ろ志

過不足の愛に思春期が荒れる  
 荒れた掌に家族の丸い顔が棲む  
 子には子のブライドがある反抗期  
 荒れぬよう手袋はめて寝ています  
 破天荒な嫁につられて若返る  
 荒れる子は愛を求めているサイン  
 テロで荒れる国に息子をやれますか  
 厚化粧しても隠せぬ肌の荒れ  
 不器用で愛し方まで荒っぽい  
 恋したら荒れたお肌も活きかえる  
 荒れた手が母の半生物語る  
 まな板のリズムが荒れる妻の乱  
 荒れた手で握った亡母の握り飯  
 自衛隊派遣国会荒れている  
 荒れた日の日記は字まで荒れている  
 お煮染めを手抜きしてから手は荒れぬ  
 廃校の荒れるをよそに咲く桜  
 唇が荒れる悪口言うたから  
 荒れた手を勲章にする肝つ玉  
 異常気象地球が大分荒れて来た  
 荒れた日々空白のまま古日記  
 荒れ地にもそれなりに柿赤くなる  
 大荒れもせずに支持率下がるだけ  
 サインかもしれない言葉が荒れている  
 父親を越えるためだろ荒れるのも  
 荒れた手に五人育てた自負がある  
 母さんが荒れると高い服を買う

森子 度 女 保州 鹿太 甚一 セツ子 比ろ志 深雪 美明 富美子 朋月 笛生 一風 正雄 義 柳伸 桃花 正坊 アキ 求芽 恵子 信子 桃花 東雲 哲男

少子化に年金の波吹き荒れる  
 スリッパのリズムも今日は荒れ模様  
 温暖化の街で荒んでゆく心  
 食べまくっての妻今日は荒れてるな  
 人  
 荒らされた山が怒りの鉄砲水  
 地  
 誤解されたのです妻が荒れてます  
 天  
 あかぎれの手に勲章をくれた孫  
 軸  
 荒れ狂う戦火ドラマの如く見る  
 兼題「温い」 桜井 千秀選  
 左遷地の風の温さに根を生やす  
 さめた子を温い心で解きほぐす  
 行間に温い想いを埋めて秋  
 再起する兆し見守る目が温い  
 愛少し足せば炎になる温さ  
 一人来た会で貴女に会う温み  
 相槌の温さついつい長居する  
 野暮だけと妻の手編みは温かい  
 竹の皮に包まれ温いにぎり飯  
 煮こぼれて温い女になりました  
 胸のポケットにいつも温めているチャンス  
 あたたかい話題に飢えている師走  
 だまされたふりをしておく温い嘘  
 あたたかいもてなし流儀などいらぬ  
 糸底の温みゆつくり冬を知る

(奥)五月 天笑 扶美代 度 千秀 天笑 昭 鐘造 柳弘 満津子 美代子 寿美子 恵子 泰子 たもつ 瑠美子 満津子 鹿太 楓楽 雅文 度

甘酒に人心地つく京の冬  
 おだいじに診察あとの温い風  
 焼芋が温めてくれる空財布  
 温もりが欲しくてメール打っている  
 会ったに温い握手をしなくても  
 風物詩師走の街の募金箱  
 温もりを母に貰って立ち直る  
 温い手に触れて八起きを決意する  
 雪しんしん民話の里の温かさ  
 冬の絵も温い子供クレヨン画  
 初対面温いお人にホッとする  
 傷心を労る過疎の温い風  
 温かい言葉に飢えているルージユ  
 おまけどす温さがこもる京訛り  
 ババの夢天まで届け肩車  
 母の手が一番温い失意の日  
 知らん振りしていてくれる温かさ  
 佳

雅文 深雪 昭 いわゑ 天笑 富美子 朝子 楓楽 みつ子 美明 義子 美龍 正雄 修 男女 英子 度 寿美 孝一 信子 千歩 幸生 倫子 富美子



腕組めば広場に温い風が吹く

## 兼題「ほのぼの」

都倉 求芽選

ほのぼののナンバーワンは愛子さま  
 ほのぼのとレイクの笑顔裏の罨  
 柔ちゃんの笑顔ほのぼのハネムーン  
 イラク派兵ほのぼのしてはいられない  
 穏やかな微笑お寒うございます  
 峠越えベッドに薄陽ほのぼのと  
 ほのぼのと運動会の島の人  
 湯あがりの肌にはほのぼのシャボンの香  
 やわらかい陽射しほのぼの吊し柿  
 風呂の中妻ほのぼのとルノアール  
 故郷の幼なじみと飲んでる  
 見る人をほのぼのさせる笠智衆  
 ほのぼののニュースに飢えてきた地球  
 写メールで孫の笑顔が逢いに来た  
 ほのぼのと生いたちを見る立ち居  
 ほのぼのといで湯の旅で妻の背を  
 ほのぼのと孫の化粧の香を貰い  
 投書欄ほのぼの系もまぜてある  
 出迎えの人が待って冬の日  
 ほのぼのと帰った後も温い人  
 ほのぼのの恋で終った秋嵯峨野  
 ほのぼのとした時にはちひろの絵  
 ほのぼのとぶら下がってる鳥瓜  
 旅の朝ほのぼの昔ばなしなど  
 ほのぼのした風を絵手紙連れてくる

あやめ 公誠 たもつ 鹿太 幸生 東雲 俣子 耕治 千恵子 扶美代 尚士 甚一 真理子 信子 章久 洋雪 文 楓楽

夕焼け小焼け孫と大きく手を振って  
 ほのぼのと春のきざしの京野菜  
 ほのぼのと金子みすゞの詩に浸る  
 無に還る母ほのぼのと日向ぼこ  
 よう笑う人につられての笑い  
 紅一点に空気ほのぼの場が和む  
 母親のように拾った犬の世話

## 佳

ほのぼのと候文に母の顔  
 やき芋の好きな二人で正直で  
 日溜まりで猿の親子の毛づくろい  
 陽だまりへ二つ並んだ冬帽子  
 いい嫁が来てほのぼのと余生描く

## 人

十二月八日の今朝ほのぼのと

## 地

ほのぼのと男の傘の中にいる

## 天

ほのぼのと回るわたしの走馬灯

## 軸

黄のあかりほのぼの銀杏暮れ残る

## 兼題「クリスマス」

宮口

笛生選

クリスマスツリーが寒い六本木  
 聖書など知らない人もクリスマス  
 ボインセチア聖しこの夜連れて来た  
 ポジョレーヌ飲んで家族のクリスマス  
 商魂につられて騒ぐクリスマス  
 熱燗でひとりをいやすクリスマス

哲男 正雄 寿美 天笑 俣子 ルイ子 欣子 孝一 賢子 理恵 一風 美明 いわゑ 楓楽

クリスマスケーキをどうぞ仏さま  
 飢餓の子にとけサンタのプレゼント  
 キリストのことは知らないクリスマス  
 街冷えて駅前だけクリスマス  
 ただケーキ食べたいだけのクリスマス  
 本番のケーキに祈るクリスマス  
 騒音を離れてイブのひとり酒  
 宗旨変え今日一日はクリスマス  
 クリスマスここにもかくれ切支丹  
 仏壇をはたらかしのクリスマス  
 七面鳥が厄日になったクリスマス  
 絵手紙にボインセチアのクリスマス  
 讃美歌はどうあれクリスマスケーキ  
 マッチ売りの少女哀れむクリスマス  
 クリスマスやっぱりケーキでも買うか  
 回りずしつままで妻とクリスマス  
 ジングルベル浮かれて論吉飛んでゆく  
 一浪の孫はサンタのアルバイト  
 退院許可サンタさんからプレゼント  
 ケーキ屋にケーキが残るクリスマス  
 商魂へつい乗せられたクリスマス  
 クリスマスマリアに似たる母も居て  
 告白をしようかイブの夜になら  
 サンタさん来たら起すとクリスマス  
 プレゼント出来る幸せクリスマス

## 佳

潤子 保州 深雪 求芽 梨里 とし子 美代子 泰子 寿美子 修 雅文 俣子 保州 房子 一風 光久 鹿太 扶美代 朋月 かりん 愛論 信子 愛論 富美子 千歩 義子 みつ子



クリスマスツリー肴にうまい酒  
戦争やめる祭りにしたいクリスマス  
満津子

煙突が少なくなつたなあサンタ  
度

銀河から鈴の音するクリスマス  
天 天 笑

九条を袋に詰めているサンタ  
軸 真理子

クリスマスチャンにされてなつてるクリスマス

兼題「隠す」 河内 天笑選

春の地図隠して山は雪化粧  
義子

隠し金見つけた妻の恵比須顔  
更紗

隠し事ある父ちゃん目が泳ぐ  
玄也

へそくりを隠した場所がわからない  
睦子

善行を隠して粋な人がいる  
ダン吉

何を隠そうわたし整形美人です  
楓 度

隠すから探してみたらなるのです  
萬 的

機嫌よい妻は何かを隠してる  
岳 人

財産を隠して風呂へ行きました  
雅 文

密室に甘いページを隠し持つ  
哲 男

暖にも出さぬ内緒を嗅ぎつける  
朋 月

はけたかな隠した金が出てこない  
泰 子

隠し場所忘れるくせにまた隠す  
千 枝子

隠さねばならぬ一つのころざし  
森 子

冗談に隠されていたのはイケス  
恵 子

隠しごと下手な男のかい声  
朝 子

隠れ蓑の中でかすかな薄笑い  
かりん

隠してもみんなが知っていたロマン  
房子

小泉とブツシユ密約ありそうだ  
楓 人

へそくりの場所をときどき変えている  
重 人

隠し玉ボケットいつもきなくさい  
理 恵

携帯をいつも隠して開けてはる  
美 花

隠しカメラに見張られながらショッピン  
千 秀

隠し玉何所へ行ったかわからない  
東 雲

隠し事血圧計にちゃんと出る  
則 彦

一つや二つ有ると楽しい隠しごと  
満津子

棒グラフに隠されている過労死よ  
保 州

隠したいこと問ひ詰めてくる世間  
茜

淑やかな妻が切札隠し持つ  
ひさ乃

隠しても泥棒ちゃんと知っている  
たもつ

合コンへ指輪はずして参加する  
柳 伸

病名を隠す笑顔がつら過ぎる  
寿 美

隠しごとあるのか話題変えたがる  
求 芽

人知れず血の出る努力したらしい  
千 代

リストラを正月までは子に隠す  
一 風

嘘一つ隠す大きな穴を掘る  
潤 子

方法は二つ隠すか食べとくか  
義

しおらしい仮面の下のしたたかさ  
賢 子

天 さびしさの淵でニコニコしておこう  
立蔵信子

軸 秘めごとを隠してくれる月の暈

平成16年川柳塔誌発送予定日

1月27日(火) 7月27日(火)  
2月27日(金) 8月27日(金)  
3月27日(土) 9月27日(月)  
4月27日(火) 10月27日(水)  
5月27日(木) 11月27日(土)  
6月26日(土) 12月27日(月)  
以上の通り予定をしております  
ので参考にして下さい。

平成15年度本社句会の月間賞杯永久保持  
者は前たもつ氏(大阪市)に決定しました。

平成十五年本社句会皆出席者(順不同)

浅野房子 石森利昭 岩崎公誠 安藤寿美子  
江口 度 榎本舞夢 大内朝子 居谷真理子  
太田 昭 大谷篤子 鍛原千里 太田扶美代  
河内月子 河内天笑 川原章久 奥田みつ子  
志田千代 田辺鹿太 玉置重人 鴨谷瑠美子  
寺井東雲 中澤伽羅 長浜美籠 川久保睦子  
西内朋月 西出楓楽 板東倫子 高田美代子  
藤井正雄 藤村メ女 藤田泰子 出口セツ子  
坊農柳弘 前たもつ 村上玄也 飛水ふりこ  
森下愛論 森本弘風 吉村一風 長谷川春蘭  
吉岡 修 吉村雅文 平松かすみ  
山川日出子 (四十四名)



## 追悼

浦田

綏子さん安らかに

神夏磯 典子

綏子さんに初めてお会いしたのは四年ほど前、町会の事で寄せてもらった時でした。五十年もすぐ近くに住んでいながら出合いが無かったのが不思議でした。その時「川柳をなさってるんですね」と言われびっくりしました。なにわ柳壇を読んでもおられたのです。とても川柳に興味がおありのようでしたので、早速城北川柳会へ入会を勧めて帰りました。彼女は間もなく入会され、最初から佳句が出ました。

世紀末ベーターペンも忙しい

お喋りなドコモ場所柄考えず

軒先にいたかも知れぬ青い鳥

二年後には同人に推せん。句に益々磨きがかかってきました。特に愛染帖欄によく抜けていました。

明け暮れを裂いて消えない文字に織る

心眼を蹠につけ背にもつけ

煮こりにおよそ遙かな悟達妙

御主人を七年前に亡くされ七回忌の事をしきりに気にしておられ、漸く終えたと聞いたのは三ヶ月ほど前の事でした。

終りなき夫三百六十五連休

家族とは柳か絆か風に問う

その頃からでしょうか。急に瘦せてこられ二人の息子さんがいくら勧められても病院に行かれませんでした。十月始め、往診をしてもらわれたら即入院との事でした。十月十日御入院。お電話を頂き御見舞に行ったのが十五日頃でした。「今日の句会は投句してますからね」とおっしゃりお元氣そうでした。それから半月後亡くなられるなんて。「意識が無くなりました」とお知らせがあり駆けつけると全然応答なく、私が差し上げた谷垣中好さんの句集が枕元にありました。それから四日後の十一月四日午後十一時四十一分帰らぬ人となりました。

長男さんは大阪音大の教授で綏子さんも音

楽をこよく愛され、地元のコーラスグループにも入って居られました。近頃は音楽葬にして欲しいとの遺言で葬儀には、浜辺の歌・椰子の実・ふる里・など名曲が静かに流れ、思い出が交錯致しました。

旧満洲の大連にお生れになり学校卒業後、小学校教師をしておられ、油絵も趣味の域を越えるものでした。

最近の川柳塔誌の句

高所恐怖症とても神には近づけぬ

きらめいて季節はわれを蝕はめる

明と暗 双頭の虫 身に潜む

歳月は風おもかげと遙か去り

城北川柳でもこの半年位天位に抜けました。

百合の花 諸行無常と鐘音に揺れ

ハンカチが二枚要ります泣かせます

忘却の結び目を解く 童うた

石楠花の女人高野で恋をして

これから、天才的な表現の句が見られない

と思うと残念でなりません。病名は肝炎。享年78歳でした。

今頃は

大連の天空をご主人と舞っていらっ

しゃることでしよう。心からご冥福をお祈り

申し上げます。

ご主人の許へこんなに急ぎ足

典子

台筆。

# わさけ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

高齢化年金が減ってゆく不安  
年金でつなく命の秋の暮れ  
子供より年金頼りにしています  
高齢化の海年金の波まかせ  
発った日の母の小旗を忘れまい  
たんぼの種がうわきな旅に発つ  
出発は健康法をやってから  
無人駅気ままな風がよく遊ぶ  
歴史から消してはならぬ無人駅  
紅葉を抜けて小さな無人駅  
人肌がとても恋しい無人駅  
司馬遼の本と降り立つ無人駅  
逃避行風のやさしい無人駅  
終章の日までいきいき紅をひく  
混浴と聞いていきいき旅カバン  
だんじりの屋根で男の貌になる  
酔っぱらいの隣へ誰も座らない  
誰とも話合わせるループタイ  
泊まりに来て下さい誰でもいいのです

三郎 高栄 武史 典子 秀夫 典子 東雲 宏章 求芽 孝一 重人 萬的 初恵 百合子 五月 石舟 庸佑 美龍 晴美

枯れ野のこと誰と話そう日の匂い  
この星の孤独を誰に伝えよう  
僕が飼つて誰も知らない腹の虫  
ビューティサロンドけないから本をみる  
真心で彼の心の鍵あける  
辛口の友がいるからくじけない  
未練とは厄介なもの苦しいもの  
勝つたはずなのに戦死者まだ増える  
喜怒哀楽酒で調子を整える  
探し続けた花はひとりで咲いていた  
もう冬が駆け足で来る急がねば  
東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

一矢 泰雄 比呂志 とし子 照子 スミ子 活恵 尚士 治三郎 和子 諷云児 愛論報

換気扇隣は今日も秋の味  
湯豆腐の味へ女将の京なまり  
ローズ川柳会 山崎 君子報  
音痴など忘れ六甲おろしかな  
思い出すのは忘れたことばかり  
走つたら間に合うバスに乗り遅れ  
走ろうか止そうか発車ベルが鳴る  
ただ歩く健康法や天高し  
落ちこむと箱根八里を大声で  
走つても走つてももう八十路  
ドラムソコ激しいうたを連れてくる  
アンカーにすべて託しているバトン  
走つたりつまずきながら今がある  
クンバルシータ聞けば若さが舞い戻る  
欲望という名の電車走り抜け  
秋に咲くバラあり今日も華たらん  
走り書きにたつた一行花言葉  
川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

典呼 愛論 初恵 勝 吟笑 輝夫 八重子 かおり 賢 勝 いさむ

ガマ口が下へ向き連休終る  
ふる里に気楽に寄れる友が居る  
一言が過ぎて外野がさわぎ出す  
亡妻を追ってザンゲの夏遍路  
肘鉄に恋の旨味も添えておく  
戦争が起されば古鉄上るかも  
宿の膳ふと氣に掛かる留守の夫

### 川柳塔みぞくち

小西

雄々報

三世代母校で学び縁があり  
菊薫る秋はますます色模様  
錦飾る母校の屋根は茜色  
母校名簿友の名見れど物故者に  
団地でき母校を歌う児童ふえ  
自信持ち校歌うたつたあの母校  
記念樹を残して母校幕を閉じ  
母校には私の好きな花がある  
大山が勇氣をくれた我が母校  
故郷も母校も錦待っている  
クラス会母校へ心寄せ集め  
火と水の情けを母校から貰う

### 高知川柳社

川竹

松風報

失礼を吐いて失礼悔いている  
失礼を詫げる電話に頭さげ  
失礼なあこであつちへ行けと言ふ  
失礼の意味が解せない若いママ  
失礼と詫げる少女に和む風  
失礼な女湯覗くおじいさん

あきら 治延 ひかり 貞月 寿々女 放任 よしみ  
千代美 信翁 公美枝 鈴木枝 弘子 久子 正光 静江 智恵子 豊枝 和代 雄々  
幸 佐紀子 快風 孝雄 圭二 功

嫁ぐ日に父は鏡の中で泣き  
老いてなお笑顔でいたい鏡見る  
手鏡が役者を変える舞台裏  
朝採りのぬき菜を洗う水鏡  
企みをすっかり聞いたコンバクト  
老眼鏡かけてどっきりする鏡  
石橋を時々たたき凡夫婦  
かずら橋愛を試したことがある  
火の橋も渡ると言つた妻という  
棧橋でした指切に嘘がある  
この人となら渡れそう長い橋  
よそ行きの顔を鏡に見てもらい

### 川柳ねやがわ

平松かすみ報

腹の虫なだめて生きる母の知恵  
取り敢えずこの場だんまり虫になる  
また一つ消える浪速の芸の虫  
DNAのせいでむかつくはらの虫  
肩書きを捨てて人生救われる  
救命士やつと命の火が点る  
ナンマイダー五円で済ます命乞い  
空ろな目救い待つてるイラクの子  
救いの手差し出すのにもいる勇氣  
世を救う候補者いずこ総選挙  
男にも駆け込み寺がほしいかに  
大国のエゴでは地球救えない  
その内に当たるだろうヨ宝くじ  
氣の強さだけがこつた老い二人  
親だからと強氣通してうとまれる

悦江 典雄 美々 佳風 まき子 成美 てるみ 哲史 圭風 良雄 松風 栄二 良知 祥昭 良三 俊雄 高栄 とし子 三郎 庸佑 忠央 恵子 一炊 博泉 ルイ子

大木を揺らす強氣なポールペン  
吠え犬の強氣も紐の長さまで  
生死のはざま母の強氣で蘇る  
五百羅漢みんな強氣の貌ばかり  
つまるとこ騙し上手が票をとる  
騙すなら天下の詐欺師目指したれ  
ロボットと組んだ仕事は騙せない  
騙す氣はないが結果が悪かった  
騙すなら尻尾もうまく隠しとこ  
美しい尻尾だまされて見よう  
子育ての如くに咲かせ菊花展  
救急車来ない日ナースよい笑顔  
まだ欲はあります僕は元氣です  
年金が妻と私をつなぎ止め  
青い空ふつと翼が欲しくなる

### 佳句地十選

(12月号から)  
児玉

少しずつ果けて仏に近くなる  
叱つた子に叱られている私  
どっち抜こか閻魔も困る二枚舌  
ひびのある器に私さばかれる  
渡りたい橋へ一歩が踏み出せず  
高望みし過ぎて梯子外される  
しんみりと話せば解けるわだかまり  
いつまでも奮のままと欲をいう  
人間にだけは化けたくない狸  
転ぶ度生きているヒントを掴まえる

かすみ 仁清 一風 洋修 勇太朗 弘一 さち子 茜 たもつ 三峰 日出子 利昭 弘風 朝子  
蛙 謡云 風花 公一 女京 一男 正坊 良男 静生 弘一

松本はるみ報

川柳大阪

高木

信醉報

院長の棚にボトルが置いてある  
酔うほどに本音出てくる赤のれん  
子供の眼見ていぬようでよく見てる  
この辺と探す呑み屋が見つからぬ  
東南にロマンを秘めた赤い星  
職探す空しい靴を履いている  
愚痴まで聞いてへき地のお医者さん  
また来よる舌噛みそうな北の船  
母の味探すとろ火の黒い豆  
やんちゃくれ通す二歳の親づり  
古希迎えハテサテ何をしてきたか  
御堂筋並木のありがたさわかる時季  
出迎への灯籠春日の参詣道  
医者よりも病状知っている患者  
僕を見てアップにしたいところがない

笑風 樂子 東吉 利昭 ひろ多 ダン吉 朝子 一章 久風 民子 喜楽 兵庫 本蔭棒 照月 一步

年収が三千万の医者もいる  
履歷書を握つて今日も日が暮れた  
拉致家族北の金さんどう裁く  
脈を見て医者の一言熱下がり  
名医です変調見抜く飼育員  
能面を取るとやさしい目に出逢い  
はつとくと言つてた妻が裏の手で  
探す手間要りませんのよ狭い部屋  
医者通いコースになつて日が暮れる  
つまされて涙ポロポロ秋夜長  
あかんなど見舞いの顔に書いてある  
総裁選椅子取りゲーム茶番劇  
国産の品を探すに苦勞する  
カルテ診て首かしげるのやめてんか  
肩がこる四角四面にノーサンキュー

竹原川柳会

時 広

一路報

綿香火花がほとりと消えた妹よ  
妹と通つた道に彼岸花  
二人の子生んで妹強くなる  
妹よ来世も兄で良いですか  
妹が時々姉に見えてくる  
アルバムにだけある妹の笑顔  
冬が来たココアが私を呼んでいる  
北風が吹くと淋しくなる心  
暮参り済ませば風が背をなでる  
滲み出がまた美しい和紙のいたずら  
上手では無いのに僕も紙を選ぶ  
鶴を折るといつもあなたがそばにいる

すがお 青道 一輪 比呂志 功 洛 司 美花 柳重 柳昌 柳弘 鐵心 まつお 信 蘭房 正節 半覚 幸枝 史子 孝枝 輝恵 榮惠

わたくしの表紙笑顔にしています  
ブッシュから赤紙が来たお父さん  
月夜道母と黒鉛かんぶくろ  
再生紙前世はお札だったかも  
一気阿成和紙昇龍のごとく見え  
流水を無心にみがく紙やすり  
天と地のある条幅と対峙する  
紙切れ一枚人生の岐路に立つ  
一寸の虫がかなえたマイホーム  
天道虫も私もすぐに跳びたがり  
泣き虫が今日も笑って帰る道  
虫一匹殺さぬアナタが恐くなる  
虫のいい頼みに馴れたかすみ草

川柳塔打吹

大森

孝惠報

風船かずらぶらりぶらりと実をつけ  
実ったぞ我が家の嫁御こ懐妊  
盗つ人が実るはしから持つて行く  
初恋が実らぬままで終止符を  
実りすぎ頭下がらぬ太鼓腹  
愚痴こぼす相手はいつも縄のれん  
歳老いて思わずこぼす竹の露  
どんぐりをこぼしたような秋の夕  
足跡を酒などこぼし消しておく  
一人ことこぼして壁に聞かせてる  
両手から水がこぼれる頼りなさ  
口下手が思わずこぼす美人だなあ  
ピノキオが鼻水こぼす深い秋  
ぞくぞくと貯まるへそくりゼロ金

汎美 萬年 厚子 淑子 不 民 靜 千代美 敬子 笑子 慶子 力 一路 孝惠報 京子 重忠 玲坊 紀美惠 美美子 龍枝 晴光 玲子 三津子 たけ代 和子 博丈 克枝 禎元

灰血に嫌煙権の目がささる  
 隠し芸血と一緒に目も回る  
 皿割つてみたが名茶湧いて来ぬ  
 国宝の皿や茶碗で茶漬け食う  
 皿二枚薬と毒が盛つてある  
 受け皿の大きい妻であぐらかく  
 割るための皿が出番を待っている  
 腹立ちを皿の欠けらに教えられ  
 私には大皿に盛る夢がある  
 自爆テロぞくぞく続く遠い国  
 燃え尽きてぞくぞく秋とさようなら  
 皿の上で好きな男を遊ばせる  
 三世代盛る大皿が姦しい  
 人生も実り豊かな喜寿迎え  
 不謹慎なれど喪服を着た従姉妹  
 柿栗稲穂実り平和な村祭

城北川柳会

神夏磯典子報

頑に口を塞いだ黙秘権  
 唇が厚いと油断が多くなる  
 やれやれと気を許すと病の床  
 やれやれと八十路の坂を這い登る  
 堅物といわれる課長にあるロマン  
 ああ娯楽手足伸ばしてお湯に浮く  
 唇を許すと男あつかまし  
 温かく迎えるホール家の顔  
 やれやれと学校出たが職が無い  
 着くずれと化粧くずれに合うホール  
 唇の色で計れるパロメーター

芳光 しろう かつみ 友楽 勝見 善江 幸子 順子 清 完司 螢 節子 和枝 久芽代 石花菜 孝恵 美代子 とし子 政子 高栄 あい子 一枝 達子 喜美子 茂 はじめ 柳一

妻の愚痴また唇がふるえ出す  
 やれやれと思う矢先に客が来る  
 やれやれは油断大敵憶てくる  
 固い殻やぶると視野が広くなる  
 オゾンホール青い地球の致命傷  
 割れずとも削られてゆく川の石  
 寄り道をしたことがない万歩計  
 ざりざりのセーフに絵馬が揺れている  
 深情け心の底に沈ませる  
 残さずに食べます昔人間で  
 今咲いた花に唇合わせて  
 セールスマンのうまい話に落し穴  
 老いてなお頑固な余生恥とせず  
 透き間から噂話がこぼれ落ち  
 空澄んで寝るには惜しい今日の月  
 唇のふるえ止まらぬお立台  
 政治家の便利唇カメレオン  
 見栄ひとつ捨てたら丸い声になる  
 出来もせぬことを野党のマニフェスト

西宮北口川柳会

黒田

能子報

栄光をかなぐり捨てて作業服  
 ブライドを捨てて楽しむ二度の職  
 なに一つできぬ夫は捨てられぬ  
 三猿でいると近所は丸くなる  
 窓越しの会釈で朝には丸くなる  
 脱皮する度に輝き増す恵女  
 母の知恵とつくにかぶと脱いでます  
 ルノアールと同じが自慢露天風呂

トヨ子 久留美 静枝 志華子 正 求芽 千歩 重人 典子 修 ひさ乃 満津子 春蘭 昭子 倫子 史風 順三 千里 公一 孝一 貴代子 五月 光久 奮水 嘉彦 光子 美代子

鼻のきく女にシャッポ脱がされる  
 これ以上もう脱げません美女の夏  
 青虫が脱いで化身の夜の蝶  
 靴を脱ぎ指十本を遊ばせる  
 ゆとりある靴はやっぱりよく脱げる  
 脱いでから沸いてないやんかと怒鳴り  
 わだかまりさらりと脱げば気も軽い  
 脱いでからこんなに重い殻と知る  
 ばたばたせずに次の一手を考える  
 土壇場でばたばた男軽くなる  
 ごみ出しにばたばた素颜をそくさと  
 仮縫いの愛情はすぐほこる  
 同じ趣味かこめば平和な顔ばかり  
 虫めがね要らぬ大きな辞書を買う  
 初代さまの耳が大きい肖像画  
 北斎の雨ならうれし濡れていく  
 化けて出てやると離婚の話する  
 貴方かなまとわりついて秋の蝶  
 虹色の夢見たこともあるスベアキ  
 近所には本屋と酒場ある地の利  
 すっぱりと昨日を脱いで丸洗い

京都塔の会

都倉

求芽報

庭下駄の素足に秋の露こぼる  
 手探りの日々にとこまで秋の空  
 秋晴れに二合で足りる米を研ぐ  
 川柳に思いの文を打ち明ける  
 途中下車して句碑を訪うひとり旅

萬の 春蘭 いたる 千代 曙蝶 能子 比ろ志 石舟 庸佑 松煙 鹿太 メ女 歳子 哲子 文 晴美 良恵 美籠 正坊 富喜子 春蘭 年代 武庫坊 高栄 和友

今がしあわせだといつもの散歩道  
 本心はもひとつ奥にしまつとく  
 今日一日を振り返り返つて終い風呂  
 間違つて降りて近道知りました  
 子どもらがクイズで学ぶ英会話  
 ファイナルアンサー思わぜぶりなみのんた  
 熱心に挑戦してる子のクイズ  
 点と点つなぐ答をするクイズ  
 ロボットがクイズの答聞いてくる  
 白米に飽きて五穀を混ぜて炊く  
 日々好日今日も米研ぐ妻がいる  
 腹立つ日力まかせに米を研ぐ  
 米を研ぐ男ひとりの米を研ぐ  
 今日夢明日へとつなぐ米を研ぐ  
 口紅は控えめに塗る TPO  
 人形になるべく舞妓まつ白に  
 念入りに塗ると自分を見失う  
 男女の仲 淡白のまま趣味の会  
 淡白な人で過去には触れて来ず  
 線香花火に似た淡白な恋でした  
 退院は淡白な味に慣れた頃  
 淡白な私を見つけ老いを知る

富柳会 池

美穂 篤子 達子 あやめ 萬の 安子 啓子 野鷲 百合子 メ女 比ろ志 満子 磯子 葉子 庸佑 求芽 芳子 ルイ子 典子 石舟 福子 益子 森子報 鐘造 奏子 巳代一 紅紫朗 冬虹

晩学の道を照らししてくれる辞書  
 私の辞書から老いの字を削除  
 流れ星天には天の掟あり  
 みぞおちに一人私のテロリスト  
 嘘一つ隠し通して曼珠沙華  
 陰の膳いつもわたしのひとり言  
 緑陰の中で蘇生する私  
 情念をカマドの灰に隠した日  
 独り言秋の深さを計つて  
 いつの日かアンネの隠れ家たずねたい  
 陰膳で異国の娘思う母  
 人生の隙間を埋める一行詩  
 情という言葉が辞書の中にない  
 秋一人静かな辞書の中にいる  
 ゆつくりと甲羅に乗せて秋日和  
 エプロンの下に隠している翼  
 親が子に丸くするため譲つて  
 姿見の裏に隠れていた虚飾  
 四代の元号に生き敬老日  
 風と手をつなぐ秋の絵が描ける  
 悪友をかげでけなしたことがない  
 不景気で弱気の虫を飼っている  
 燃えるもの隠して生きる蟬しぐれ  
 横顔の恋が眩しいほど奇麗  
 秋はむらさきやわらかく熟れる

川柳ささやま 遠山

一 和子 誠 アキ タ子 キミエ 浩子 和喜子 扶美代 深雪 高鷲 亮幹 初太郎 哲矢 奈保美 ひろこ 東雲 信子 春蘭 鬼焼 勇 宏至 和代 欣之 森子 可住報 純子 恵美

リハビリへ辛抱強さためされる  
 リハビリの真剣みんな無口にし  
 いい出逢いあつてわくわく八十の坂  
 一緒なら細い吊橋怖くない  
 リハビリでやつと笑えたにぎり飯  
 橋渡る母の待つ灯が見えるから  
 夢続くわくわく気分異国旅  
 わくわくの感動ほしき年になり  
 わくわくも何処かに忘れ日向ぼこ  
 組板に実りの秋を刻み込む  
 どうあると文字よりベンが持てました  
 初めの実り戴く秋の空  
 恢復を信じて汗を積んでおく  
 わくわくのベンが私をあざ笑う  
 卒寿まで長い人生渡る幸  
 実らねばならぬ人生渡る幸  
 四季の彩わくわく紡ぎ詩に織る  
 子を産みに母は戻れぬ橋渡る

川柳塔なら 坊農 柳弘報

美緒子 美智子 文子 美紗子 靖子 多美子 閑子 かほる つや子 八重子 富美子 君代 朝子 富子 康子 哲男 可住 蘭香 彰治 ふりこ 絹子 真理子 理恵 登美子 富子 あやめ



駅コスモス一きわ少女輝かせ  
毛筆で来た招待に義理包む

鶴彬の筆が鋭い反戦歌

家あげようただし二人の介護つき

参加した顔ぶれ酒になる予感

好きな人来るから参加したくなる

義理という心かくして参加する

参加してやつと踊りの輪に溶ける

母からのひらがな和む筆づかい

輝いた指で押せない核ボタン

イエスノーまだ迷ってるただし書き

さよならは言わずまたねで筆を置く

参加して生きるヒントをまた貰う

断筆宣言以後毒舌が聞かれない

吃水線こえて輝き出した恋

人間になろうなろうと虹を抱く

受付に難儀な筆が置いてある

母の荷に一筆箋の走り書き

未知数の想いが明日を輝かす

ゆつくり墨を擦るゆつくり筆を持つ

善人へ仲間入りする赤い羽根

### 尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

気の強いおんなの頬の泣きボクロ  
タツチの差悔しい肩が泣いている  
コッペパン欲しさにバイトした戦後  
良心を晒せば風が向きを変え  
ドカ弁と菓子パン三個食べ盛り  
パンだけの食事はいやな戦前派

鹿太  
その  
江美  
全彦  
まさ  
玉枝

春蘭

春雄

章久

むつみ

まつお

芳香

千梢

洋子

一風

茂雄

太一

ダン吉

道子

美千子

秋雄

良一

國治

寿美

孝子

桜竜

朝子

難ものと知らずに買つて後で泣く  
曇る日もいつてらっしゃい笑顔です  
遠い日を思い出させるコッペパン  
山ほどに泣きたい時は母のひざ  
泣く人が三面記事の裏に居る  
館ちゃんがタレントの名を言い当てる  
移り香も一緒にたたむ乱れ籠  
法螺吹いて選筆終れば秋の空  
勝利呼ぶ外野見送る決勝打  
身を削り鮭は母なる川で産む  
欠点を本人だけが気付かない  
魅力ある女は風になりましたが

川柳塔唐津  
久保  
正剣報

カズ子  
よし子  
信子  
秋子  
勝巳  
耕治  
美代子  
義芳  
孝一  
正治  
美龍  
諷云児

知恵がつき先ず母親と勝負する  
庭の秋姿を見せた尉鶴  
陽当りが良くて水柱は住みにくい  
ハナハトは古い遺物と葬られ  
どぶ川に入水志願の虎と鷹  
ボール投げ壁が相手の転校生  
I Tに疲れてオゾン吸いに出る  
手を出せば生命線を褒めてくれ  
メルヘンは翔んでる母の背から消え

### 川柳塔鹿野みか月

土橋

三猿に懂れながら生きている  
大と猿どっちもどっち妥協せず  
年を経て娘生家へ来なくなり  
傷口を癒して猿も和む知恵

螢報  
永子  
八重  
武子  
富久江

肩書きがついた我が子に感謝する  
肩代り誰が苦勞をしってくれる  
五十肩くるくる回し調子取り  
肩くずれ土台の脆い天守閣  
五回目の申年飛躍してみよう  
フラッシュの覇者の涙に歓喜舞う  
鉛筆が折れて不吉の予感する  
どうしよう溺愛の鯉ヘルベスだ  
父さんの肩の荷おろす日が来ない  
肩意地を張るのはよそう好かれよう  
肩書きを並べ寄附帳空けてある  
落選の肩をたたいて慰める  
夢ばかり追う子へ肩の荷がおりぬ  
三猿の教えに背く事はかり  
猿よりも下手な夫婦の猿芝居  
柿とりは申歳生まれお爺さん  
統率力猿に学べばどうですか  
どの子にも愛あふれてる母の池  
歳だなあ仕事せんのに肩が凝る  
腕に乗る両肩銃は担がせぬ  
ありがとう小さくなった母の肩  
貸すための肩は準備が出来ている  
一日中傍にいるから肩がこる  
肩で息しても旅びと続けている  
さむらいの肩から抜けてゆく野心  
月を見ているうしろから肩を抱く

八尾市民川柳会  
天の声地の声皿の割れる音

宮崎シマ子報  
美代子

八重子  
かおる  
保子  
みどり  
茶子  
弘子  
幸枝  
睦子  
汲香  
実満  
久枝  
くに子  
房子  
節子  
はるお  
公子  
彩子  
喜与志  
孔美子  
菊乃  
盛桜  
和子  
諷人  
美恵子  
螢



合健の一つは老母と会う絆

紙鉄砲パンと一発ウツ弾く

人許すシナリオになる雨上り

横向いて素知らぬ顔の阿弥陀さま

晩学の秋の音符がかしましい

切り返す言葉にユーモアを飾る

飾り気の何処にも見せずありつたけ

粉飾もあつて金婚の帳尻

ひとすじの終章飾るいい笑顔

飾り気を盛らぬ親父にある威厳

引き際を飾る言葉をつまらせる

飾りみな外し恩師の葬列に

飾る気は持たず心はさくら色

入れすぎた養銭願ひ追加する

板長のポリシー追加させません

もう一つおまけしまひよと買わされる

女子でできるまでは追加の子沢山

陰膳で母が祈っている無事故

列があると故なく並ぶ癖がある

ロボットが休暇を取っている故障

年金の元とするまでは死にません

故あつて美人は避けて飲んでます

故ありの品にむらがる大バーゲン

何故の反旗トップは声をのむ

しこたまにめかして出かける先もなし

億ションに住んで借金王だった

南大阪川柳会

吉川

寿美報

いつの日も子母来る日待つ母港

遠野

弥生

加津子

シマ子

弘直

昌子

ますみ

春蘭

巳代一

民

はじむ

宏至

幸生

きよみ

欣子

菜月

きらり

柳伸

欣之

ダン吉

庸佑

東雲

一風

頂留子

とみを

幸美

森子

北の船来るたび辛い拉致家族  
何冀と頑張る君に惚れました

飄飄と生き何冀に縁がない

何冀と飲めぬ男のいっき酒

何冀と思わなくなり日向ぼこ

何冀の汗が滴る父の顔

何冀と力めば夜叉の相になる

両親をうんと言わせたこの熱意

とうとうとわが熱弁に酔っている

発熱へたらひ回しの救急車

熱さめてたのおかめとひよつこで

熱さめたおもちの幕場子供部屋

計ること出来ない熱を持っている

熱こめて喋るとインチキ臭くなる

熱愛もいつかはさめる雪うさぎ

泥沼で凜と主張を曲げぬ蓮

一言のシコリが胸に沼を待ち

罰あたり荷物にするな神の声

荷物持ちアリガトうれしボランテア

荷造りをされて花嫁出来上がる

小荷物に老母のいびつな温い文字

郵政のライバル飛脚もベリカンも

お荷物になりたくない一人住む

一枚の辞令で重い荷を背負う

お荷物になって絆がゆるくなる

核という荷物に難儀するヒト科

寝つきいい妻のイビキが憎らしい

ねつさめた夫婦でとても仲がよい

熱三日夫が炊いてくれた粥

なぎさ

三男

ひさ乃

章久

シマ子

雅文

志華子

頂留子

庸佑

弘泰

たもつ

直子

アキラ

萬的

千里

柳伸

柳昌

千梢

日出子

時弘

憲太郎

柳弘

美花

重人

珠美

ダン吉

明正

東雲

寿美

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

へんてこな妻を相手に日が暮れる

神風というへんてこなもの信じ

はた目には見えるへんてこ大真面目

へんてこの世に生き方を問うてみる

へんてこな個性は老いて強くなり

上役を脅にすればうまい酒

並ぶのがお好きバーゲンいそいそと

いそいそと遊ぶ計画なら速い

川柳塔まつえ吟社

津川

紫晃報

秋の天手品師が住むそれは神

信号を赤から青にする手品

手品師の顔で心を盗む技

手品師の帽子が欲しい年の暮れ

父さんの手品の種が透けている

手品師が鳩を出さずにひよこ出す

隣の娘年頃見頃玉の輿

お年頃フアツションショーに夢を見る

青春の門越スピードで走り

年頃を気づかう母の痛い胸

次男は養子長男には嫁がない

赤シャツが似合う年頃まだ六十路

健康の証人間ドック入り

雑草も生きてた証実らせる

ストレスの証が並ぶ終電車

にんげんの証が笑い止まらない

どのように生きたとしても紙オムツ

弘直

シマ子

能子

香住

加津子

あずき

慶子

欣史子

喜美子

螢

スズコ

玲子

治代

畔

注湖

幸子

蘭

房子

茂美

浜丘

小生

邦代

ちえこ

圭詩朗

義良

辻褃を合わせる紅葉ひとひらに  
わたくしを演じたい師い葉  
ブラチナをとると身軽な葉指  
傷ついた空に葉を塗るジェット  
死ぬるまで飲めと貰っている葉  
ゆつくりと話したのがいい葉  
笑つてる声を聞くのいい葉  
お座りが出来たと嬉しい電話口  
反省のポーズ座禪を組んでいる  
神棚に座って困る神が居る  
後列に座り逃げ道考える  
座りなおして名案がふつとわき  
がらくたの中に座っている安堵

# 川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

手を握るだけで喜ぶ母を見る  
一度切りという人生のミステリー  
メル友に昨日と違う彼が出る  
病院の丸椅子ととてが溜まる  
身の丈の母の介護に家族の手  
手の鳴る方を見向きもしない天邪鬼  
あの手この手があるこの世は面白い  
隙間から欲が零れる私の手  
あの手この手口説いてみたが袖振られ  
太陽に昨日の嘘を見抜かれる  
昨日から妻の無口がまだ続く  
追憶は昨日のようにかけぬぐる  
昨日の余韻まださめやらぬ舞扇  
インスピレーション昨日の轍を踏ませない

多賀子 日出子 久枝 芳山 秀子 静恵 町紅 政子 昌枝 昭二 桂子 知恵子 紫晃 保州 輝子 英子 あき子 和香 三男 順子 大輪 佐一 優子 美子 和 紀久子 富美子

ベテランに昨日を積んだ味がある  
午前0時昨日生まれた事にする  
秋深し昨日の手紙胃に溜まる  
昨日読んだマリーフィアの書に湧くガッツ  
ところだと聞いて騒いだ脳細胞  
降りる駅すぎたところで目を覚ます  
ところでと膝突き合す頼みごと  
地球儀を回せばどこもミステリー  
男の胸に想い移したミステリー  
秘中の秘がたやすく漏れたミステリー  
ミステリー作家自身がミステリー  
秋空も女心もミステリー  
ミステリー悪い噂は即流れ  
秋風にふところ寒いミステリー  
母さんの予言が当たるミステリー

# 川柳工スボ

山本

三郎報

子育ては投資信託とも思う  
見返りの期待は抜きで投資する  
公約のシナリオ過去へ置き忘れ  
シナリオを書いて希望の夢を抱く  
恋のシナリオ赤紙一つで断ち切れ  
人生はシナリオ通りにいかないよ  
シナリオに振り回されている家族  
年重ね日々錯覚の戦いを  
いつまでも心に残る師の言葉  
先生も弟子も傘寿の趣味の会  
ああ天国妻の至福は仕舞舞呂  
天国に縁のない身と悟つて

正博 豊太 稚代 泰子 和子 和重 ち子 寿子 鉄治 三喜夫 克子 よしこ 太茂津 緑良 高栄 さち子 一幸 ゆき子 とよ子 星花 とし子 文子 任宥 三郎 団地 一炊

天国は誰もが望む夢の郷  
天国で来いよ来るなと母は言う  
長崎の鐘天国に届けたい  
目が合つて告白かなと錯覚し  
錯覚をたしなめてくれ仲直り  
錯覚は拍手打った寺参り  
天国の夫を呼び出し七回忌  
自己投資不況で資格が泣いている

# かわはら川柳会

上田

俊路報

老いてゆけばかりじや知恵も湧いてこぬ  
知恵袋開けすぎないで控え目に  
学校で教えてくれぬ生きたる知恵  
これからは亀さんの知恵借りて生き  
大家族知恵も沢山もち合わせ  
年金で豊かに暮す知恵しほる  
逆境も不信も越えた知恵を積む  
時うつりやはり鉛筆主役です  
6Bの旅続けたいいつまでも  
鉛筆の芯から学ぶ処世術  
鉛筆を転ばし明日の運を読む

# サークル檸檬

西出

楓案報

一斉にかけ声山を動かそう  
信心で登る石段とっこいしょ  
草津節輪になり囃すどっこいしょ  
どっこいしょバスに乗るにも降りるにも  
命残照いまを楽しむことにする  
除菌してどこか私さが抜ける

みさと 政雄 昭一郎 れい子 ルイ子 三峰 はつよ さとし 余吏子 かず恵 好道 悦子 雅子 登生 泰良 道子 寿子 聰 俊路 希久子 あずき 千代 正坊 義子 保子

もろもろを脱いで決心つきました  
ドッコイショ口癖となり秋深む  
独り居の誰はばからぬどっこいしょ  
一日の終わりを告げる空の猪口  
がつぷりと老化和組んでどっこいしょ  
まだ欲があるから今日もどっこいしょ  
ひとことこのうまいエブロン癒やされる

# はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

憎まれ口出る病室にホッとする  
安心の終身雇用ゆるぎかけ  
信用してます安心しています  
銀行に小さな金庫かりてある  
安住の場所でなかった蛸の壺  
高速の下はすいすい流れてる  
高速代熊から取れず大赤字  
高速化そんなにせいて何をする  
高速の中で季節を見失う  
過疎地にも利権で走る高速道  
叱るのに逃げ場をつくる親心  
厚化粧逃げる若さを追いかける  
ややこしい話は逃げることにする  
逃げ道を作っておけば噛まれな  
責任を逃げる男の及び腰  
逃げ上手後にしこりを残さず  
逃げ道を考えているコップ酒  
逃げるなど遠くで母の音がする  
容疑者がこっそり降りた無人駅  
お迎えが来たら一目散逃げる

房 子  
みつ子  
楓 楽  
遠 野  
たもつ  
光 久  
いわゑ  
泰 子  
フジ  
敦 子  
みつこ  
庸 佑  
耕 策  
章 司  
悦 子  
遠 野  
喜久子  
一 知  
昭 平  
一 壺  
敏 昇  
吐 来  
ダン吉  
重 人  
いさお

来年の鬼が逃げずについてくる  
ムードより安価な店が性に合う  
二次会に和むムードに弾む酒  
淋しくて昔のドレス着ています  
秋冷えに熱帯ちびり良いムード  
音楽会ムードをこわす高軒  
ムード料高いですよ深い椅子  
いいムードとなった所で鳴る電話  
ムードには酔ってられない風見鶏

## むらくも川柳会 毛利

民主伸び小泉神話翳りあり  
人生は転んで分るいばら道  
腕自慢基敵だけど仲がいい  
何ひとつ自慢ないのが自慢かな  
七転びしても八起きの時を待つ  
食欲も不作で少し心得る  
生き生きと筆走り行く手紙書く  
ラジオから私の指針もらいます  
菊花展想い出たどる在りし日を  
タイガース感動もらい秋深む  
幼子の澄んだ瞳に癒される  
古里にそろう笑顔のなつかしさ  
太陽を食べた野草で生き延びる  
そこ力うまくチャンスを生かしてる  
冷夏でも家族の絆温かい

## 川柳塔きやらぼく 福代 天雀報

美代子  
専 平  
たけし  
昭 子  
真 一  
志 洋  
桂 子  
久仁子  
りつえ  
幸 彰  
幸 報  
秀 幸  
信 夫  
定 子  
明 朗  
安 男  
ふさえ  
寿  
昭 子  
八重子  
ます美  
恵美子  
美喜子  
ツル子  
春 枝

下駄箱に靴が王座を占める現代  
空高くUFO来いと子ら叫ぶ  
米子よいとこ夜景まばたくバスの旅  
バランスをとって小出しもある妥協  
待つ人はいないのんびり里帰り  
お元気が声かけられて誰でしょう  
つわぶきの花変らない味がある  
しずやしずコスモスの舞い素直なり  
テレビばかりボケを促進するおそれ  
白足袋をはけばすつくと立てそうだ  
しきたりや村がふくれる秋祭り  
辻褄を合わせ合点する怖さ  
視線落さずお洒落忘れずいざ街へ  
仰ぐ星心を持って迷わない

痛いくところへいつでも波が寄ってくる  
白露すぎ朝の便座に秋を知る  
ふるりのぬくもり大きな荷が届く  
情のない言葉に踵翻す  
娘のコール私の中がいやさされる  
秋の天袋も秋の顔になる  
いつもの甕に新しい水みなぎらす

## 川柳塔みちのく 小寺 花峯報

炎天に球児の汗は乾かない  
ぐずぐずへ爛額玉が飛んでくる  
ポーナスへもたれる甘い花の首  
暴れ泣くおもちゃ売場の根気負け  
甘いもの悪いと知りつつ手がのびる  
ぐずぐずとしてる内に一句出来

八重子  
寿々子  
瑞 枝  
ふ み  
紫 泉  
天 雀  
田 鶴  
満  
てい子  
富美子  
すみえ  
恵 子  
弘 子  
な み  
すみこ  
清 人  
や え  
初 枝  
玲 子  
日枝子  
千 代  
あすなろ  
しげる  
きよし  
ヒサ子  
準 人



年金の尺度で先を読んでいる

行楽の秋に先立つ物が無い

先の先より大事なきよう明日

先さきのことより今日の握り飯

煌めこう明日のことはわからない

私のために煌めくお月さま

煌めいた過去の夢見る社長印

玉の汗煌めく額勝ち名乗り

ライバルの煌めき負けたなと思う

オール5の煌めき母を待つている

煌めいた昔時々撫でてやる

雑魚なりに煌めく夢を抱えている

作品に煌めき見えて人しのぶ

生きたいと今安部さんが煌めいて

何事もたとえがつくと長くなる

### 川柳クラブわたの花

吉村

### 一風報

病む身にはうれしい友の詩をよむ

合唱のなかに私の声がある

事故現場花やドリントク絶え間なく

一言を添えて送った秋の味

パソコンに調教されている十指

政治より野球の方に気を取られ

クラス会変ってないと鍛同士

帰らねばならない土に還るだけ

農夫より立派な服を着て案山子

晩酌も妻の気分が目減りする

日記にはいい日だったと飾り文字

若い気であたら小石に蹴つまずく

白髪にはのかなしみ漂わせ

忠良

公乃

節子

節子

石花菜

完司

重忠

孝男

一瑤

静生

一粹

裕子

照子

菖子

美恵子

舞妓の飾り紅葉に変わる京の秋

故里を隅に追いやる新興地

空古をうめるつもりがからまわり

もう一本妻の機嫌が好さそうで

指をまわしてとんばを捕つたことも

宝石をつけた妻みてごまをする

百歳の笑顔の裏にある歴史

駄だつ子を笑顔で諭すママの勝ち

平凡な幸せ熱い茶がうまい

後れ咲き精いっぱい愛こめて

大胆なベンが泣き事言うてくる

朝顔の紺が海辺の母を訪う

政策より勝つことだけの選挙戦

減量と頭で理解手は他人

大宛に獣医さんから来るハガキ

歳をみて禁酒せよとは言わぬ医者

長寿国追加の人生謳歌する

### 川柳塔おとしり

### 原みさを報

これからの日本を担う歩き初め

これからは背負う茶髪を信じよう

これからは妻と二人でお湯巡り

すばらしい国になりますマニフェスト

これからの世界どうなるどう生きる

これからは大一番の死を迎え

還暦へこれから学ぶことばかり

スランプを抜ける喜劇を組み直す

喜びの席だ一本提げて行く

八重子

はじむ

道子

宏至

ミツ子

キク子

君江

宏

一風

きらり

欣子

幸枝

晴美

俊子

恭一

奈良司

浩三

正純

喜びも辛さも別の夫婦船

喜びを分けあう人もなく暮れる

喜びも辛さも抜けた数の数

一滴の酒喜びと悲しみの

喜寿越えて心豊かに灯をとす

喜びが顔いっぱいランドセル

老いた今友の癒して喜々と生き

すばらしい夕陽乾杯してあげる

乾杯をしたら許してあげましょう

おめでたい酒だ乾杯高らかに

乾杯を重ねて人は円くなり

乾杯へ美酒も涙もこぼれそう

感激に思いが溢れゆらぐ杯

乾杯で別れ学び倉後にする

乾杯して仲よしこつこまだ続く

### 尼崎いくし川柳会

### 春城武庫坊報

果物好き亡夫に供える柿りんご

もうよりもまだまだを乞うこの余生

悪い予感呼ばれた椅子に浅くかけ

百歳も夢でないよな予感あり

逢えること信じ迷わぬ吾亦紅

いい予感うそくの灯がゆるがない

縁側で抹茶を飲んで初デート

お守りも十字架も持ち旅の空

百寺巡礼紅葉を知らぬ寺はない

残り時間花野ゆつくり歩きたし

河馬の眼と眼が合った冬の動物園

激辛カレー寂しさを少し消す

野草

風花

清子

黙光

登美

一弘

道子

孝子

登

由多香

以和方津

艶子

庸二

小生

みさを

正子

東園

しづ子

幸子

年代

久子

昭三

寛之

勝巳

武庫坊

光穂

和子

パソコンのない朝はどてつと馬面  
不揃いの柿が届いて甘い追伸

### 倉吉川柳会

竹信

照彦報

米びつの穀象虫を選っていた

果物を地産地消で子に送り

頂点にたてば保身にみな変わる

チヨキちよきと剪定うれし青い空

たったこれだけの中からスカ選ぶ

天気のリズムうまく使つて土耕す

百年の梅干保つ陰の技

菅飯店小泉飯店いい匂い

選んではくださいますな区長には

選ぶほど理想に遠くなる焦り

火の車平静保つ母が居た

メロンには目の無い孫の食べつぶり

道端の無花果喉は手が出そう

夕焼けの彼方に明日が見えている

貧乏に耐えて続いた三代目

選ばれた林檎が化粧してもらう

いい天気尻尾まるめて昼寝する

O型の妻が保つている度胸

福袋大を選んでたわし五個

死ぬもんか若さを保つ朝あるき

梨柿も秀優良と選ばれる

じいちゃんの天気具合で無心言う

母と娘の縁保った五十年

魚屋で変な果物売っている

日曜日天気で妻に指図され

薫 芳子

和子

日出子

萩江

喜美子

玲坊

勝誉

ゆり子

石花菜

重忠

喜美子

龍枝

康子

玲子

十三男

螢

よしえ

きみ子

睦子

和枝

季芳

瑞子

幸子

克枝

次男

かつみ

天気情報海に夫のいる限り  
コーヒーが旨い空にはいわし雲

軽妙なバランス保つやじろべえ

面目をつぶさず来たよ八十半ば

父親の権威辛掘りして保つ

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

どの神が命的を嘉するや

ピストルも核も自由な民主主義

ピストルが鳴ると倒れるエキストラ

ピストルで殺したいほど好きやねん

虚の世界だけにピストル封じ込め

勇気など出さんでもすむ老いの日々

あとはあと内部告発する勇気

勇気出し渡る吊り橋下見ない

過ぎし日の勇気を偲ぶ疵のあと

プロボーズ勇気が要つた今の妻

母ちゃんの勇気に支えられ手術

音信の跡絶えた久しい友思う

いくばくの命へ今日も歯をみがく

嬉しさも淋しさもある子の巣立ち

どちらにも言い分はある風のいろ

生きたとは越えねばならぬ水たまり

天国は我が家にあつた仕舞風呂

ピストルを握る竜馬のふところ手

鉢箱へ母は思い出たためて老い

おだてられつり乗りました口車

Gパンがバックに化けた老いの腕

世渡りに片方ばかりちびる靴

忠 良

雄々

悠子

志郎

照彦

千津子

見清

正坊

都代子

巴子

寿美子

英子

タミ

郁子

則彦

庸佑

慶子

蛙

求芽

重人

高栄

石舟

メ女

萬的

知香子

満寿巳

同期生顔でわからず癖で知る  
久しぶり会えど声なき別れかな

抜き打ちのコルトのような言葉来る

ふくべむら川柳

村上 信子報

霜ふりのステーキ不況ぶつとばせ

高鳴きの百古初霜を連れて来る

恋人と言われた友の訃報を聞く

妻あつて変人難なく世を渡る

子は巣立ち送るホームでほろり立つ

王子役孫の演技にほろりする

宅急便で霜ふりと牛届けられ

ほろりばろりドラマの中にいるかあさん

川柳藤井寺

高田美代子報

王子焼大鵬巨人今いじめ

好き嫌い言つてるうちが華なのよ

芋タコ南瓜好きで昔の女です

好きな子の方へ漂うしゃばん玉

好きだなあすぐに真つ赤になる若さ

夫には済まぬが買値安く言い

ゼロ一つとつて夫に告げてます

大漁のサンマ三日も膳に載り

安いはず賞味期限は今日限り

虎の威を借るバーゲンが大はやり

限定の五名に走る市場籠

あの人が着ると高値な服になる

半日で足を噛まれた安い靴

玲子

久太郎

啓生

静子

昭恵

つね

信子

操子

和甫

春恵

寛子

武義

善之助

昭子

一筒

扶美代

喜代子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子

喜久子



バーゲンの品で足りてる家の中  
晴れ晴れと手とり合えるチャンス待つ  
仲直りのチャンスにしよう券二枚  
復活へチャンス下さいもう一度  
声掛けてもらって今のボクがある  
不慮の事故チャンス逃したバスポート  
結婚のチャンスも逃げる高い鼻  
発言のチャンスねらっている無口  
挽回のチャンス私を賭けている  
二の足を踏んでチャンスを取り逃がす  
仕合せがそこにあるのに気が付かぬ  
車間距離妻が空気になつてくる  
平凡に過ごした今日に感謝する  
ソクラテスになれずエリート消えてゆく  
暇人があらぬ噂を撒きに来る  
赤ちゃんが来たので今日はお祭りだ

# 翠 洋 会

## 六 吹 尚 士 報

記憶力たれずメモを取つておく  
記憶にもない事言われうろたえる  
フィクションも少しまじっている伝記  
記憶する機能つづれたケセラセラ  
惚けぬうちに記憶のコピーとつておく  
階段の途中で消えていた記憶  
今日の予定たてるにまずはテレビ欄  
テレビ欄まずチェックする老父の朝  
じいちゃんがテレビと喧嘩しています  
新居には液晶テレビ買いまつせ  
ワイドショーに夕餉のメニュー指示される

絹歌 栄一 香代子 悦子 みつこ 雅枝 耕策 六点 アキ 鐘造 春蘭 重人 庸佑 かつみ 史郎 瑠美子 尚士 尚士

お茶の間でオーロラを見るテロを見る  
人生に間合い丁度の雨や風  
いいことが降つて来そうな秋の空  
降りしきる雨に寡黙なひと日なり  
どしゃ降りや駈けた男と嵯峨豆腐  
青テントやさしく冬日降り注ぐ  
忘れたい歳を役所が念を押す  
マツタケを焼いて一人を淋しがり  
似た過去を持つがその後が大違い  
修羅いくつ金剛杖に遍路笠  
ベランダで咲いた菊です仏さま  
男同志言わぬが華のこともある  
日本語に直せば説明などいらぬ  
ユートピア探す私だけの地図  
馬鹿にすな顔に似合わぬ知恵がある  
人生は演歌でんなあそうでんな  
飯の世ときどつてしかし旨い酒  
好きなどこ話す友いて日々満ちる  
石橋を叩き過ぎれば入るひび

# 堺 川 柳 会

## 河 内 月 子 報

盛装のゆとりを見せる女です  
弱いの無理強いされりや断われぬ  
冷やかに好きにしたらと妻は言う  
冷える日も命ゆつくりふくらます  
株あがるチャンスが来たが金が無い  
無駄だとは思ふが走ることにした  
無理をして余計に世話をかけました  
無いものは知恵とお金と若さだけ

みつ子 孝一 舞夢 蛙 富子 久峰 照子 日の出 正雄 千梢 志華子 恭昌 千歩 美籠 東雲 良一 真理子 さと美 理恵 春蘭 忠敬 泰子 篤子 朋月 月子 かりん 小雪

# 長 柳 会

## 西 山 幸 雄 報

少年のサイン見逃す無関心  
見たことの無い一億というお金  
冷やかたに顔で示さぬ場をはずす  
仲直り少し冷えた夜がよい  
今朝の冷え熱いお茶です仏さま  
迷いなく鍋にしました今日の冷え  
延命は必要ないとメモしとく  
一文字の白眉の父の舞姿  
絵手紙で人にやさしいメッセージ  
えんえんと羊数えて目が冴える  
縁あつて人もうらやむ夫婦仲  
冷えた手を温めてくれた亡母の肌  
帯きゅつと締めて女将の貌になり  
雑魚だって無欲ではない夢がある  
ウエストに無理なスカート押し込める  
偉そうに髪生やしての召し使い  
三つ指をついた和服に化かされる  
婆ちゃんを着物ちやつちやと着て出かけ  
疲れ取る妙薬と決めた無の祈り  
底冷えの空にキラキラカシオペア  
無党派のご機嫌を取る選挙戦  
パソコンで喋りまくっている無口

鐘造 (矢)五 時雄 扶美代 叔子 つづや 梓 冬虹 深雪 千代 なぎさ 恵勇 好 りつえ さくら 楓 半銭 公誠 龍三 八千代 文 幸雄報 ひろし 芳野 武男 淳司 たけし

あどけない顔していつか背くなり  
故里に背きひとりの蟬しぐれ  
人生模様背き背かれ綾を織る  
泣くチャンス逃がして負けた口喧嘩  
泣かないと決めて仰いだ青い空  
はがらかな笑顔にかくす嫉妬心  
秋時雨一期一会の恋に泣く  
限りある命余生ははがらかに  
忌中はがきはがらかだった人惚ぶ  
言いつけに背いて遊ぶランドセル  
泣けなくて心の棘が流れない  
はがらかに集う同志喜寿生きて  
糟糠の妻に地雷を仕掛けられ  
背く子に母のくぐり戸開けて待つ  
母親を見て泣き出した迷いっ子  
涙腺の脆さ天下の秋を知る  
はがらかに鴉はうちの屋根で鳴き  
少々なこと泣かなくなつた妻

輝子 和代 三和子 史 正美 敬二 英美 富美子 靖男 良男 正一 和一 けい子 潤子 直子 正子 幸雄

### 第23回 横浜川柳作家賞

『自由吟』2句 3人選

鈴木柳太郎・後藤洋子・瀧正治選

『課題吟』1句 3人選

堀井勉・高橋里江子・荒井広和選

賞品 自由吟・課題吟共に3位まで名前入り楯

締切 2月10日(当日消印有効) 参加費 千円

投句方法 葉書大用紙に自由吟・課題吟別2句連

記(記名の上、投句料と共に送り下さい)

送り先 〒240-0043 横浜市保土ヶ谷区坂本町100-1 506

横浜川柳作家賞係 藤原和美宛

### 西宮北口川柳会三十周年

#### 記念川柳大会

とき 平成16年3月27日(土)

午前11時半開場・出句締切午後1時

ところ 西宮市民会館1階 大会議室

西宮市六湛寺町10-11

(電話0798-33-3111)

お話し 川柳塔社名誉主幹 橋高 薫風氏

課題と選者(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

「神」事前投句 川柳塔社 黒川 紫香選

(披講 奥田みつ子)

「艶」 川柳塔社 西口いわゑ選

「無心」 川柳塔社 西出 楓葉選

「根」 時の川柳社 小松原爽介選

「平和」 ふあすと川柳社 泉 比呂史選

「ひととき」 番傘川柳本社 森中恵美子選

「チャンス」 川柳塔社 河内 天笑選

会費 2000円(軽食・記念品 発表誌呈)

事前投句締切 3月1日(月) 必着

懇親宴 大会終了後「華宮」にて5000円

投句先及び連絡先 〒663-8202

西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ

(電話0798-67-3740)

主催 西宮北口川柳会 後援 川柳塔社

主催 西宮北口川柳会 後援 川柳塔社

### 第80回大阪川柳の会

日時 2月4日(水) 午後5時開場

会場 サンケイビル本館3階322号室

宿題 「しんどい」 杉森 節子選

「急所」 小松原爽介選

「逃げる」 河内 月子選

「守る」 磯野いさむ選

各題2句 席題なし

締切 午後6時 会費千円

賞状 産経新聞社から秀句に賞状

欠席投句 2月3日到着分(会員のみ)

会員登録 年千円 会報年6回送付

### 第32回瀧明賞作品募集

応募作品 近詠2句1組(1人1組新作に限る)

応募料 1000円(定額小為替・切手可)

※但し「噴煙」会員は無料

締切 平成16年1月31日まで必着

応募用紙 所定の用紙または葉書大サイズ用紙

選考委員 吉岡龍城・田口麦彦・橋本比呂

大場可公・吉岡茂緒・平田朝子

選考・表彰 無記名清記の上、選考委員に

賞。次点以下10名を佳作。

発表 千802熊本市南熊本4-2-15

応募先 川柳噴煙吟社「瀧明賞」係

(電話096-364-4011)

主催 川柳噴煙吟社



# 高野山合祀法要

於・高野山大霊園

十一月八日、この日お山は暖かでした。

十四年度合祀者は浦辺静江 野田素身郎 権代康女 越智一水 石原靖巳 高須賀金太 山門幸夫 酒井輝 西沖彰雄 松本ただし (以上敬称略) の十名の新合祀者。遠方から御遺族四名と本社関係者や、ゆかりの方々で参加者は十九名でした。

初参加の緊張感も、たもつさんの細かい御心遣いで解けました。これぞ聖地という場所にある川柳塔の碑を見た途端、写真より立派で身も心も引き締まる思いになりました。

合祀祭は、厳粛の中に合祀者のお名前が読み上げられ、焼香・合掌にお世話になった方の名句が思い出されました。あの方この方のお元氣な頃のお姿が浮かんで、みんな身内のように家族の法事と何ら変わりません。碑文にあった「川柳を話し合える絆」に強く心打たれました。この碑は川柳界で慰霊碑の先達とのこと、自慢しましょう。

法要後は比呂志さんの案内で奥の院へ。好天で大勢の参詣客でした。説明を受けながら歩く・廟までの道は、心洗われる森林浴で、帰りのバスの時間を忘れるほどでした。

先輩が先輩にとっても優しい川柳界です。先輩の皆さまどうぞ安らかに眠り下さい。

お供拝受(敬称略・順不同)

坪井孝一

高須賀真人・野田昭子・山門タミ



参列の皆さん(岳人写す)

明けましておめでとうございます

## エイシス堺

講師 河内天笑

|       |       |
|-------|-------|
| 泉谷喜代子 | 高木世紀子 |
| 稲川恵勇  | 津守なざさ |
| 榎本日の出 | 富山ルイ子 |
| 榎本舞夢  | 中澤伽羅  |
| 大久保伸子 | 中野健吾  |
| 奥時雄   | 西内朋月  |
| 荻野象山  | 樋口冬虹  |
| 河越みよ子 | 升成好   |
| 河盛龍三  | 村上玄也  |
| 源田八千代 | 矢野梓   |
| 小寺竜之介 | 和田つづや |
| 齋藤さくら |       |

謹 賀 新 年

# 川 柳 塔 社

| 名譽主幹    | 主 幹     | 理 事 長   | 副 主 幹     | 副理事長    | 常任理事    |       |         |         |           |         |         |           |         |
|---------|---------|---------|-----------|---------|---------|-------|---------|---------|-----------|---------|---------|-----------|---------|
| 橘 高 薫 風 | 河 内 天 笑 | 板 尾 岳 人 | 奥 田 み つ 子 | 波多野 五樂庵 | 小 島 蘭 幸 | 前 たもつ | 石 森 利 昭 | 籠 島 恵 子 | 木 本 朱 夏   | 鶴 田 遠 野 | 藤 田 泰 子 | 松 原 寿 子   | 山 本 義 子 |
|         |         |         | 仁 部 四 郎   |         | 西 出 楓 楽 |       | 大 内 朝 子 | 河 内 月 子 | 高 田 美 代 子 | 長 浜 美 籠 | 坊 農 柳 弘 | 山 本 希 久 子 | 米 田 恭 昌 |

川柳塔社常任理事会

明けましておめでとうございます

## 川柳塔わかやま吟社

|      |       |      |      |      |       |      |      |      |       | 顧問   | 副主幹  | 主幹 |
|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|----|
| 澤田和重 | 坂部紀久子 | 坂口公子 | 小山太一 | 乗原道夫 | 柿花紀美女 | 柏原優子 | 小倉アサ | 内田結実 | 野村太茂津 | 川上大輪 | 牛尾緑良 |    |

|      |      |      |      |       |       |      |       |      |      |      |       |      |      |
|------|------|------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|
| 福田和子 | 橋爪佐一 | 中嶋正怜 | 中島清史 | 中井榮美子 | 堂上泰子女 | 富上光代 | 天満三千代 | 寺田裕美 | 玉井豊太 | 谷口信和 | 谷村あき子 | 田中輝子 | 杉山精子 |
|------|------|------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|

|      |      |      |      |      |       |       |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|
| 会員一同 | 和田良一 | 横垣忠翁 | 山西佳子 | 森下順子 | 宮本三喜夫 | 宮園射月芳 | 宮口克子 | 松原寿子 | 松尾和香 | 堀端三男 | 堀富美子 | 細川稚代 | 福本英子 |
|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 方

TEL 073-446-2855

# 献 壽

平成 16 年

## 川柳塔鹿野みか月

第23回“みか月”記念大会には第一部・第二部とも全国の皆様から温かいご支援を賜りました。大きな感謝です。

本年は第24回記念&市町村合併記念大会（予定）の年です。旧に倍して皆さんのご支援ところよりお待ちしております。

|      |     |     |     |     |     |     |     |          |     |           |    |           |     |          |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----------|-----|-----------|----|-----------|-----|----------|
| 奥谷   | 太田  | 大角  | 大角  | 岩崎  | 乾   | 石尾  | 小倉  | 顧問<br>小倉 | 土橋  | 相談役<br>土橋 | 中原 | 副会長<br>中山 | 森山  | 会長<br>盛桜 |
|      |     |     |     |     |     |     |     |          |     |           |    |           |     |          |
| 彩子   | 幸枝  | 正道  | 幸代  | みさ江 | 喜与志 | かつ乃 | 利男  |          | 螢   |           | 諷人 |           | 盛桜  |          |
| 土橋   | 徳岡  | 津村  | 田村  | 谷口  | 田中  | 竹森  | 高原  | 児嶋       | 黒田  | 久野        | 国森 | 加藤        | 加藤  | 鹿児島      |
|      |     |     |     |     |     |     |     |          |     |           |    |           |     |          |
| 睦子   | 本丸  | 八重子 | きみ子 | 百合子 | きみ江 | 富久江 | かおる | 保子       | くに子 | 野草        | 武子 | 永子        | 公子  | 節子       |
| ほか   | 若林  | 吉田  | 吉田  | 横山  | 山根  | 山根  | 山口  | 山岡       | 福西  | 原田        | 西川 | 永原        | 中原  | 中原       |
|      |     |     |     |     |     |     |     |          |     |           |    |           |     |          |
| 会員一同 | みどり | 弘子  | 孔美子 | 房子  | 八重  | 立亥  | 実満  | 久枝       | 茶子  | 菊乃        | 和子 | 奈津子       | みさ子 | 汲香       |
|      |     |     |     |     |     |     |     |          |     |           |    |           |     | 土橋はるお    |

※事務局：〒689-0405 鳥取県・鹿野町鹿野1279 中 原 諷 人 方  
電話 & FAX (0857) 84-2100

新年おめでとうございます

# 西宮北口川柳会

おかげさまをもちまして、3月27日(土)、30周年  
記念大会を開催いたします。どうぞご参加下さい。

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館  
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西 口 いわゑ

---

川 河 亀 門 小 小 奥 奥 岩 石 井 浅 秋 阿 黒  
島 井 岡 谷 倉 熊 村 田 倉 原 上 野 元 萬 川  
諷 庸 哲 た 藍 江 五 み キ 歳 松 房 てる 萬 紫  
云 佑 子 子 美 月 子 ク 子 煙 子 的 香  
児

竹 田 田 田 住 坂 酒 小 黒 蔵 久 木 菊 神 北  
内 辺 中 中 谷 上 井 池 田 保 村 池 原 野  
満 鹿 正 章 石 高 利 し 能 光 千 貴 ト 文 哲  
寿 太 坊 子 舟 栄 子 お 子 子 代 ミ エ 男  
蔵

吉 吉 山 山 松 牧 古 藤 長 西 西 長 富 都 坪  
武 田 本 崎 下 渕 川 村 谷 田 口 浜 山 倉 井  
絹 良 義 比 富 奮 ヶ 川 春 柳 い 美 ル 求 孝  
恵 子 志 喜 水 女 蘭 宏 わ 籠 子 芽 一

明けましておめでとうございます

平成十六年 元旦

## 会 柳 川 堺

河 河 川 奥 荻 大 大 太 榎 榎 岩 岩 稲 石 泉 河  
盛 内 越 野 橋 谷 田 本 本 田 崎 川 堂 谷 内  
龍 月 み 時 像 鐘 篤 扶 舞 日 明 公 恵 潤 喜 天  
三 子 よ 雄 山 造 子 美 代 夢 の 出 子 誠 勇 子 子 笑

半 中 中 中 中 中 中 德 寺 津 高 志 齋 小 源 神  
井 村 野 澤 崎 川 井 山 井 守 木 田 藤 西 田 原  
醉 忠 健 伽 深 ア み 東 な 世 千 さ 小 八  
粹 敬 吾 羅 雪 楓 キ つ こ 雲 さ 紀 代 くら 雪 千 代 文

和 米 山 矢 矢 村 宮 升 藤 藤 日 樋 長 長 西 西  
田 澤 本 野 倉 上 本 成 田 井 野 口 谷 谷 村 内  
つ 俣 半 五 玄 かり 泰 一 冬 春 り 朋  
づ 子 錢 梓 月 也 ん 好 子 二 虹 蘭 彰 つ え 月  
や

明けましておめでとうございます

# 竹原川柳会

平成十六年 元 旦

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

山正福沖三古藤古石岡森岩時小  
ほか内畑島浜宅田解谷原本井本広島  
か房半万正不太静節淑清菁笑一蘭  
会子覚年宏朽虚風夫子水居子路幸  
員一同



明けましておめでとうございます  
ことしもよろしくお願い致します

## 米子 川柳塔きゃらぼく

|        |       |       |        |        |        |        |        |       |
|--------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 木村 富美子 | 門脇 晶子 | 鹿島 蘭  | 大塚 恵子  | 猪森 スミエ | 石中 時子  | 池尾 保子  | 足立 由美子 | 青戸 田鶴 |
| 中井 ゆき  | 田中 亜弥 | 白根 ふみ | 塩谷 八重子 | 澤田 千春  | 佐々野 紫泉 | さえき やえ | 小村 てい子 | 木村 春枝 |
|        | 八木 千代 | 光井 玲子 | 政岡 日枝子 | 二岡 初枝  | 福代 天雀  | 林 瑞枝   | 野坂 なみ  | 中野 弘子 |



明けてまして

おめでとうございます

香川県東かがわ市白鳥

## 川柳塔おっぱこ吟社

会長 木村 あきら

会員 角尾 いさむ

副会長 成重 放任

辻上 よしみ

会計 川崎 ひかり

甚古 正雪

同人 工藤 吟笑

堤 くに子

池内 かおり

向山 治延

神保坊 太郎

山崎 初恵

滝井 勝

松村 輝夫

原 賢

赤沢 貞月

伊勢 八重子

中塚 寿々女

明けてましておめでとうございます

## 城北川柳会

会長 吐田 公一

会員 一同

月例会 毎月第3土曜日 午後1時



明けましておめでとうございます

# エイシス東大阪

講師 河内天笑

|       |       |      |       |      |      |      |       |       |      |       |      |       |       |
|-------|-------|------|-------|------|------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|
| 佐々木紀典 | 坂本夏代  | 坂上高栄 | 古手川光  | 熊代菜月 | 國見蘭香 | 吉川寿美 | 神原まさと | 川久保睦子 | 笠井欣子 | 岡本訓也  | 伊藤博仁 | 井尻民   | 生嶋ますみ |
|       | 米田志津子 | 山本宏至 | 山口美津子 | 安永春  | 松井敏子 | 松井秀夫 | 堀富重   | 星野きらり | 西川更紗 | 中村トミノ | 中岡妙  | 飛永ふりこ | 鈴木トヨ子 |

明けましておめでとうございます

# NHK川柳教室

|      |       |       |      |      |       |       |      |      |      |
|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|------|
| 田中節子 | 前たもつ  | 鴨谷瑠美子 | 三品征子 | 海老池洋 | 指宿千枝子 | 黒田能子  | 藤井正雄 | 北畑金治 | 橘高薫風 |
| 江見見清 | 矢倉五月  | 古今堂蕉子 | 三木愛子 | 北野哲男 | 井上信子  | 緒方美津子 | 井上松煙 | 野下之男 | 志田千代 |
| 角谷克治 | 久保田千代 | 池上清治  | 莊司弘之 | 山田耕治 | 南原正和  | 福田満州  | 岩屋美明 | 安達忠央 | 大崎侑子 |

明けましておめでとうございます

# いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ 方

TEL 0853-22-1068

あけましておめでとうございます

# 翠 洋 会

|   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 橘 | 安土 | 穴吹 | 居谷 | 井上 | 梅田 | 榎本 | 榎本 | 大川 | 太田 | 岡本 | 奥田 | 古今 | 児玉 | 清水 | 住谷 | 高杉 | 田中 |
| 高 | 理  | 尚  | 真  | 照  | 宣  | 日  | の  | 桃  | 昭  | 久  | み  | 堂  | 蕉  | 絹  | 石  | 千  | 正  |
| 薫 | 恵  | 士  | 子  | 子  | 司  | 出  | 夢  | 花  | 峰  | 峰  | つ  | 子  | 子  | 蛙  | 舟  | 歩  | 坊  |

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 谷口 | 津村 | 坪井 | 寺井 | 天正 | 中澤 | 長浜 | 中村 | 西出 | 長谷川 | 藤井 | 安永 | 矢野 | 山本 | 米田 | 渡部 | 渡辺 |
| 義  | 志  | 孝  | 東  | 千  | 伽  | 美  | 叡  | 楓  | 会   | 正  | 春  | 良  | 希  | 恭  | さと | 富  |
| 子  | 華  | 一  | 雲  | 梢  | 羅  | 籠  | 子  | 楽  | 美   | 雄  | 一  | 一  | 久  | 昌  | 美  | 子  |

明けまして

おめでとうございます

# 川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

会員 一同

## 事務局

〒680-0033

鳥取市二階町三一〇二―二

植田 一京方

例会 毎月第四日曜日 十三時

JR鳥取駅構内

(シヤミネ会議室)

(四月・十二月は吟行会大会)

謹賀新年

## 川柳塔 唐津支部

田口 虹汀 市丸 晴翠

井上 勝視 仁部 四郎

久保 正剣 宗 水笑

樋口 輝夫 坂本 兵八郎

岩崎 實 山口 高明

新年おめでとうございます

# 川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

会 長    山 本   三   郎

事務局   高 田   博   泉

新春のご挨拶を申し上げます

# 川 柳 藤 井 寺

会 員 一 同

明けましておめでとうございます

平成16年   元   旦

「春はくろぼこ川柳大会」主催の

## くろぼこ川柳会

(他  
会  
員  
一  
同)

森  
川  
あ  
ら  
た

前  
坂  
な  
お  
美

平  
尾  
菜  
美

武  
田  
帆  
雀

鈴  
木  
公  
弘

会  
長

明けましておめでとうございます

## 東大阪市川柳同好会

会 長 片 岡 湖 風

副会長 澤 村 猪太郎

会 計 森 下 愛 論

会 員 一 同

謹んで新年のご祝詞を申し上げます

## 高槻川柳サークル卯の花 一同

例会 毎月第三木曜日 正午 高槻現代劇場306号室

明けましておめでとうございます

## 南 大 阪 川 柳 会

会 員 一 同



明けてまして

おめでとうございます

## 熊本川柳会

高野宵草

永田俊子

岩切康子

賀春

## 岸和田川柳会

岩佐ダン吉

原さよ子

島崎富志子

不破仁緑

田中文時

寺田甚一

井伊東吉

田中穰一

小島笑司

中島寿海

長谷川呂万

宮地一修

堂免路子

加藤基

原苑子

宮野美津江

仲谷弘子

藪野けい子

土橋房枝

芳地狸村

平成十六年 正月

新年おめでとうございます

## 西宮ローズ川柳会

おかげさまをもちまして、句報100号を記念して  
合同句集第2号を発刊いたします。

橘高薫風

秋元てる

飯西ミサヲ

岩倉キク子

奥田みつ子

小倉藍

亀岡哲子

菊池トミエ

木村貴代子

久保まさお

坪井孝一

那賀島雅子

長浜美籠

西口いわゑ

春城武庫坊

春城年代

山崎君子

山崎君子

山本義子

あけましておめでとうございます

## 鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木 公弘

会 員 一 同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364

安田方 春 木 圭一郎

TEL 0857-24-2834

明けておめでとうございます

### おたまじやくし川柳会

赤 塚 楽 天

助 川 和 美

堤 檣 代

中 岡 香 代

林 力 子

森 元 ふみよ

雪 本 珠 子

土 橋 房 枝

山 本 蛙 城

〒596  
0076 岸和田市野田町一―六―二

土 橋 方

TEL (〇七二四) 三八―三三〇八

謹 賀 新 年

尼崎川柳協会加盟

尼崎  
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

一月例会のみ一月九日

サンシビック尼崎三階  
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎  
尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後一時半

尼崎市尾浜二丁目五―八

尾浜公民館

(阪急武庫之荘北側③乗り場  
市バス48尾浜二丁目下車)

両会共各地会案内に

掲載しています



あけましておめでとうございます

## かわはら川柳会

|         |        |        |        |         |        |        |        |        |        |        |        |
|---------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 山<br>尾  | 渡<br>辺 | 山<br>田 | 漆<br>原 | 漆<br>原  | 西<br>田 | 国<br>本 | 谷<br>口 | 田<br>中 | 前<br>田 | 谷<br>口 | 上<br>田 |
| かず<br>恵 | 道<br>子 | 雅<br>予 | 登<br>生 | 余<br>吏子 | 静<br>子 | 悦<br>子 | 寿<br>子 | 好<br>道 | 聰      | 泰<br>良 | 俊<br>路 |

明けましておめでとうございます

## もくせい川柳会

|        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 山<br>門 | 安<br>永 | 宮<br>田 | 藤<br>井 | 広<br>島 | 野<br>島 | 辻<br>川 | 玉<br>置 | 玉<br>置 | 田<br>中 | 住<br>谷 | 進<br>藤 | 児<br>玉 | 源<br>田 | 黒<br>川 | 岸<br>田 | 河<br>井 | 唐<br>住 | 檜<br>谷 | 粕<br>屋 | 江<br>見 | 岩<br>崎 | 阿<br>萬 | 安<br>藤 | 橘<br>高 |
| タ<br>ミ | 緑<br>春 | 則<br>彦 | 巴<br>子 | 満<br>寿 | 慶<br>子 | 英<br>子 | 重<br>人 | 正<br>坊 | 石<br>舟 | 千<br>津 | 啓<br>蛙 | 紫<br>香 | 知<br>香 | 庸<br>佑 | 郁<br>実 | 都<br>子 | 都<br>子 | 見<br>清 | 玲<br>子 | 萬<br>子 | 壽<br>美 | 薰<br>風 |        |        |

毎月第3月曜日に定例会を開いております

明けましておめでとうございます

## サークル 檸檬

|             |        |        |        |             |        |        |             |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|-------------|--------|--------|--------|-------------|--------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 吉<br>田      | 山<br>本 | 山<br>口 | 山<br>本 | 前           | 西<br>村 | 西<br>出 | 西<br>口      | 長<br>浜 | 鶴<br>田 | 田<br>中 | 嵯<br>峨 | 久<br>保 | 片<br>岡 | 奥<br>田 | 浅<br>野 | 橘<br>高 |
| あ<br>ず<br>き | 義<br>子 | 光<br>久 | 希<br>久 | た<br>も<br>つ | 哲<br>夫 | 楓<br>楽 | い<br>わ<br>ゑ | 美<br>籠 | 遠<br>野 | 正<br>坊 | 保<br>子 | 千<br>代 | 智<br>恵 | み<br>つ | 房<br>子 | 薰<br>風 |

## 募集

### 第2回 現代川柳大賞

対象／新作10句

応募は一人一口に限ります。

表題をつけて下さい。「無題」も可

用紙／B5判原稿用紙（便箋も可）

応募料／千円（切手代用可）

締切日／二〇〇四年五月三十一日

宛先／〒567-0009

茨木市山手台4丁目6 3・101

川柳展望編集所

発表／第8回川柳展望全国大会

「川柳展望」119号

表彰／現代川柳大賞一名（記念楯と副賞）

同 準賞若干名（記念楯）

同 佳作若干名（記念楯）

〈審査員〉

門脇かずお、金築 雨学、草地 豊子

佐藤 岳俊、新家 完司、高瀬 霜石

津田 暹、なかはられいこ、天根 夢草

謹賀新年

河内長野

## 長柳会

加 島 由 一

水 谷 正 子

村 上 直 樹

山 岡 富美子

石 堂 潤 子

明けておめでとうございます

## 川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

# 大阪川柳人クラブ

会長 礒野 いさむ

副会長 橘 高 薫 風

幹事長 坂 本 晴 美

総務 長 浜 美 籠

会計 川 原 清 宏

事務局 大 堀 正 明

謹 賀 新 年

## 川柳塔まつえ吟社

同 人 一 同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒 松 町 紅 方

電話 0852-24-5450

明  
け  
ま  
し  
て  
お  
め  
で  
と  
う  
ご  
ざ  
い  
ま  
す

### はびきの市民川柳会

安芸田 榎 本 吐 泰 子  
酒 井 一 壺 来  
塩 満 一 敏  
鈴 木 い さ お  
徳 山 み つ こ  
仲 谷 真 一  
永 田 章 司  
西 村 り つ え  
濱 口 フ ジ  
福 田 悦 子  
三 好 専 平  
森 下 一 久 仁 雄  
吉 他 一 同

謹 賀 新 年

# 川柳塔おおとり

会長 小林 由多香  
他会員一同

〒680-0805 鳥取市相生町 1-110  
TEL. 0857-23-1170

明けましておめでとうございます

## 京 都 塔 の 会

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

## ほたる川柳同好会

中 宇 北 前 多 小 水 藤 宮 唐 寺 江 米 出 高 田 二 栗 田 藤 椋 嵯 前 富 藤 井 橘  
ほ 山 山 川 田 田 牧 野 沢 田 住 井 見 原 口 嶋 辺 ノ 倉 田 中 原 山 根 田 永 村 上 高  
か 春 禮 や い 契 信 黒 長 祿 柳 見 雪 セ 正 久 蛭 桂 祥 保 昭 敵 メ 直 薫  
会 代 子 エ む 子 男 兎 一 骨 実 童 清 子 子 勝 郎 う 子 柳 子 風 子 子 女 次 風  
員 同

定例会会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛭池公民館

明けましておめでとうございます

## 川 柳 塔 な ら

|                  |             |        |        |             |        |        |        |        |        |        |                  |
|------------------|-------------|--------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------------------|
| 飛                | 安           | 渡      | 居      | 清           | 宮      | 吉      | 大      | 坊      | 米      | 中      | 宮                |
| 永                | 土           | 辺      | 谷      | 水           | 西      | 川      | 内      | 農      | 田      | 原      | 口                |
| 会<br>員<br>一<br>同 | ふ<br>り<br>こ | 理<br>恵 | 富<br>子 | 真<br>理<br>子 | 絹<br>子 | 弥<br>生 | 寿<br>美 | 朝<br>子 | 柳<br>弘 | 恭<br>昌 | 比<br>呂<br>志<br>生 |

明けましておめでとうございます

## 川 柳 塔 み ち の く

|                            |                  |                       |                  |             |                       |                  |                       |                  |                  |                  |                            |                       |                  |                  |             |
|----------------------------|------------------|-----------------------|------------------|-------------|-----------------------|------------------|-----------------------|------------------|------------------|------------------|----------------------------|-----------------------|------------------|------------------|-------------|
| 会<br>計                     | 監<br>事           |                       | 理<br>事           | 顧<br>問      | 相<br>談<br>役           | 副<br>主<br>幹      | 主<br>幹                |                  |                  |                  |                            |                       |                  |                  |             |
| ほ<br>か<br>同<br>人<br>一<br>同 | 相<br>馬<br>一<br>花 | 小<br>枝<br>ふ<br>さ<br>ゑ | 相<br>馬<br>銀<br>波 | 田<br>中<br>叶 | 肥<br>後<br>和<br>香<br>子 | 浅<br>田<br>隆<br>樹 | 佐<br>治<br>千<br>加<br>子 | 福<br>士<br>慕<br>情 | 櫻<br>庭<br>順<br>風 | 岩<br>渕<br>黙<br>人 | 波<br>多<br>野<br>五<br>楽<br>庵 | 森<br>中<br>恵<br>美<br>子 | 工<br>藤<br>甲<br>吉 | 小<br>寺<br>花<br>峯 | 斉<br>藤<br>昴 |

明けましておめでとうございます

## 打 吹 川 柳 会

会 長 牧 野 芳 光 ・ 会 員 一 同

事務局 〒682-0924 倉吉市河原町1879

高 多 博 丈 方

電話 0858-22-6128

新年おめでとうございます

## 八尾市民川柳会

会 員 一 同

明けましておめでとうございます

## 川 柳 若 葉 の 会

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 吉 | 山 | 宮 | 宮 | 宮 | 古 | 中 | 永 | 辻 | 黒 | 太 | 橘 |
| 田 | 内 | 本 | 崎 | 崎 | 川 | 井 | 浜 | 川 | 田 | 田 | 高 |
| あ | 香 | 欣 | シ | 弘 | 喜 | ア | 加 | 慶 | 能 | 扶 | 薫 |
| ず | 住 | 史 | マ | 直 | 美 | キ | 津 | 子 | 子 | 美 | 風 |
| き |   | 子 | 子 |   | 子 |   | 子 |   |   | 代 |   |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 藤 | 坂 | 砂 | 井 | 篠 | 乾 | 八 | 山 | 中 | 神 | 村 | 吉 | 生 | 松 | 平 | 川 |
| 本 | 本 | 田 | 尻 | 原 | 倉 | 本 | 島 | 原 | 上 | 村 | 嶋 | 葉 | 川 | 崎 |   |
| 一 | 奈 | 八 | い | 美 | 知 | 宏 | 春 | ま | ミ | 一 | ま | 君 | 幸 | 友 |   |
| 道 | 良 | 寿 | つ | 代 | 佐 | 至 | 江 | さ | ツ | 風 | す | 江 | 枝 | 甫 |   |
|   | 司 | 子 | ふ | 子 | 子 |   |   | と | 子 |   | み |   |   |   |   |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |  |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|
| 田 | 笠 | 星 | 山 | 寺 | 渡 | 西 | 赤 | 本 | 脇 | 杉 | 馬 | 増 | 江 | 太 |  |
| 辺 | 井 | 野 | 内 | 川 | 辺 | 川 | 木 | 田 | 本 | 本 | 場 | 田 | 波 | 田 |  |
| 浩 | 欣 | き | キ | は | 順 | 義 | 妙 | た | 俊 | 晴 | 道 | 正 | 恭 | 一 |  |
| 三 | 子 | ら | ク | じ | 生 | 明 | 子 | え | 子 | 美 | 宏 | 子 | 純 |   |  |

川柳クラブ

わたの花

明けまして

おめでとうございます



あけましておめでとうございます

# 岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒689-0003 鳥取県岩美郡岩美町浦富1504

TEL 0857-72-1388

おめでとう  
岩美川柳会

朝日カルチャー  
はじめての川柳  
板尾炎

あけまして  
おめでとう  
ございます

新年賀状に  
岩美川柳会  
板尾炎

謹 賀 新 年

## 富 柳 会

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 池 | 梶 | 田 | 田 | 吉 | 羽 | 渡 | 西 | 中 | 小 | 大 | 中 | 藤 |
|   | 原 | 中 | 中 | 田 | 田 | 辺 | 村 | 崎 | 野 | 橋 | 井 | 岡 |
| 森 | キ |   |   | 亮 | 洋 | 奈 | 夕 | 深 | 紅 | 鐘 | ア | 花 |
| 子 | ミ | 誠 | 勇 | 幹 | 介 | 保 | 子 | 雪 | 紫 | 造 | キ | 梢 |
|   | エ |   |   |   |   | 美 |   |   | 朗 |   |   |   |

あけましておめでとうございます

### 三 幸 川 柳 教 室 一 同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜 井 千 秀

新春 おめでとうございます

### 川 柳 さ さ や ま 一 同



# 柳界展望

紅葉狩童女にかえる車椅子

○第17回NHK学園全国川柳大会は、11月1日くたち市民芸術小ホールで開催された。事前・当日投句の本社同人の成績は次の通り。

○第30回堺まつり協賛誌上

川柳大会は、160名参加を得て10月15日締切られた。本社同人天位は次の通り。

どの色を溶いても白に負けている 山本希久子

何もせぬふたり存在感がある 太田扶美代

連名の薔薇の絵手紙はじけそう 石堂 潤子

○10月19日東大阪市民川柳大会は、社会教育センターで開催された。

「市教育委員長賞」

あるがまま生きて河内の水が合う 宮西 弥生

○出口セツ子さん(箕面市)は第5回横光利一俳句大会に入選。11月1日大分県宇佐市で表彰された。

味 出口セツ子

○城北川柳会では、平成15年度年間賞を津村志華子さんが獲得した。

○平成15年読売新聞とつとり文芸川柳年度賞が決定した。

「年度賞準賞」

代理出産わたしのママは誰なのよ 猪川由美子

「優秀賞」

満点の春に頬擦りしたくなる 蔵本 悦子

○NHK学園生涯学習フェスティバル、第12回根上川柳大会で同人の石堂潤子さん(河内長野市)が受賞。

「大会大賞」

的少しずれて陽気な妻である

▼同人動向▲

☆高瀬霜石氏(弘前市)のエッセー「創作のつばき」

が11月7日の東奥日報に掲載された。他に氏は地元ミニコミ誌や、たかね川柳会

誌にエッセーを連載中。また地元ラジオで毎日10分の川柳の話放送。

☆岐阜県の中山道みたけ館

では、11月9日・12月23日まで「川柳と漫画による近代庶民史」展を開催。川柳

界から井上剣花坊・阪井久

良枝・鶴彬・東野大八の4氏が取上げられた。

☆11月7日の川柳塔みか月

川柳大会へ参加のため、薫風名誉主幹・天笑主幹・岳

人理事長・みつ子副主幹・

蘭幸・たもつ副理事長他8名が鳥取県鹿野町行。

☆榎本舞夢さん(大阪市)

は、第26回日本美術工芸会展の刺繍の部で努力賞を獲得。この展覧会は11月19日

・24日まで大阪市美術館で開催された。

☆播本充子さん(理事・八王子市)は、平成16年2月

「川柳塔かんとく」(仮称)を発足の予定。関東在住の

川柳塔社同人を中心に鋭意準備中。連絡は04426-6513172(既共)充子宛

▼計 報▲

■門谷義文氏(門谷たず子さん夫妻・西宮市)は、11月12日逝去。86歳

■垂井千寿子さん(元同人・和歌山市) 10月20日逝去。77歳

常任理事会は12月8日(月)出席17名 ①文書提案に対する回答 ②合同句集進行報告と係を決定 ③合祀祭会

計報告 ④創刊80周年大会・第10回まつりの選考、記念品等検討 ⑤その他

次回常任理事会は11月10日

(土)9時からアウイナ207号

●誌友拡大のための「川柳塔」バックナンバーを「希

望の方は、事務所までお申し出下さい。誌代無料、送

料のみの負担でお送りします。ただし号数の指定はご遠慮願います。

| 句 会 名         | 日 時 と 題                               | 会 場 と 投 句 先                                                   |
|---------------|---------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 堺川柳会          | 15日(木)午後1時から<br>猿(共選)・雪<br>さ・し・み(折り句) | 堺市総合福祉会館<br>〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑                       |
| 城北会<br>川柳会    | 17日(土)午後1時から<br>一歩・どきどき・シリーズ<br>自由吟   | 中宮老人憩いの家<br>地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分<br>〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子 |
| 倉吉会<br>川柳会    | 17日(土)午後1時から<br>叫び・聖地・幸               | 倉吉市 明倫公民館<br>〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17<br>谷口次男            |
| 岸和田会<br>川柳会   | 17日(土)午後1時半から<br>不意・平気・妨害・舞う          | 市立福祉総合センター2F<br>南海線岸和田駅東歩3分<br>〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村   |
| 川柳会<br>ねやがわ   | 18日(日)正午から<br>声・乾盃・七福神                | 寝屋川市民会館<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉                          |
| 川柳会<br>藤井寺    | 18日(日)午後1時から<br>音(共選)・ハガキ             | (1月会場変更) 友栄<br>〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子                 |
| 岬川柳会          | 18日(日)午後1時半から<br>それから・二の次・問題<br>自由吟   | 岬町 みさき苑ふれあいセンター<br>〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592<br>八十洞庵           |
| もくせい<br>川柳会   | 19日(月)午後1時から<br>奉仕・火種・変わる・自由吟         | 豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分<br>〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊       |
| 川柳クラブ<br>わたの花 | 23日(金)午前10時から<br>恥・しみじみ・歳月・追う         | 八尾市生涯学習センター<br>〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風                  |
| 東大阪市<br>川柳同好会 | 24日(土)午後6時から<br>平凡・サービス・打つ・朝          | 東大阪市立社会教育センター<br>近鉄布施駅北長堂小学校隣<br>〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風  |
| はびきの<br>市民川柳会 | 25日(日)午後1時から<br>挨拶・きっちり・ワルツ<br>「広場」   | 羽曳野市立陵南の森公民館<br>近鉄高鷲駅北東徒歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏  |
| 川柳会<br>ふうもん社  | 25日(日)午後1時から<br>猿・ゼロ・合併               | JR鳥取駅構内 シャミネホール<br>〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京               |
| 京都<br>塔の会     | 26日(月)午後1時から<br>今・仰ぐ・寿命               | ハートピア京都<br>地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽   |
| 南大阪<br>川柳会    | 28日(水)午後6時から<br>胃・曲・志・血               | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分<br>〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲      |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

# 1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

| 句 会 名                 | 日 時 と 題                               | 会 場 と 投 句 先                                                            |
|-----------------------|---------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 川 柳 塔<br>唐 津          | 5日(月)午後1時半から<br>ルーズ・墨・みえみえ            | 唐津市 栄町公民館<br>〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑                               |
| 川 柳 塔<br>な ら          | 8日(木)午後1時から<br>待つ・朝・初物                | 奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分)<br>〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6<br>渡辺富子         |
| 尼 崎<br>いくしま           | 9日(金)午後1時から<br>明るい・猿(申)・雑詠(A・B)       | サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分<br>〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代                |
| 富 柳 会                 | 10日(土)午後1時から<br>輝く・餅・自由吟              | 富田林中央公民館<br>(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m)<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子      |
| 川 柳 塔<br>打 吹          | 10日(土)午後1時から<br>活気・あつあつ・背負う           | 倉吉市上灘町 上灘公民館<br>〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈                              |
| 川 柳 塔<br>ま つ え        | 10日(土)午後1時半から<br>神・猿・初・丸              | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘                           |
| 川 柳 塔<br>みちのく         | 10日(土)午後4時から<br>旗・赤・ほがらか              | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」<br>〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵               |
| 八尾市民<br>川 柳 会         | 11日(日)午後1時から<br>頭・動く・盛大・雑詠            | 山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅)<br>〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子             |
| 川 柳 塔<br>わかやま         | 11日(日)午後1時から<br>カタログ・猿・膨れる<br>「とき(時)」 | 近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前<br>〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良                  |
| 川 柳 塔<br>みぞくち         | 12日(月)午前10時半から<br>猿(申)・正月一切・雑詠        | 神奈備会館<br>〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3<br>小西雄々                            |
| 西宮北口<br>川 柳 会         | 12日(月)午後1時から<br>配る・内・押す・自由吟           | 西宮市立中央公民館<br>阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや<br>〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ |
| ほたる<br>川 柳<br>同 好 会   | 13日(火)午後1時から<br>一・燃える・熱い              | 豊中市立蛸池公民館<br>阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F<br>〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼          |
| 尼 崎<br>尾 浜<br>川 柳 会   | 13日(火)午後1時半から<br>福・盃・自由吟              | 尼崎市立立花公民館 尾浜分館<br>阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車<br>〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太 |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卵 の 花 | 15日(木)正午から<br>招く・出発・姿・割烹着<br>自由吟      | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分<br>〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑                    |



# 編集後記

☆明けましておめでとございます。12月号で予告し本号で募集しているように、

『川柳塔』創刊八十周年記念合同句集を出版します。本号から4月号まで最終頁に応募用紙を綴込みますが、11月からチラシも配布していますので、こちらもご利用下さい。

☆昨年10月に高齢者の仲間入りをした。何かトクすることがあるのかと期待していたら損ばかり。まず、介護保険料の支払決定書がきた。次いで、遺族厚生年金の中高齢加算額がなくなり、約12%減との通知。歳をとれば粗衣粗食をして、遊興はつつしみなはれ、とのお達しか。

☆厚生労働省の最新の統計によると、日本人の平均寿

命は女性が85・23歳で、男性が78・32歳の事である。今から100年前、日露戦争があった明治37年は女性が44・85歳、男性が43・97歳だった。

☆1582年、織田信長が明智光秀に攻められ、本能寺で自刃の直前に舞ったといわれる「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢まほろしの」(敦盛)の頃の寿命にも足りないのだから、この100年間の寿命の延びはすごいと言ひかねない。

☆半分水を飲んだコップを見て、「もう半分しかない」と、「まだ半分残っている」と二通りの考えがある。前者はマイナス志向、後者はプラス志向である。高齢者になったこれからは、何事もプラス志向に考え、介護保険のお世話にならずに生きて行きたい。国も色々大変たろうから……。

(ふ)

## ひとこと

### 句碑雑感

一度は訪れたいと思っていた鶴彬句碑に直面することができた。自然石に刻まれた字は読み取りにくい、近寄って見ると「枯れ芝よ団結をして春を待つ 鶴彬」とあった。句碑のある高松町で行われた鶴彬を顕彰する会が主催する碑前祭では、私が大阪からの参加者を代表して献花した。鶴彬が残した風刺川柳の精神を現代に生かすことを願う私たちとしては、先

祖の墓をたずねた思いであった。金沢市の卯辰山公園には、「暁を抱いて闇にある書」を刻んだ句碑があり、こも訪れたが、彼の句碑はもう一か所、墓のある盛岡市にもあり、代表句として知られる「手と足をもいだ丸太にしてかへし」が刻まれているという。機会があればこの句碑も訪れたいし、また、彼が「赤化事件」で収監された陸軍衛戍監獄があった大阪にも、いつの日か句碑を建立したいと思う。

(田中 正防)

○新しい年が平穩無事な一年でありますようお祈り申し上げます。

○一月生まれの私の母はもうすぐ満95歳であるが、昨年十一月半ば恐れていた骨折をしてしまった。ショーティストイの夜の出来事である。トイレに立とうとしてベッドからすべり落ちて、尻餅をついてしまったらしい。骨折部位も老人に一番多い大腿骨のつけ根あたりである。入院して索引処置

のあと、治療方針を聞かされて私は二度驚いてしまった。このまま骨がくっつくのを待つと、二ヶ月以上身体を動かすことができず、寝た切り、褥瘡、内臓衰弱へ進むから、手術をして、一日も早くリハビリに入るのが最善と言われた。

○骨の芯に金属をはめ込む手術という。勿論術前検査はあるものの、体重30kgに満たない枯木の如き95歳が全身麻酔の手術に耐えられるのだろうか、考え、迷い体験者に聞いたり、なかなか同意できずにいたが、結局、医者を信じて、おまかせするほか道はなかった。

○手術は無事終わったものの全身への影響は、かなり大きく、回復は遅れそう。環境の変化による呆けや、昼夜逆転を防ぐため、話しかける努力を続けている毎日である。

(希)

# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

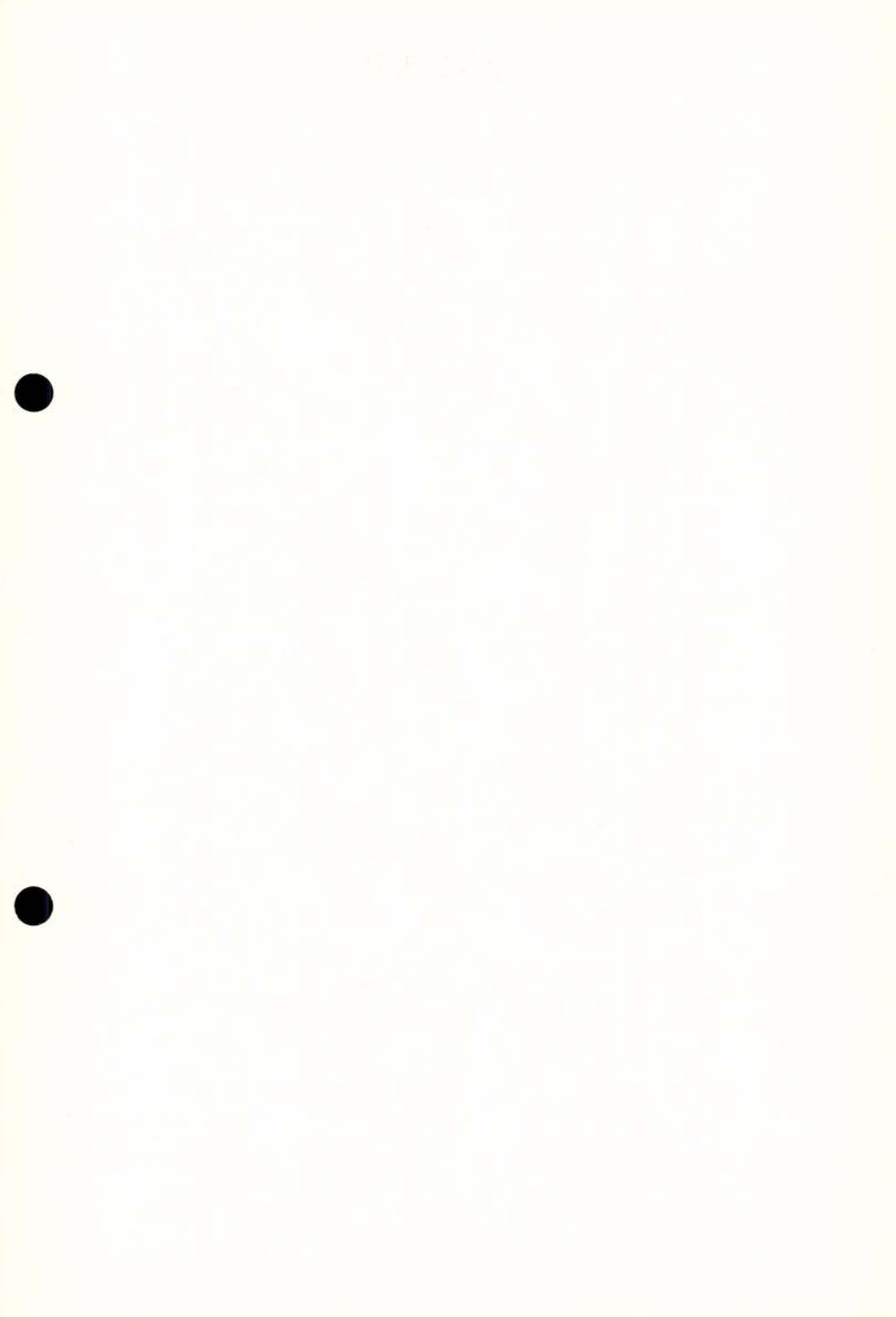
発表（3月号）地名

市 県  
姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

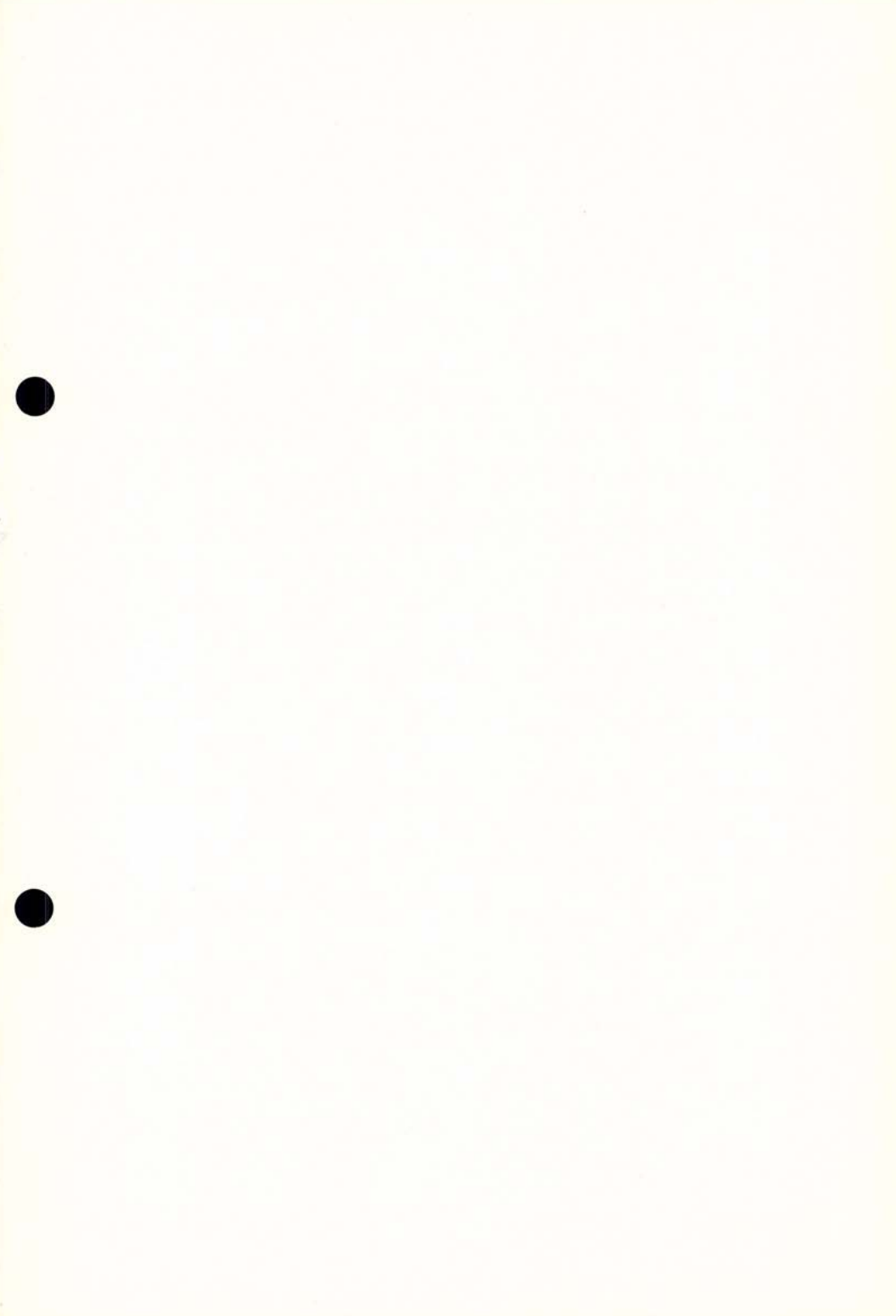


100

Na

川柳塔創刊八十周年記念句集 参加用紙

雅 号 (ふりかな)





## 作品募集

3月号発表 (1月15日締切)

|                 |          |
|-----------------|----------|
| 川柳塔 (8句)        | 河内天笑 選   |
| 水煙抄 (8句)        | 板尾岳人 選   |
| 愛染帖 (3句)        | 波多野五楽庵 選 |
| 茴香の花 (3句)       | 藤田泰子 選   |
| 「ルーズ」           | 黒田能子 選   |
| 「墨」             | 山本益子 選   |
| 「みえみえ」          | 北野哲男 選   |
| 初歩教室 「まさか」 (3句) | 三宅保州 担当  |

4月号  
課題吟 「空間」「看護」  
「強引」  
初歩教室 「椅子」

## 本社1月句会

とき 1月10日(土) 午後1時・2時半締切  
―開催時間にご注意下さい。―  
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東  
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
おはなし  
兼題 「目指す」 橘高薫 風  
「初恋」 志田千代 選  
「白」 平松かすみ 選  
「酒」 西口いわゑ 選  
「おもしろい」 河内天笑 選  
席題 1題 当日発表 (各題2句以内)  
会費 1000円 投句料 5000円

本社2月句会 6日(金) 午後1時から  
兼題 「鳴る」「ラーメン」「痛み」  
「雪」「這う」

## 第22年度 夜市川柳募集

第8回「群れ」 奥山晴生 選  
ハガキに3句 1月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

### 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいただけます。

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇四年(平成十六年) 一月一日発行

編集兼 河内権治

印刷所 美研アクト

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1691 四番

振替 〇〇九八〇一五三三六八番

医療法人社団

ISO 9001 : 2000 認証取得

# 湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分

## 全日本川柳誌上大会のご案内 (柳多留第九集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(柳多留第九集)を開催します。日川協下次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と選者 (各題2句・連記)

「屋根」 進藤すぎの 橋爪まさのり 共選

「中身」 板尾 岳人 深町 金鳥 共選

「ギャラ」 福島 直球 廣島 英一 共選

「他」 和田 宏 荻野美和子 共選

「留守」 新畑ひろし 奈倉 楽甫 共選

第二次選者 磯野いさむ 橋高 薫風 大野 風柳

斎藤 大雄 松岡 葉路

参加費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第9集代)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

(財)日本青少年育成協会会長賞・(財)全日本川柳協会会長賞

全日本川柳誌上大会賞・秀作賞(予定)

締切 平成16年1月20日(火)〈当日消印有効〉

発表・表彰 第28回全日本川柳埼玉大会(平成16年6月)

参加方法 参加用紙(雑誌1句)と出句用紙(2通1組)

に記入し、参加費2000円(振替又は小為替)

とともに左記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目11番702

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210  
FAX (06) 6352-2433